

夢うつつ

pathfinder

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夢か現か

その区別がつかず、ぼんやりとしている

そんな夜のお話

目次

夢うつつ	1
ブルーゲンビルア	11
電燈	24
ペトリコール	35
虹の根元	46
花火	57
夢の続き	68
ミラージュ	79
スリーピングビューティー	90
微睡んでいたい	104
温度差	116
春の匂い	128

remember	139
ミルク	152
燦々	162
夢の終わり	175
電灯	185
うつつ	194
また、明日。	206
ジャスミン	216
センタク	226

夢うつつ

「……………」

薄暗い灯りが意識が覚醒したばかりのぼんやりとした視界に入る。眠りから目覚めた。

頭を動かさず、辺りを見回す。頭上には茶色が見えた。天井じゃない。おそらく木の板だろう。……すぐに近くにあった梯子の存在に気付き、これが二段ベッドだとわかる。見慣れない景色が広がっている。

段々と思考がクリアになり、ここが自分の家ではないと気づく。じゃあ、ここはどこだ。

仄かな灯りの近くに誰かがいる。椅子に腰をかけて机に向かっている。このベッドからは背中しか見えない。顔は見えなくてもその誰かが誰なのか、すぐわかった。

彼女も俺が目覚めたことに気付いて身体を捻って顔をこちらに向ける。オレンジブラウンの髪が揺れる。

「あ、目が覚めたんだ〜？」

聞き慣れたゆつくりとした、眠たげな声。近江彼方さんが微笑んで俺に囁きかけてきた。

「……ああ、おはよ」

「おはよ……まだ朝じゃないけどね」

意外な光景だ。どちらかといえば普段は俺が彼女を起こす方だ。立場が逆転している。

部屋にかけられた時計をちらりと見る。彼女の言う通り、朝じゃない。それどころかまだまだ夜だ。時刻は日付変わって一時間近く経っていた。彼女は今日も遅くまで勉強していたのだろうか。

「ぐっすりだったねえ」

「……俺寝ちゃったのか？」

「そうだよ」

段々と俺は寝てしまう前のことを思い出す。今日も両親がいなくて夕飯が弁当なんです、というのを彼方さんに話したら近江家の夕飯にご招待されたんだ。彼方さんと遙ちゃんと三人で食事をして、その後、近江家でゆつくりして……ああ、多分その後寝ちゃったんだ。意識があやふやになっていたのをなんとなく覚えてる。

俺が最後に時計を見たときの時刻が八時頃だったから、五時間近く寝てたことにな

る。俺は彼方さんの言う通り、ぐっすり寝ていたのである。

「あれ？ 俺なんでベッドで寝てるんだ……？」

俺はゆつくりと上半身を起こしながら彼方さんに尋ねた。

俺にベッドに潜った記憶はない。なんなら俺がベッドを借りた覚えもない。なんで俺はベッドに？ というか今俺が寝ているベッドは誰のだ？ なんかいい匂いするし。

「それはだね……遙ちゃんと一緒にベッドまで運んだからだよ」

「……それは……すみませんでした」

「女の子二人で運ぶのはほんと大変だったよ。ちよつと引きずつちやったけどね」

彼方さんは申し訳なさそうにする。いや本当に男を女の子二人で運ぶのは大変だろう。引きずつちやうわ。ちよつとじゃなくてがつつり引きずつちやうわ。すぐ想像できる。むしろ俺の方が申し訳なさでいっぱいになった。

「ほんとだね、彼方ちゃん一人で運ぼうと思ったんだけど……」

うんそれは流石に無理だろう。遙ちゃんにも悪いことをさせてしまった。今は寝ているだろうし、朝になったらお礼と謝罪しよう。

「……ちなみにこのベッドは誰の？」

「彼方ちゃんのだよ」

「!?」

このベッド、彼方さんのなのか。思わず驚いてしまう。確かにいい匂いがした。ずっと嗅いでいたいと思ってしまうぐらいの。

「ごめんっ、すぐ起きるっ」

俺はずっとこのままベッドにいたいという誘惑を断ち切り、すぐに起きてベッドから退こうとした。本音ではこのままいたいがこのままいれば変な気持ちになりそうだった。具体的には下心的な。上には遙ちゃんがいるだろうし、それは不味い。いや遙ちゃんがいなくてもそれは駄目なんだけど。

「ダメだよ。君はそのままベッドにいてね」

「……………え？」

続けて彼方さんは口を開く。俺の考える時間はなかった。

「彼方ちゃんも一緒に寝るから」

「……………はい？」

なんだろう、彼方さんの言っていることが信じられない。一緒に寝る。その意味を咀嚼する。俺と、彼方さんが、一緒にのベッドで、眠る。

「!? ちよ、ちよつと待ってくれっ！」

彼方さんの発言をなんとか理解した俺は取り乱してしまふ。

「待たないぞー。あと遙ちゃん上で寝てるから静かにね」

「あ、はい、すみません……って」

彼方さんは俺にお構いなしにテキパキと机の上を片付け、卓上のライトスタンドの灯りを消す。その動作はあつと言う間で、俺が気を取られている間に、彼方さんは今にもベッドに侵入してきそうだった。

「ほらほら、彼方ちゃんのスペースを空けて」

そう言いつつ、ベッドに手をかける彼方さん。侵入してくる。彼女の身体に触れないように反対側に身体を動かしてなんとか彼女が入るスペースを作る。

「それじゃあ、失礼しまーす」

その空間に彼方さんが入ってくる。シャンプーの匂いだろうか。至近距離の彼女からふんわりと甘い香りが漂う。今だけ鼻呼吸を止めたくなった。

「わー、顔近いね〜」

俺のすぐ近くに彼方さんがいる。鼻と鼻がぶつかりそうな距離。息遣いがよく聞こえる。二人だと流石に身じろぎができない。

「……やっぱり狭いんで出ます。だから」

一度彼方さんに起きてほしい、とお願いするつもりだった。しかしそれは彼方さんに遮られてしまう。

「も〜、ダメだぞー。今日は彼方ちゃんと一緒に寝るのだ〜」

むしろ彼方さんは俺の動きを封じるかのようにぎゅう、と抱きついてくる。彼女の温もりが安心とドキドキの二つの正反対の感情をもたらす。

「……わ、わかった。わかったんで少し離れて……」

それがせめてもの抵抗だった。このままだと寝る寝ないとかの前に心臓が持ちそうになかった。

「えー……彼方ちゃん、この体勢結構気に入ったんだけどな〜」

「男の身体なんてごっごっしてて逆に寝にくくないか？」

「そんなことないよー。これはこれで、この硬いのが良い感じだよ〜」

彼方さんは俺の身体を離す素振りはなく、むしろさらに身体を押し付けるように抱きついてくる。

「これだと俺が寝れないんです……」

「むむむ……彼方ちゃんはよく眠れそうなのにく……」

彼方さんは名残惜しそうにしながらようやく身体を引いてくれた。といってもほんの少しだ。密着はしていないが広げたら腕の中には入りそうな距離だ。つまりはあまり変わっていないかった。

「彼方さん、さっきとあんまり変わってないです」

「えー……ちゃんと離れたよ〜。それに、これ以上離れられないよ？ ベッド狭いから

「彼方さんはそれ以上は離れようとはしてくれなかった。果たして再び眠れるだろうか。そう思いつつ、嬉しそうにしている彼女にそれ以上離れるなんて言えなかった。」

「ふあ〜……」

「彼方さんが欠伸を零す。よく眠れそうと言ったのは本当だったみたいだ。いや、よく考えたら彼女はどこでも眠れるか。」

「今日はありがとう。夕飯、俺の分まで用意してもらって」

「彼女が眠ってしまう前に伝えたかったことを伝える。もう今日じゃなくて昨日のことだけで。」

「いいよいいよ。君と一緒に夕食食べる機会なんて滅多にないし」

「あと美味しかった」

「また食べたい〜?」

「もちろん」

「彼方さんにはへらと顔を綻ばせる。薄暗い部屋の中、その表情が眩しく見えた。」

「じゃあ〜……明日。遙ちゃんとか彼方ちゃん、そしてあなた。三人でお出かけしよう〜。お弁当作って公園でピクニックしよう〜」

「明日は休日。俺も予定はないので大歓迎なのだが。」

「……俺も一緒でいいの？」

遙ちゃん二人つきりで過ごしたいのではないかと、思ってしまったってそんなことを言ってしまう。

彼方さんの遙ちゃんへの溺愛っぷりを見ると二人だけで過ごしたいと思っただけでも不思議じゃない。そこにお邪魔してもいいのかと思ってしまう。

「とーぜんだよ。むしろ君がいないと」

彼方さんのその言葉にほっと安心。俺はお邪魔虫ではないらしい。

「だって、君は彼方ちゃんの恋人だよ？」

改めて彼方さんの口からそう言われるとこそばゆい気持ちになる。体温が上がった気がした。もう当たり前のことなのに。

「楽しみだなく。大好きな二人とお出かけするの」

「ああ、楽しみだ」

布団の柔らかさと彼女の匂いと身体に残った疲れが眠気を誘う。瞼が閉じて再び開く。その夢うつつの一瞬、楽しそうな光景を見た。

「……本当に楽しみだ」

もう一度繰り返しその言葉を口にした。自分でも思いがけない行動だった。三人で出かける明日がその光景のようになって欲しかったからかもしれない。

もう一度、瞼が落ちる。すぐに開くがなんとなく瞼が重い。

「君も眠そうだね〜……ふあ〜……彼方ちゃんも……」

彼方さんも同じように瞼を重そうにしながら欠伸をしていた。彼方さんも俺もそう遠くないうちに眠りに落ちるだろう。

「こうして一緒なら良い夢見れそうだよ〜……」

心地良さそうに彼方さんは眩きつつ、俺との距離を詰める。抵抗しようかとも思ったが眠気の方が強くてこのままでもいいやと思ってしまう。さては彼方さん、これが狙いだったのか。

引っ付いてきた彼方さんの身体の柔らかな感触が心地よい。眠気が強いせいかさつきと比べてドキドキ感がない。安心感と幸福感が心を満たしていた。

「……やつぱり、この硬さ……安心するなあ……」

「それは、よかった……」

彼方さんはうつらうつら船を漕ぐ。もう半分夢の世界へと旅立っている。

俺だって似たようなもの。もう瞼が開かない。開く気力がない。意識だけはまだなんとか残ってる。もうただ残ってるだけだ。

「……明日……楽しみだねえ……」

彼方さんのその言葉は段々と消えていくように小さくなっていった。言い終えた彼

女はきつともう夢の中。

「すやあ……すう……すう……すう……」

彼方さんが眠る。規則正しい呼吸の音が聞こえる。それが子守唄代わりになって俺の意識も段々と朦朧となる。世界が輪郭を失っていく。

そう言えばおやすみと言うのを忘れていた。もう億劫だから心の中で。日付が変わってるから今日だけど。

おやすみなさい。また明日。

ブーゲンビリア

「それじゃ、ちょっと行ってきますね。お姉ちゃんのこと、よろしくお願いします」

遙ちゃんはそう言って、パタパタと駆けて離れていく。二つに結われた髪が揺れる。

昼下がりの公園。穏やかな日差しが降り注ぎ、なんだか眠りに誘われそうになる。遙ちゃんの姉、彼方さんはそんな陽気のせいか眠ってしまった。俺の膝の上で。

「すやあ……むにやむにや……」

繰り返される規則的な呼吸。彼方さんの表情は穏やか。どうやら夢見はよさそうだ。

昨日、いや今日、ベッドの上で彼方さんと話した通り、公園にピクニックに来ていた。彼方さんと遙ちゃん、それと俺の三人。公園を散策したり、レジャーシートを敷いて座ってお喋りしたり、お弁当を食べたり、穏やかな時間を過ごしていた。

彼方さんがウトウトし出したのはお弁当を食べて少し経った頃だった。そのまま、近くにあった俺の膝を枕代わりにして夢の世界へと行ってしまった。いつもと変わらぬ。彼方さんを見て遙ちゃんも俺も少し笑ってしまったのは内緒だ。

しばらく二人で喋っていたが、その遙ちゃんまで行ってしまった。手持ち無沙汰だ。……と思ったが、その心配はどうやら杞憂のようだ。

「ん……………んん」

瞼がゆつくりと開く。光に慣れるためか、数回瞬きした後、再び瞼が開く。トロンと
していてまだ少し眠そうな瞳。

「ふあ〜……………おはよー……………」

「おはよう」

ゆつくりな口調。彼方さんが目を覚ました。だけど身体は起こさない。彼方さんは
そのまま横になった状態でした。なんで。

「……………あれ〜？ 遙ちゃんは？」

膝枕の状態で彼方さんは首だけを動かしてそのことに気がついたみたいだ。

「あー、えっと……………」

言い淀む。どうやって言おうか。そのまま言うのは憚られる。

「遙ちゃんになにかあったの」

しかしそれがよくなかった。

真剣な表情。いつもの彼方さんとは異なる、早口。彼女の身体が強張ったのが視覚と
膝からの触覚からわかった。

彼方さんは遙ちゃんになにか良からぬことが起きたのかもと思ってしまったみたいだ。

「違う違う。遙ちゃんは……ちよつとお花摘みに」

これ以上勘違いされる前に俺は正直に言う。ぼやかして言うのは許してほしい。女の子がトイレに行った、なんて俺が公共の場で言うのはデリカシーにかける行為だろう。というか恥ずかしい。だからこそ迷いが生まれてしまった。

「あー……そういうことか……焦ったあ」

彼方さんは一転、安堵した表情を見せた。

「ごめん。俺が変に言い淀んだせいで……」

「もー、ほんとだよー」

ちよつと頬を膨らませた姿が可愛らしくて笑ってしまう。申し訳ないとは思っているが。

彼方さんは安心したのか、身体の力が抜ける。心地の良い重みが戻ってきた。

視線を感じて、下を向いて彼方さんを見る。目が合う。なにか発見したかのような表情。

「……じゃあしばらく二人つきりだ」

「うんまあ……だな」

彼方さんがぼつりと眩いた言葉が妙に響く。屋外だつていうのに。

一瞬、風が吹く。たいしたことない、弱い風だ。木々が揺れる、そんな音がした。やけにはつきりと聞こえた。

二人つきり。魅力的なワードだ。正直言うと意識せずにはいられなかった。

「ふあゝあ……」

彼方さんという欠伸をして、また少し眠そうにしていた。遙ちゃんのことで安心したのだろう。にしても俺はこんなにも二人つきりということを意識しているというのに、彼方さんはそんなこと意識していなさそうだった。ちよつと悔しい。

「まだ眠いの？」

「うーん……ちよつとね……」

「また寝るか？」

「それは止めとく」

俺の想定外の回答が彼方さんから返ってきた。驚く。

「あなたと二人つきりだからね」

彼方さんはへにやつとして微笑んだ。俺は開こうとした口をぱくぱくと動かすことしかできなかった。さぞ面食らった顔をしているだろう。

……意識、してないわけじゃないんだ。

「嬉しい?」

「嬉しいよ」

からかうような彼方さんの問いかけ。悪戯つ子のような楽しげな表情。

俺はすぐに白旗をあげた。意地を張りたくもなかったが、わかりやすく表情に出てしまっただろう。

「そっかあ〜……」

彼方さんは嬉しそうに微笑んだ。さつきよりも頬が緩んでいるのがはつきりとわかった。

「ねえねえ。彼方ちゃん、ちょーつと気になったんだけど……」

彼方さんは突然そう切り出してきた。が、俺にはなにも心当たりがない。

「……? なにか?」

「彼方ちゃんが眠っている間、遙ちゃんと二人でなに話してたの?」

純粹に気になったのか、そんなことを彼方さんは尋ねてくる。

やましいことはなにもない。少しだけ、彼方さんにそれを話すのは恥ずかしいが。

「むっ」

俺が話す前に彼方さんはなにか気付いたのかそんな声を上げた。その表情は不満を隠すことなく露わにしていた。口を尖らせて拗ねている。

「……もしかして、浮気〜?」

冷たい口調。

膝で横になつてゐる彼方さんは俺の太ももを抓る。微妙に痛い。

「違うから」

「じゃあ、なにを話してたの?」

気恥ずかしいが遙ちゃんと話していた内容を伝えようと口を開く。

「その……彼方さんのこと話してた」

「え、彼方ちゃんのこと?」

「うん。俺が知らない彼方さんのことを遙ちゃんに聞いてたんだ」

遙ちゃんだけが知つてる、彼方さん家での過ごした方や様子だったり、お姉さんとしての彼方さんのことだつたりを彼女から聞いた。そして俺も恋人としての彼方さんについて遙ちゃんに話した。それを伝えると一転、頬に朱を宿らせた。

「おおう……それはちよつと恥ずかしいなあ……」

彼方さんはその言葉通り恥ずかしそうに身を振らせて悶えた。

「けど、そつか……よかつたあ〜」

本当に安心したように彼方さんは小さく呟いた。わかつてもらえてよかつた、と俺も一安心していると彼方さんが口を開く。

「あなたは彼方ちゃんだけの恋人なんだからね。よそ見なんかしちやダメだぞ〜」

口調はいつも通りのんびりとしたものだったが、圧力をかけられているように感じた。しないよ、と当然否定した。

そんな俺の反応を見て、彼方さんはうんうんと数回頷いた。

「信じてるからねえ」

彼方さんに釘を刺されてしまった。俺にその気はないというのに。ほんとのほんと。

「彼方ちゃん、遙ちゃんのことの世界で一番好きだけど……」

彼方さんは俺の目を見て——俺の視線を捕らえて釘付けにして、続きの言葉を発した。

「恋人はあなたただだよ?」

……暑い。体温が急上昇したのを確かに感じる。汗が噴き出る。

彼方さんの瞳の中に照れくさそうにしている情けない男が映る。……俺だ。

「……………そつすか」

「ふっふっふっ、照れてる照れてる〜」

照れるな、つて言うほうが無理だろう。

「俺も……恋人は彼方さんだけですから。よそ見なんかしないから」

予想通り余計に体温が上がったが、それでも口にした。直球な言葉には意図がある。

一つは浮気なんてしませんよアピール。もう一つは、

「……………おおう」

——ちよつとした仕返しがあった。俺は彼方さんに照れさせられたのだからそのお返しだ。

彼方さんは思った通りの反応してくれた。膝上の彼女の顔は林檎のように赤くなる。

「いやあ……彼方ちゃん、照れちゃうなあ……」

「嫌でした？」

「ううん。もつと言つてほしいぐらいかも」

俺の言葉を否定したどころか、彼方さんは追加を希望してきた。いやいやそれはこっちが照れる。悶絶もん。

「……………言うほうも照れるので、偶にで」

「ええー」

ぶくうつて、不満そうに頬を膨らませて、小さな子供みたいなことをしてくる。可愛らしい仕草。

「ダメなの〜？」

「ダメとは言つてないですよ」

ダメとは言つてない。極々稀に、気が向いて言う気力が湧いてきたら、きつと言う。

具体的に言うとな数年に一回レベル。

俺が消極的なことは彼方さんにはお見通しなのだろう。彼方が口を開いた。

「もつと言ってくれたら……彼方ちゃん、すつごいことしてあげるんだけど〜?」

「……………」

思わず唾を飲み込んでしまった。無意識だった。『すつごいこと』に惹かれてしまった。彼方さんの言い方が妙に艶つぽかったせいだ。

彼方さんはその様子を見てにやりとした。……しまった。もう遅いが、そう思った。

「お? 興味津々?」

「そりゃ……………」

「じゃあ……………もつと言ってくれる?」

畳み掛けるような彼方さんの再びのお願い。しかも『すつごいこと』というご褒美をつき。そんな魅力的な餌をぶら下げられる。

「……………はい。言います」

ご褒美と俺の羞恥心。天秤にかけて、選んだのはご褒美のほう。俺は彼方さんが喜ぶような直球な言葉を言うことになった。

「じゃあ、ほら、さつそく」

待ち遠しいのか、今か今かと彼方さんが急かしてくる。ちよつと待つてほしい。

「……………俺の恋人は彼方さんだけだから」

なんとか考え抜いて思いついた言葉。これで彼方さんも満足してくれるだろうと思つた。だが。

「もう一声！」

「え」

——どうやら、まだ満足してもらえないみたいだ。彼方さんは嬉しそうにはにかんでいるのに。どうしろと。これで十分じゃないの。

「もう一声ほしいなあ。彼方ちゃんももっと嬉しくなっちゃうようなやつ」

彼方さんのお望みは無茶ぶりに思えた。ニコニコしながら俺の言葉を待っている彼女を見ているとそれに応えたいと思つてしまう。

これ以上を望んでいる彼方さんが嬉しくなっちゃうような言葉。もっと過激な言葉を言えばいいんだろうか。考え込んでしまう。

「……………彼方さんは俺の嫁！」

思いついたのはなんとも恥ずかしい言葉だった。言つてから後悔する。独占欲発揮しすぎだろうか。引かれないか、不安だ。

彼方さんは言葉の意味を認識できないみたいで一瞬きよんとした。いや俺の言葉があまりにも非常識すぎて理解できなかったのだろう。数秒して、言葉の意味を理解し

て、顔を紅潮させた。これでよかった、っぼい。

「嬉しいけど……それってプロポーズ？」

彼方さんが困惑しているのも無理はない。そうとも取れる言葉だと俺も思う。

「あ、え、と」

言葉に迷う。そういうわけではない、と否定することもできる。だけどその気がないわけじゃない。むしろ望み通りだ。いやだけど今すぐどうこうという意味で言ったんじゃない。現実的に不可能だし。……なんて思考が巡り巡っていた。

「大丈夫。わかってるよ」

彼方さんは目を細めて、俺を見ていた。ふにやりと頬を緩ませて。

その言葉で俺は落ち着く。

「いつか、ね」

「いつか……」

彼女の言葉を繰り返す。音にすると、つい想像してしまう。いつかの未来のこと。一瞬だけ、ぼんやりとした景色。すぐに消えてしまった。そうなればいいと思った。

彼方さんと目が合って、視線が交わって、きつと同じことを考えてるんだと思えた。その証拠に彼女も俺もはにかんでいる。

なんだか照れくさくなって、話を変えようとして、ちようどいい話題があったことを

思い出した。

「それでご褒美とは……」

そう、彼方さんが俺を釣るために用意した『ご褒美』とやらのことだ。

「それはね〜……」

もったいつけるように間を作る。焦らされる。それだけの『ご褒美』なのだろうか。期待が高まる。

「彼方ちゃんの膝枕〜」

……ちよつとだけ力が抜けた。がっかりはしてない。期待しすぎた感はあるけど。いや、そもそも。

「……今俺が彼方さんを膝枕してるんですが？」

「そうだよ、今度は彼方ちゃんがあなたに膝枕してあげる」

交代して、膝枕してくれるということみたいだ。

寝転んでいる彼方さんの太ももに思わず目が向かってしまう。スカート裾から透明感のある柔らかそうな肌が覗く。魅力的なご褒美だと、考え直した。

「えっちな目してる〜」

ニヤニヤしてる彼方さん。でもね仕方ないと思うだよ。彼方さんの太もも、寝心地も触り心地もよさそうなんだから。

「彼方さんが膝枕してくれるのは今から？」

誤魔化すように彼方さんにそう尋ねた。彼方さんは俺の膝枕を堪能して、膝から起き上がる気配はまったくない。本当に膝枕してくれるのだろうか。

「うーんと……まだもうちよつとこのままがいいから、……遥ちゃんが帰ってきたらしてあげるね？」

彼方さんの言葉で遥ちゃんが戻ってくるのが待ち遠しくなる。いやでも、帰ってきたら二人つきりじゃなくなるな、それはちよつと残念だな、なんて思う自分もいた。なんというジレンマ。

彼方さんは幸せそうに、また臉をウトウトさせていた。また眠ってしまったそう。また手持ち無沙汰になってしまふな、と思った。いや、彼方さんの寝顔をずっと見ていればいいか。

暖かな、ちよつと暑いぐらいの昼下がり。時間がゆっくり過ぎていくような穏やかな休日のことだった。

電燈

もう日はほとんど沈んでいた。灯る街灯の光が薄暗い地面を照らす。

コツコツと、アスファルトを叩く音が4つ。俺と彼方さん。歩幅を合わせて歩く。

俺と彼方さんの間で袋が揺れる。中はスーパーで買った特売品。持ち手の片方は俺が、もう片方彼方さんが持っている。

公園でのんびりして、時刻は夕方になった頃。俺たちはそろそろ帰ろうということになった。ただ帰る途中にスーパーに寄りたいたいと彼方さんが言った。夕食の材料の買出しをしたいたいのことだった。

そこで、遙ちゃんは自分は先に家に戻っていると言い出した。洗濯物を取り込んでおくよ、と。

しかし、遙ちゃんは俺に近づいて、耳元で、

『そ、その……2、3時間ぐらい、寄り道してきても大丈夫ですからっ』

と顔を真っ赤にして小声で囁いていた。遙ちゃんの真の目的はこっちらしい。気を利かせてくれているみたいだ。その寄り道はしないけど。

「~~~~♪」

楽しそうな表情の彼方さんから聞こえる鼻歌。足取りは軽やかで、今にも踊り出しそう。見てるだけで俺も楽しくなる。

「……ありがとね〜」

突然、ぽつりと彼方さんは小さく呟いた。その声で彼方さんの方へと振り向いた。彼女もこちらを見ていた。

「買い物、手伝ってくれて」

「これこれと主張するように、二人で持った袋の持ち手を彼方さんはほんの少しだけ上げる。」

「あなたのおかげで彼方ちゃん、助かっちゃった」

「いやうん。彼方さんともうちよつと一緒にいたかったから」

「おおう……嬉しいこと言ってくれるねえ〜」

彼方さんは照れ臭そうに、だけど嬉しそうにする。俺も恥ずかしくなってきた。

「ひよつとして照れてる?」

「彼方さんだって」

むず痒い。夏じゃないのになんだか身体が暑い。だけど嬉しい。

「……ちよつと暑いねえ〜」

「……ですねえ」

彼方さんも同じみたいだ。顔を見合わせて、二人してくすつと笑った。二人して照れてるのが堪らなくおかしかった。

「袋、重くない〜？ 大丈夫？」

彼方さんは二人で持っている手とは反対の、俺の右手を見た。右手にはもう一つの袋があった。これも中身はスーパーでの戦利品だ。なので、俺は今両手に袋を持っている状態である。

「重くない。だって彼方さんが手伝ってくれてるし」

片方だけが、負担が軽減されるのはかなり助かっている。それに、こんな時のための男手だ。今日は彼方さんの弁当を頂いたし、そのお礼がしたいところだ。

「そっかあ。ならよかった〜」

ホツとした笑みを彼方さんは見せた。

「さすが男の子だねえ」

「荷物持ちでよければいつでもやりますよ」

彼方さんに褒められて、もつと格好つけたくなつてついそう言った。後悔はない。荷物持ちとはいえ、彼方さんに頼られるのは俺にとっての喜びだ。

「え、それホント〜？」

「本当ですよ」

「……それはあなたに悪い気がするなあ」

「俺がやりたいんです」

「えー、でも」

俺の言葉になお彼方さんは申し訳なきそうにしていた。

どうすれば彼方さんが気にせず頼ってくれるかな。……思いついて口を開く。

「なら、その時は今みたいな感じにしませんか」

俺はこういう風にと伝えるために左手で二人で持った袋の持ち手を少しだけ上げた。

彼方さんはきよとんとして、それからすぐに合点がいったのか、瞳を大きく開かせる。

「ナイスアイディア〜」

「でしょ」

「彼方ちゃん、今から次の機会が待ち遠しいぜ」

弾むような声。彼方さんの表情は夜闇の中で光る電灯のようで眩しい。

俺も彼方さんと同じく、次の機会が待ち遠しく思えた。荷物持ちが楽しみになんて、

そんな風に思えるとは今まで想像できなかった。

「俺も、ですよ」

「そんなこと言って大丈夫？ 彼方ちゃん、ばんばん頼っちゃうよ〜？」

「ばんばん頼ってください」

頼られれば頼られるほど一緒にいれる時間が増えるのだから。しかも彼方さんに良いところを見せられるのだ。こんなに嬉しいことはない。両手とも塞がってるからできないけど反らした自分の胸を叩きたくなった。

「じゃあ、遠慮しないぞー。覚悟しろー」

彼方さんは悪戯つぽく微笑んでそう宣言した。一体、どんな荷物を持たされるつていうんだ。できれば人が持てる範疇でお願いしたいところだが。

「……まあ、頑張るよ」

「期待してるからねー。あなたのカッコいいところ、見れるの」

期待されるのは嬉しいけど、万が一持つてなかった時が怖い。冷蔵庫とか持てとか言われもキツイよ？ 頑張るけど。

「ねえねえ」

「なに」

「次つていつでもいいの〜？」

彼方さんが言った『次』というのは次にこういうことする機会のことだろう。要は俺が荷物持ちする時ことだ。

「もちろん」

「じゃあじゃあ、明日でも？」

「大丈夫。俺、暇だから」

彼方さんの問いかけにすぐに答えた。暇だから、なんて言ったが例え用事があつても暇にするつもりだった。彼方さんに会えることより勝る用事なんてないって本気で思った。

「やった〜」

彼方さんは喜びを表すかのように何も持っていない片方の腕を無邪気に挙げた。

「じゃあ、明日ね。約束だよ〜？」

わかったよ、と。いつも通りの口調で言った、つもり。気付かないうちに食い気味になつていたかもしれない。

もしかしなくてもそうなつていたのだろう。くすりと、彼方さんの声はその証。

二人で持った袋が楽しそうに踊る。中身がどうなるうとお構いなしの激しさ。無意識のことだった。止めようと思つても止められなかった。止める気なんてさらさらなかった。

「うりや〜」

楽しくて楽しくて、そのうちわざと袋を揺らし始めるようになる。俺と彼方さん、最初にどっちかがやったのかわからない。

じやれるような彼方さんのかけ声が薄暗い世界で響いた。

「おりや」

俺もそれに対抗して声を出して袋を揺らす。

「やったなく……うりや」

「そつちこそ。おりや」

俺も彼方さんも、何度もわざと袋を揺らす。子供じみたふざけ合い。

「てりや〜」

「とりや」

地面に映る街灯の光の影がそれに合わせて揺れる。こんな悪ふざけでも彼方さんとなら楽しい。二人して笑い合った。

だけどその時間も長くは続かない。というよりすぐ終わってしまう。

スーパーから近江家はそれほど離れていない。ゆっくり歩いているのに、もう見えてきた。見上げれば、近江家の電灯が光っているのも見えた。

薄暗闇の逢瀬も終わってしまいそうだ。そろそろ本当にお別れの時間。

「……………」

「……………」

その事実気付いて、俺たちの口数は減り、やがて二人して黙り込んでしまった。

名残惜しい。明日も明後日も、その先もあるのに。今日が続いてほしいと思つてしま
う。

「……もう着いちゃった」

彼方さんの声には寂しさが滲んでいた。痛いほど気持ちがわかる。せめて。

「もうちよつと一緒にいたいのかなあ」

そんな言葉が聞こえてきて、俺は驚く。

「どうしたの〜?」

「……いや。同じことを考えてたから」

彼方さんの言葉は俺がそのとき考えていたとの同じだった。そして公園から帰ろう
かというときも同じことを考えていた。彼方さんとスーパーにいるときだつて。つま
るところ、俺はいつだつて彼方さんと一緒にいたのだ。もうどうしようもないくらい。

じゃあ、と彼方さんが言葉を発した。

「うち、寄つてく〜?」

「……やめとく」

「どうして?」

「いつまでも彼方さんから離れられなくなりそうだから」

小恥ずかしい台詞が出てきた。本心だ。だけど冗談めかした口調じゃないと羞恥心

でどうにかなりそうだった。

「おおう」

彼方さんが呻いた。二人で持っている袋のほうだけ若干重くなる。

「つと」

それに引つ張られそうになる。いきなりのことで反応が鈍る。けどもすぐに体勢を立て直した。

「ごめんねえ」

「いや大丈夫大丈夫」

「彼方ちゃん、驚いちゃった」

でもね、と声がした。彼方さんは頬を膨らませて、拗ねた表情を見せていた。

「あなたが悪いんだよ？ 彼方ちゃんをときめかせるようなこと言うから」

と言われましたも。あれは紛れもない本心だし。

「ねえ、思っただけだよ」

少し考え込んで、彼方さんはそんな言葉を切り出してきた。

「あなた、さつきから恥ずかしい言葉ばかり言っつてない？」

「本心ですけど」

すかさず俺はそう返す。

「おおう」

「またも彼方さんが呻く。今度はわざとらしくった。」

「彼方ちゃんをキュン死させたいのかー」

「キュン死するんだ……」

「する。キュンキュンしすぎて彼方ちゃんの心臓止まっちゃう〜」

「そこまでときめくのか。それは困るなあ。まあ、きつと彼女なりの比喻というか大げさな表現というか、そういうものだと思う。」

「そこで少し意地悪なことを思いつく。」

「じゃあ、言うのやめとく」

「……いじわる〜」

「再び拗ねる彼方さん。言いだしっぺはあなたですよ？」

「しかし物欲しそうな視線を彼方さんに向けられる。じいっと見られ、なんとも耐え難い。」

「うそうそ。冗談だから」

「ちよつとだけ意地悪しなくなったただけなので引つ張ることなく発言を撤回した。」

「ほんとっ？」

「ほんと」

「じゃあじゃあ、これから彼方ちゃんをじゃんじゃんときめかせてね〜？」

「キュン死しない程度に？」

「キュン死するぐらいに」

「……わかったよ」

望むところだ。

さて問題は彼方さんがときめいてくれる言葉を思いつくかどうか。それとその言葉を言うときに羞恥心にやられないかだ。

「明日も期待してるからね〜？」

おっといきなり来たよこれ。

「頑張ります……」

とはいえ楽しみにしている彼方さんを見て、できないなんて言えるわけがない。今できる精一杯の回答がこれだ。

少し困った顔をしているであろう俺を見て彼方さんは笑った。やっぱり眩しかった。

ペトリコール

ふと嗅覚が独特な匂いを捉えた。これは雨の日の匂いだ。

雨が降っている。大雨というほどではないが、傘がないと困るぐらいの量の雨だ。

コンビニの出入り口付近の軒下から俺は灰色の空を睨んでいた。人が睨む理由なんて限られている。……恨めしいからだ。

そんなことしようが天候は変わってはくれない。空の色はそのままだ。むしろ……。「はあ……」

一向に良くなる気配のない天気を見て、一つ溜息をついた。

空がこんな風になったのは俺がコンビニに立ち寄って物色している間のことだった。店内に入る前は少し曇っているだけだった。それが数十分でこれだ。

なんで恨めしいのか。それは俺が傘を持ってきていないからだ。

このままで俺は、雨が止むまで待つ、ずぶ濡れで帰る、コンビニで傘を買う、のどれかを選択しなければならぬ。それぞれに、どれぐらい待つかわからない、風邪を引くかもしれない、無駄な出費、という地味に嫌なデメリットが待ち受けている。

憂鬱になる。薄暗い空と雨音と匂いが余計にそう感じさせた。

とはいえそろそろ覚悟を決めなければ、と思った時だった。

「あれ、もしかして……」

よく知った声。その音を辿る。そこには俺の想像した通りの少女がいた。董色の傘を差していた。

「彼方さん」

「やっぱり。こんなところで会えるなんて偶然だねえ」

制服姿の彼方さんはしみじみとした口調でそう言った。本当にそうだ。同好会もあるし、会う約束なんてしてなかったから今日こんな遭遇をするとは思わなかった。

「彼方さんは学校の帰りですか？」

「そく。あなたは？」

「コンビニに買い物に来たんですけど、傘を持ってくるのを忘れて」

「突然振り出したもんね」

「おかげで家に帰れない」

彼方さんも俺も空を見上げた。その空を見て、また溜息をつきたくなった。

「雨、止みそうにないね」

「……ですね」

止む気配どころか、空は暗く濁った灰色に染まっていつていた。これから日は沈んでいくが、この空の色はそんな理由ではなさそうだった。この天気はさらに悪くなりそうだ。

本当にどうしたのか。

「あ、そうだ〜」

嬉しそうに彼方さんが声を上げる。

「よかつたら、あなたも彼方ちゃんのお傘に入っちゃおうよ〜」

名案でしょう、とでも言いたげなドヤ顔を彼方さんは見せる。確かにナイスアイデアだ。

「そうしたらあなたも家に帰れるよ〜」

「それだと彼方さんが遠回りになっちゃうでしょ」

「それは……そうだけど〜」

彼方さんは少し考え込んで、すぐまたなにか閃いたかのような表情になる。

「じゃあじゃあ、彼方ちゃんのうちで雨宿りしちゃう？」

彼方さんが言い出したのは魅力的な提案。思わず頷きたくなるが理性がそれを留めた。

「……いきなり行くと迷惑にならない？」

「そんなことないよ。むしろ大歓迎〜」

満面の笑みでウエルカムオーラを出す彼方さん。

「ほれほれ、彼方ちゃんと相合傘しようよ〜」

傘の持っていない手で招き猫みたいに手招いて俺を誘う。

断る理由はない。なにより俺が彼方さんの誘うに乗りたいたいと思っている。

「じゃあ、お願いします」

「どうぞ、おいでおいで」

彼方さんは傘を少し上に持ち上げて、俺が入るスペースを作ってくれた。失礼しますと言つて、その中に入る。

身長差のせいだろう。彼方さんは腕を伸ばして傘を差している。持ちにくそうだった。

「傘、俺が持つよ」

「ありがとう〜」

傘を受け取る。彼方さんが濡れないように気持ち彼女以上に傘を持つ。

「じゃあ、出発しんこ〜」

こんな天気だというの、楽しそうに歩き始めた。俺も遅れないように、彼方さんが濡れてしまわないように着いていく。目的地は彼方さんの家。

道のでこぼこにできた水溜りを足を踏みいれるたび、水滴が軽やかに跳ねて飛び散る。キラキラと光る。

「そういえば、コンビニでなに買ったの〜？」

「これ」

俺はズボンのポケットに仕舞い込んでいたものを取り出して、彼方さんに見せた。ただのシャープペンの芯だ。見せてまた仕舞った。

「宿題やつてるときに芯のストックがなくなりそうなのに気付いてさ」

なんなら最後の芯を使ってしまった。宿題自体はすでに終わったから急いでほしかったわけじゃないが、予備がないのは心許なかった。

「おー、ちゃんと宿題しててえらいねえ。よしよししてあげよう〜」

小さい子相手にやるように彼方さんは頭を撫でてきた。恥ずかしい。彼方さんと俺との身長差が余計にそう感じさせる。が振り払うわけにいかないし、そもそも振り払えない。

時間にして数秒。悶えてしまう時間が終わってしまった。彼方さんが手を俺の頭から離した。

「彼方さんは同好会？」

恥ずかしさを誤魔化すように、俺は彼方さんに尋ねる。

「そうだよ。今日も練習大変だったぜえ……楽しいんだけどね」

彼方さんは疲れを滲ませながらも充実感に満ちた表情をしていた。疲れは心配だが、その満足げな表情に俺はほっとする。

「……彼方ちゃん頑張ったからご褒美が欲しいなあ」

唐突にそんなことを言い出し始めた。ご褒美とはなんぞや、と思っていると彼方さんが再び口を開く。

「撫で撫でプリーズ」

顎を引いて頭を下げて、彼方さんは差し出すように頭を俺のほうに向けた。俺に撫でられるのを待っている。まだやるとも言っていないのに。やるけど。俺も彼方さんも足を止めた。

傘を差していないほうの手で彼方さんの髪に触れる。そして労わるように優しく手を動かして彼女の頭を撫でる。

「おお……いい……気持ちいい……」

ふにやりと顔が蕩ける。彼方さんは猫みたいに目を細めて、言葉通り気持ち良さそうにしている。

彼方さんのふんわりとした髪は触り心地がよくて、ずっと触っていたくなる。手が引き寄せられ吸い付いて離れがたい。

撫で続けているとだんだんと彼方さんの頭がこくりこくりと動く。瞼も閉じていく。まづいと思つた。

彼方さんの身体が委ねるように寄りかかつてきた。

「……すやあ」

気持ち良さそうな彼方さんの吐息が聞こえた。よくない。今寝られたら俺は雨の中傘を差しながら彼方さんを引つ張つて運ぶ羽目になる。なかなかきつい。

「起きて。彼方さん、起きてください。おーきーてー」

撫でるのを止めて、彼方さんの身体を強めに揺さぶる。

「……………はっ」

その声と共に彼方さんは瞳を大きく開けた。幸いなことにすぐに目覚めてくれた。

バツの悪そうな表情。自分が寝てしまったことに気付いているようだった。

「ごめんねえ。寝ちやつた〜」

彼方さんはふにやりと微笑んだ。まだ夢うつつな瞳。

「あなたの撫で撫でが気持ちよすぎたから〜」

そんな責任転嫁をされましても。

「せめて家に着くまでは耐えて」

「頑張ってみる〜……」

力のない、間延びした声。はたして家まで耐えられるか。少し不安になった。

再び歩き出す。傘からはみ出して濡れないように歩こうとするとどうしてもゆっくりになってしまおうが。

雨は次第に強くなっていつているような気がする。聞こえてくる音は激しい。傘に落ちた雨粒も大きくなっているように感じられた。

「雨、すごいねえ」

彼方さんも俺と同じように思っていたのか、空を見上げて言った。

「大丈夫々？ 濡れてない？」

「濡れてないよ。彼方さんのほうこそ」

「彼方ちゃんは全然濡れてませーん」

ふっとなにかに気付いたのか、彼方さんはじつと俺のほうを見つめてくる。いや見つけているの一点だ。どこを見てるんだ？

「あなたのおかげかなあ」

柔らかな笑みを浮かべて彼方さんはそう言った。

「そんなことないと思うけど」

「……肩、濡れてるぞ〜？」

彼方さんは俺の肩を見ていた。バレてた。

「彼方ちゃんにはお見通しだぜ」

くすくすと笑う彼方さんにバツの悪さを感じてしまう。こういうのはバレてしまうのダサいと俺は思ってしまうのだ。

「濡れないように、もつとそつちに寄るね〜」

彼方さんはすすつと身体を寄せ、彼女と俺にあつた間を詰める。彼方さんの制服が俺の服に触れた。

彼方さんの髪が揺れて、ふわりと匂いが香る。ずっと嗅いでいたような、ほつとする匂いだ。

「ほら、これならあなたも彼方ちゃんも濡れないよ〜」

そうだけど、これは近い。服越しに彼方さんの柔肌を触っているような、なんとももどかしい感触が身体を支配した。

「……歩きにくくない？」

「えー、そんなことないよ〜」

即座に否定された。彼方さんの表情からはそんなこと露とも思っていないことが読み取れた。

彼方さんは俺の瞳を覗き込んでくる。

「それとも彼方ちゃんが近いのは嫌？」

「そんなことはない」

同じように即座に否定する。近くのは嫌じゃない。いてほしいと思う。

どうやら俺の答えはお気に召したらしい。彼方さんは顔をニヤつかせた。

「彼方ちゃんは今もつと近づきたいって思ってるよ」

「もつとつて」

どれぐらいの距離なんだって、そう続けようとしていた。

「このぐら〜い」

傘を持った腕を包み込むように抱きしめられた。

さつきとは違う。服に触れているレベルじゃない。はつきりと彼方さんの身体を腕に感じる。柔らかさと温かさと両方とも。あとなにがとは言わないが当たってる。

明らかに歩きにくい。どう考えてもそれは確かなことだ。それは彼方さんだつてわかってるだろう。

「だって、ここは彼方ちゃんの特等席だもーん」

彼方さんのその言葉に胸が締め付けられる。内側から熱が湧き出てきてどうしようもなく熱くなる。

身体が軽くなる。水滴が飛び散るのも気にならない。この感情を彼女も抱いているといいと思った。

強まる雨の中、俺たちはスキップするかなのような足取りで歩いた。

虹の根元

しとしとと雨が降り続いていた。連日の雨。降り止む気配はない。

今日も彼方さんの家に泊まっていた。高揚感が俺を支配していた。恋人の家に泊まるのだから当然だろう。もう何度も泊まっているが。

「……眠れない」

おかげさまで全然眠れなかった。現在午後10時。眠気は訪れそうになかった。

「彼方ちゃんも……」

隣に座る、パジャマを着た彼方さんがいつもなら想像できない台詞を言っていた。まあ、お昼からついさつきまで二人で長すぎるお昼寝をしていたからというのもあるんだろうけど。

「寝るまでお話、しよつか」

「うん」

俺は彼方さんのそんな提案に乗ることにした。

彼方さんの部屋。床に並べた座布団の上。彼方さんと俺はただ寄り添っていた。

本当に珍しいことだと思った。あれだけ寝てれば、というのは彼方さんには関係がないと思っていた。

「うーん、今日が特別なんだと思うなあ」

それに対して彼方さんはそんな言葉を漏らした。

「どういうこと？」

「あなたと二人つきりだから」

そうだった。今、近江家には彼方さんと俺だけだった。二人つきりだ。遙ちゃんはスクールアイドルの合宿をしていて、二人の母親は仕事らしい。

「お風呂、一緒に入りたかったな」

だというのにあやまちを犯したくなるようなことを彼方さんは言い出した。ちよつとドキツとする。心臓に悪い。

「我慢できなくなりそうなんで」

「我慢しなくていいのに……」

さらにくらつとクる言葉が飛び出てきた。やめて。

「襲わないなら……彼方ちゃんが襲つちやうぞー怪獣彼方ちゃんだーがおがお」

迫力はない。ただただ可愛いだけだった。パジヤマ姿だから余計に。

ただ言葉とは正反対に、そういう行為をする気配はない。彼方さんは俺の肩に顔をも

たれさせて寄りかかってきて、それだけ。

「重い?」

「重くない」

「よかつた」

子供みたいなじやれ合い。ぬるい空気が揺蕩う。

会話の内容だつて中身がないようなものばかり。そんな会話を交わし合つて、俺たちは睡魔が訪れるのを待つていた。

「パジャマ似合つてる。かわいい」

「えへへ、そーかなあ。嬉しい」

パジャマを着た彼方さんは可愛いかつた。いつも可愛いけど。俺の褒め言葉に照れっぽくはにかんだ。

「ずっと見ていたい?」

「見たい」

「んふふ」

問答に満足したのか、彼方さんはご機嫌そうに笑い声を零す。

「彼方ちゃんを喜ばせるようなことばつか言つて、嬉しいけど照れちゃうよ」

その言葉は冗談ではなく、彼方さんの頬は薄っすらと朱に染まっていた。

「思ってることを言ったただけけど。言わないほうがよかった？」

「むうー……それは、言ってほしいけど」

彼方さんは拗ねたように赤い頬を膨らませた。リスみたいだ。

「……いじわるう」

肩にもたれていた頭を起こし、彼方さんは俺の鎖骨の辺りをぐりぐりと責め始める。

地味に痛い。

「痛いんだけど」

「いじわるした仕返しだあー」

そう言ってさらに強く頭を押し付ける。余計に痛くなる。

「ちよっ」

「えいえいえーい」

彼方さんは頭をぐりぐりと動かすのを止めない。俺の鎖骨は攻め続けられていた。

ちよっと痛いけど、彼方さんが楽しそうにしているので止めようとはしなかった。

「あー楽し〜」

しばらく続けて鎖骨ぐりぐりに満足したのか、そう言って彼方さんは責めるのを止めて胸に寝転がった。ぽすつと、心地の良い重みを感じる。

「あなたとこうやってたらだらしてるの好きー」

間延びした声が胸元から響く。その声と重みに安心感を抱く。

「俺も好きー」

その言葉はすらっと出てきた。意識したわけじゃなかった。発音まで彼方さんみた
いになった。

「一緒だあ」

彼方さんはニコニコと微笑んだ。俺もきつと気持ち悪いぐらいにやけている。

会話と会話の合間。その隙間にできた声のない瞬間。外の雨音が響く。

止まない雨。いつまで続くんだろう。

「雨、やまないねえ」

彼方さんも同じように耳を傾けて、同じことを感じていた。

「天気予報では朝には止むみたい。確か天気予報でそんなこと言ってた」

そうは言ったが俺自身雨が止むとはあまり思ってた。今日の空の雲はそれぐ
らい厚かった。明日になってその灰色がなくなるなんて思えなかった。

「じゃあじゃあ、もしかしたら虹が見えるかも」

「だったらいいなあ……」

虹が出てきたらいい。それを二人で見れたらどれだけ最高か。夢みたいな、ささやかな願望を抱いた。

「きつと見れるよ〜」

彼方さんの言葉があんまりにも自信満々だったから俺までそう思ってしまった。でもきつとこれ、根拠はないなと勝手に思った。

「なんでさ」

「ん……なんとなく〜?」

尋ねたらやっぱりそんな答えが返ってきた。ですよね。

「彼方ちゃん未来予知……なんちゃって」

「当たるのを期待してるよ」

「あ〜! ……信じてないなあ〜?」

わかりやすい俺の発言に彼方さんは少し不満そうにした。むうと唸って、彼女はわかりやすいむくれ顔を見せる。可愛いと思つた。

「そりゃまあ」

見れたらいいなとは思うけどさ。

「むむむう」

ちよつと威嚇するような唸りをまた見せる彼方さん。

「夢の中なら見れるんじゃない」

俺はそんな彼方さんを宥めるためにそう口にした。夢の中なら、そんな都合のいいこ

とだつてきつと起こりうるだろう。少なくとも現実よりも可能性はある、多分。いやどつこいどつこいか。

「二人とも同じ夢見れるかなあ」

彼方さんは心配そうに言う。

「こつこつとくつついて寝てれば、見れるかも」

俺も根拠のないことを口にした。これは願望だ。

「なら今日は一緒に寝よう」

正確に言う『今日も』だ。毎日ではないけど。

「ああ、うん」

彼方さんと一緒に寝たい気持ちがあるにはあつたからその言葉に首を縦に振った。

「ぎゅーって抱きしめて、あなたを抱き枕にしちゃうぞー」

「来いよ」

「とりやー」

ウエルカムしたら彼方さんは身体をその場で一回転させ、正面から覆いかぶさり体重をかけてきた。負担はさつきよりも大きい。というのも彼方さんが抱きついてぎゅーぎゅー締めてくるからだ。

「ぎゅー」

と擬音を口にしながら、抱きしめる力は緩めずさらに強くしてきた。さらに密着する。パジャマだから彼方さんの身体の感触がはつきりとわかる。心臓が跳ねる。

「ふふー、ドキドキしてる〜」

「彼方さんだつて」

お互いにお互いの心臓の鼓動がわかる。ドキドキしていることがお互いにわかる。なんかちよつと恥ずかしい。

「でもこれ、安心する」

「あ、それ彼方ちゃんもわかる〜」

だけどそのドキドキと同じぐらいに安心感を得ていた。彼方さんも同じみたいだ。

「あなたを直に感じられて、包まれているみたい〜」

蕩けた声が耳元で聞こえる。囁くような小さな音がくすぐったい。

「……囁かれるの、好き?」

「……彼方さんはどうですか?」

俺も同じように耳元で囁く。抱きしめ合ってるから顔は見えないが、同じような顔をしてるだろうなと思った。

「ひみつー」

「じゃあ、俺も」

「ずるーい」

「彼方さんだつて」

どうでもいい問答をしているな、と俺は自分で思った。意味のない言葉のやり取りだと彼方さんもわかっているだろう。その言葉の交わし合いが愛おしく思える。もつと話がしたくなる。

だけどそれは長く続かないだろうとも思った。だつてこうして抱き合っていたら安心して眠くなってしまう。

「眠くなつてきてるねえ」

「彼方さんだつて」

お互いにお互いに体重を徐々に預けてしまう。少女の重みが当然ながら重くて少し煩わしくて、心地よく思えた。

「おもろい……」

「それはお互い様だつて」

「彼方ちゃんは重くないよ〜?」

「嘘つくな」

「ほんとだもーん。彼方ちゃん、枕みたいに軽いもーん」

「あはは」

「いい加減彼方ちゃん怒るぞう」

と言いつつ、彼方さんは俺を突き飛ばそうとかそういうことをしてこなかった。どころか力を抜いてより身体を預けてきた。暖かくて柔らかくて、こつちの力も抜けてしまった。

「いい枕だね、これ」

「俺は枕じゃない」

「仕返しー」

さっきのあれを根に持っているみたいだ。いや人間なんだから決して軽いわけはない。軽い方だと個人的には思うけど。

「女の子に対する態度が問題なんだぞー」

「許してよ」

「えー、どうしよつかなあ……」

微睡むかのように考え込む。いや半分寝ているのかもしれない。

「じゃあ……ずっと一緒にいてね」

夢見心地で呟かれたその言葉。耳朶をくすぐらせ、夢うつな意識に温かさをじんわりと染み込ませた。

「それで……いつかでもいいから、一緒に虹、見ようね？」

俺はその言葉になんて返したのだろう。微睡みに包まれて、もうなんて返したか、果てして言葉を伝えられたのかすらわからない。

夢の中に誘われていく。その中で彼方さんも自分と同じ状態であることがぼんやりとわかった。彼方さんが先か。それとも自分が先か。それすらもあやふや。

その夢の中で、さつき話したように虹が見れるといい。二人で同じ夢が見ればいい、そう思った。

一緒に虹を見に行こう。そんな微かな願望を意識が消える、その時まで抱き続けた。

花火

陽が落ちてても、汗が出てくるような暑さだ。額の汗を拭い、思った。

時刻は20時すぎ。多少はマシになったとはいえ、暑苦しい。

冷房や扇風機が恋しい。せめてぬるい風でもいい。外に風はなく、空気中の熱は停滞して、身体が溶けてしまいそうだった。

「お待たせ〜」

特徴的な靴音とともに彼方さんはやって来た。慌てて来たのか、息を少し切らして。

「言うほど待つてないよ」

「そおー？ でもあなた、すごい汗かいてるけど〜？」

「そりゃ暑いから。そう言う彼方さんも汗、かいてる」

「……あんまり見ないでねえ。彼方ちゃん、はずかしい……」

つうつと。彼方さんの額から首筋を通って、汗は彼女の服の中へと吸いこまれていった。

見ないで、と彼方さんは言ったが。

「いぐり……っ」

色っぽくて思わず息を飲んでしまった。彼方さんにも聞こえるぐらいの音だ。薄暗い闇でもわかるぐらい、彼女の頬が赤色に染まった。

「も、も……えっちっ」

「……ごめん」

恥ずかしそうな彼方さんに俺は謝るしかできなかった。いやうん、これは俺が悪い。ごめんなさい。

「……あつついねえ」

「あつついなあ……」

二人して手を仰いで、自分たちの体温をなんとか下げようとしていた。傍から見たらきつと滑稽な光景なんだろうな、これ。

……そんなことよりも。彼方さんにまず言わなきゃならない言葉があった。

「……綺麗です、彼方さん……その浴衣」

恥ずかしいがその言葉を口にした。するとすぐに彼方さんは綻んだ表情を見せてくれた。その顔が見たかった。

白と基調とした、菫色の花があしらわれた浴衣。赤紫の帯が映えて見えた。彼方さんの足元には眩しい素足と下駄。

「えへへへ、似合う？ 似合う〜？」

「すつごく似合ってる」

その言葉でさらに嬉しそうに顔を蕩けさせた。こつちまでにやけてしまいそう……もうすでににやけてる。暑いなあ。夏だからかな。

「……そろそろ、しよつか〜」

二人でひとしきり恥ずかしがって、最初に声を上げたのは彼方さんの方だった。まだ少しだけ顔が赤いように見える。

「ああ、うん」

頷く。そのためにここに来たんだから。人気のほとんどない夜の公園に。

鞆からあるものを取り出す。ここに来る前にコンビニで買ったもの。

「おおく、これは迷っちゃうなあ」

俺の手に持ったものを見て、嬉しそうに彼方さんは言った。

取り出したのは手持ち花火。今日は彼方さんと二人で手持ち花火をしようと約束していたのだ。

手持ち花火をするための準備をする。消火するための水を用意したり、火をつける道具やゴミ袋の準備……などなど、いちおう火を取り扱うのでそこら辺はしつかりと。

「まずはどれからする？」

「うーんとね〜……じゃあ、これ〜」

いくつか用意した手持ち花火から彼方さんは一つ選び取った。ススキ花火と呼ばれるものだ。俺もそれに倣い、同じものを取り出す。

まずは彼方さんのから火をつける。勢いよく火花が飛び散る。火花は薄の穂のように長い尾を描く。

「うおお〜……すごい、綺麗〜」

俺も自分のに慎重に火をつける。鮮やかな火花が彼方さんのものと同じように長い尾を描くように飛び散る。

「これは確かにすごいいな……」

楽しそうに火花を見つめる彼方さん。俺もその鮮やかさに目を奪われる。

「あつ、色が変わったあ」

彼方さんの驚きの声。白の火花を上げていた彼方さんの花火が赤の火花に色合いを変える。俺のも黄色から青色へと火花の色が変化する。

「振り回しちゃダメだよ〜？」

何を思ったのか、そんな風に彼方さんは俺を嗜めた。

「俺、振り回しそうに見えた？」

「だって男の子って、そういうの好きそうだし〜」

「しないよ、俺はそんなこと」

「ええー、本当かなあ？」

「信じられていないし」

心外だ。

「だってあなた、ちよつと子供っぽいところあるから」

「それは彼方さんも」

「そんなことないも〜ん」

そんなくだらない言い合いをしている間に花火はいつの間にか消えていった。

「あ」

「あ」

彼方さんも俺も、揃いに揃って間抜けた声を上げた。俺たちは何をやってるんだ

……。

二人して顔を見合わせて笑った。笑うしかないなこれ。

「まあ、まだまだ花火はあるし」

「だね〜」

新しい花火を取り出す。今度こそはちゃんと花火を楽しまないとな。

彼方さんにも新しい花火を渡して、順番に火をつけた。鮮やかな火花を散らす。

「……この間の花火大会、行けなかったねー」

その様子を見ながら、彼方さんはポツリとそんな言葉を発した。

彼方さんが言う花火大会とはつい最近この近辺で開かれてた打ち上げ花火大会のことだろう。

「お互いに用事があつたし、仕方ないって」

彼方さんはスクールアイドル同好会の、俺は親戚の。二人とも外すことのできない大切な用事があつたから、そこは仕方がない。

「そうだけども……やっぱり二人で見たかつたなあ……」

「確かに。見たかつたなあ」

残念そうに言う彼方さんに心底同意する。浴衣の彼方さんと打ち上げ花火を見られたら、妄想しただけで楽しそうだ。

でも、と彼方さんは口を開く。

「こうやって二人つきりで花火できるから、こういうのもありだねえ」

その刹那的な閃光が彼方さんの瞳に映る。その光は彼女の横顔も照らす。花火に負けないぐらい、綺麗だと思つた。

「あなたも……二人つきりで嬉しいでしょ？」

揶揄うかのように彼方さんは悪戯っぽく囁いた。

「嬉しいよそりや」

「えへへへ、彼方ちゃんと一緒だあ」

へにやりと、本当に嬉しいそうに彼方さんははにかむ。彼女のその柔らかな表情が胸を締め付ける。

ススキ花火は二つともまたしても徐々に勢いをなくして、やがてはその輝きはふっと消える。夜に咲いた花のように。花火が消えるとどうしても感傷的な気持ちになるのは俺だけだろうか。

そんな気持ちをかき消すように次の花火を取り出そうとしていると、

「ねえねえ、線香花火ないの〜」

そう言つて彼方さんはこちらを覗き込んできた。薄暗闇の中、目が合う。

「もちろんあるよ」

「じゃあく、ちよーだい」

「はいはい」

彼方さんのおねだりに俺は少しだけ笑つて、線香花火を彼女に渡した。

しゃがんだ彼方さんが持つ花火に火を灯す。ぱちぱちと音を立てて、爆ぜる。火花を散らす。

「手持ち花火と言えばやっぱりこれだよ〜」

うんうんと頷く彼方さん。

派手さはない。だけどその小さな火は幻想的で、目を閉じるのも息を呑むのも惜しくなる。その光に照らされる彼方さんと共に、瞳の奥に焼き付けておきたいと思った。

「綺麗だ……」

思わず声が漏れた。馬鹿みたいな感想だがそれ以外思いつかなかった。

「そうだねえ」

彼方さんの言葉を聞きながら思う。夢みたいなのこの光景を忘れてしまいたくなかった。できるなら、ずっと見ていたい。この夜が、この夏が、終わって欲しくない。

「彼方ちゃん、ずっと見ていたいな」

ああ、同じことを考えていたんだな。嬉しくなる。

だけどそういうわけにはいかない。線香花火もやがて消える。小さくなる火花を見て、もうそろそろかと思う。

「あ……彼方ちゃんの消えちゃった……」

彼方さんのから先に消えた。寂しげな声音。

それから数秒後、俺のもあつけなく消えた。まだ見ていたかった。花火が消えるたびにそう思った。

また、視線がぶつかる。彼方さんは一転、ニヤリとしていた。何かを企んでいるのか

のよう。

「ねえねえ、もう一回線香花火しよ〜」

「いいけど、なんで？」

「どっちが先に消えるか、競争しようぜ〜」

そういうことか。俺は彼方さんのおふざけに乗ることにした。

「よしきた。負けたら罰ゲームな」

「罰ゲーム？」

彼方さんは不思議そうに聞き返してきた。

「勝った方の言うことを聞く……どうだ？」

「おう、彼方ちゃんやる気出てきた」

俺の言葉に生き生きとし出した彼方さん。果たしてどんな罰ゲームを彼女は考えるのか。

公正にするために二人同時に花火をつけることになった。幸い、花火に着火するための道具は予備を持ってきてあった。

お互いに『セーの』で火をつける。ささやかな、それでも鮮やかな光がまた瞼に映る。「彼方ちゃんの罰ゲーム、聞きたくない？」

「聞きたいけど……こういうのって先に言うものか？」

「だって彼方ちゃんが伝えたいから〜」

まあ、俺も聞きたいからいいけど。そのまま彼方さんに続きを促す。

「彼方ちゃんの罰ゲームはね〜」

ニコニコしながら話し始める彼方さん。薄明かりに照らされる彼女の表情は伝えたくて仕方ない、我慢できないというのが手に取るようにわかる。

「来年もー、こうやって一緒に花火することと」

『と』？ これで終わりじゃないのか。まだ続きがあるっぽい。

「それで、打ち上げ花火も一緒に見に行くこと〜」

そうか、そういう手があったか。

しかし彼方さんも欲張りだ。罰ゲーム一つだけじゃなくなってる。二つに増えてる。いやそもそも。

「それ、罰ゲームにならないよ」

「ふっふっふっ、そっかあ」

満足そうな微笑み。俺の言いたいことがわかってると言わんばかりの反応だった。

「でもさ、今から？ 気が早くない？」

「早くないよー。そうすれば確実にしょ〜」

「確かに」

「だから……来年のあなたの予定を今のうちから予約しちゃいまーす」

また、来年。どうしようもなく心が躍つてしまう。もう来年が待ち遠しくなる、そんな罰ゲームだと思う。もうこれ、罰ゲームじゃないなあ。

「あなたの罰ゲームは？ 彼方ちゃんに聞かせてー」

彼方さんは楽しそうにそう催促して俺の言葉を待った。悩む必要はなかった。俺の、彼方さんへの罰ゲームはもう決まっている。

「俺の罰ゲームは——」

言葉が音になる。彼方さんは大きく目を見開いた。

そして、火花が小さくなり火種が落ちる。ほぼ同時の勝負。

暗闇の中、彼方さんは照れくさそうに微笑んで、こくりと頷いた。来年の予定は決まった。楽しみがまた増えた。

夢の続き

夢の続きを探していた。

まだ夢を見ていたかった。目覚めたくなかった。目覚めは唐突で、その夢も突然打ち切られるように幕を閉じてしまった。

少しの未練を抱えながら、意識がはつきりとしてくる。

「……何時だ今」

世界は暗闇。きつとまだ夜なのだろうと思う。

闇に目が慣れていないせいで時計を見ることができない。だから正確な時間まではわからない。

スマホはどこに置いたっけ。近くにはなさそうで、スマホで確認することはできなかった。

「すー……すう……すやあー……」

近くから呼吸の音が聞こえ、温もりと柔らかさを感じる。きつと多分彼方さんだ。昨晚二人でベッドに入ったことは覚えている。

次第に目が暗闇に馴染んでくる。隣にはやっぱり彼方さんがいた。安らかに眠る彼女の姿はどこか祈るようで、修道女のような神聖さを帯びていた。

時計を見つけ時刻がわかる。午前3時過ぎ。闇はまだ深く、部屋の外の世界は静寂。朝はまだ遠い。

「……………眠れない」

何度か目を閉じて睡魔が再び訪れてくれないかと試みるも、なかなかお迎えには来てくれなかった。

溜息を一つ。フラストレーションを吐き出して切り替える。一度起きようと思った。身体を起こそうとした。

「……………むにやむにや……………ダメ……………すうすう……………」

起こそうとすると引つ張られて身体の動きを止められる。見れば服の裾を彼方さんが掴んでいた。可愛らしくて思わず声を出さず笑ってしまった。

……………どうしようかな。掴んでいる手を無理に剥がしてでも起きるべきか。それともこのままにしておくか。

そのままにしておいてあげよう。迷った末にそちらを選んだ。夢の中眠り続ける彼方さんの邪魔をするのは嫌だった。

「すーすー……………むにや……………えへへ〜」

闇の中で部屋に飾られた時計の音が妙に響く。そして微かに彼方さんの寝息も聞こえてくる。俺はそれに安らぎを感じた。

彼方さんは寝ながら嬉しそうにはにかむ。なにかいい夢でも見ているのだろうか。

「すう……むにやむにや、あなたといっしょにいられて……うれいなあ……すやあー」
本当に寝ているか怪しくなるぐらいはつきりとした寝言だ。聞いているこつちが恥ずかしくなる寝言でもある。彼方さんの寝顔を見ていられず、天を仰ぐ。

「実は起きてたりしないかこれ」

一人そう小さく呟くが、反応はない。起きてはいない、のか。

ちらりと彼方さんの顔を覗く。変わらない彼女の寝顔。幸せそうな表情。

彼方さんの眠りを見守っていよう。そう思っていたが。

「すやー……ぎゅー……えへへ……」

眠っている彼方さんに強く抱きしめられてしまう。どんな寝相だ。唐突だったので内心焦った。幸運なことに声を上げずに済んだが。

柔らかくて温かい、安心してしまうような彼方さんの身体に包まれる。安心してしまおうと同時に邪な感情も抱いてしまいたいそうになる。

さすがにこれはまずい、と思った。

「……彼方さん、離れてください、彼方さん」

小さな声で彼方さんに呼びかける。反応はない。俺の声は眠っている彼方さんには届いていないようだった。

もつと大きな声で呼びかけるべきだろう。だが気持ちよさそうな彼女の顔を見たら大きな声で呼びかけることなんてできなかつた。

「困ったな……」

もう手段は無理矢理抜け出すぐらいしか思いつかなかつた。

「ごめん、彼方さん」

きつと届かないであろう謝罪をして、彼方さんを少しずつ引き剥がす。抜け出して離れようとする。なるべく起こさないように慎重にゆっくりと。

「……ん、んん……んん」

俺のその動きに彼方さんは抵抗してくる。離れようともがくと彼女はより距離を詰めて密着してくる。

「んんん……なんでえ……はなれちゃうのー……」

きつと夢の中でも似たようなことが起きているのだろう。彼方さんの寝言はそう思わせた。

心苦しくなる。離れたたなくなる。離れなければいけない理由を疑いたくなる。このままでもいいのではと思ってしまう。

「……………うんん……………おはよ……………もーあさあ……………？」
もう遅かった。

目の前でゆっくりと、気だるげに瞼が開く。いつも以上にのんびりとした、寝起きの口調。……………彼方さんを起こしてしまった。

「まだ」

「……………えー……………ほんとお……………」

「本当だって。まだ暗いじゃん」

「あー……………ほんとだ……………」

そこでようやく彼方さんはまだ夜中だと気付いてくれたようだ。

「ごめん、起こしちゃった」

「んふふふ……………いいよ……………ふあ〜」

彼方さんも上半身だけ身体を起こした。まだまだ眠そうな彼方さんを見て、罪悪感が湧いてきた。そんなこと彼女はまったく気にしていなさそうだが。

「ん……………」

彼方さんは両手を上に伸ばして、身体を伸ばす。おかげ様で胸が張って強調される。薄暗闇の中でもわかる。

「ふあ……………まだまだ夜中だねえ」

「あなたも起きちゃったの？」

「あなたも欠伸を零しながら彼方さんは時計を見た。寝惚け眼を手で擦った。

「あなたも起きちゃったの？」

彼方さんの言葉に俺は頷く。すると彼女は頬を緩ませ嬉しそうに顔を綻ばせた。俺は怒っていない彼女の様子に安堵した。

「一緒だねえ」

「なんで嬉しそうなの」

「あなたと一緒にだから」

「恥ずかしい言葉だと少し思った。もちろん嬉しいのだけれど。言葉が出てこなくなる。」

「照れてる〜?」

「なんと確信犯だったか。ニヤリと笑ってこちらを覗き込む彼方さんを見て思った。俺の表情を確認した彼女はふふ〜と囁くようなくらい小さな声で笑った。なんとなく悔しさを覚えるが、その無邪気な笑みに毒気が抜けていった。」

「照れてるよ……」

「投げやり気味に言葉と身体を投げた。ベッドに身体が沈み込む。衝撃はマットレスが吸収してくれる。痛くない、気持ちいい。だけでも眠気は感じない。」

「もう一度寝るの?」

「寝れるかなあ」

とても眠れるとは今は思えない。そんな感情が言葉に籠ってしまった。

「じゃあじゃあ、彼方ちゃんとお喋りしよう〜」

「あれま」

想像外の言葉が彼方さんから出てきた。ちよつぴり眠そうな彼方さんの顔を思わず二度見してしまう。目が合うとくすぐったそうに彼女は笑った。

「だってあなたと一緒に寝たいんだもん」

思いがけない可愛らしい台詞にぼかんとしてしまう。その反応を見て彼方さんにはまりとする。なにか悪巧みを考えているような表情。

「えーいつ」

そんな、掛け声とともに彼方さんがこちらに飛び込んできた。躊躇いのない動作。俺は身構えなんて出来ていなかった。女性一人分の重みが衝撃とともにぶつかってきた。

「……重い」

そんな単純な言葉がまず出てきた。あと痛い。

「むー……そんな言葉、女の子に言っちゃだめだぞー」

胸元からちよつと不機嫌そうな彼方さんの声が響いた。顔を覗くと頬を膨らませていた。可愛いかよ。

「ごめんごめん。でも実際重い」

「彼方ちゃん重くない。枕みたいにふわふわ」

「いやいやいや」

人間なのだから重みはそれなりにある。そりや彼方さんは軽い方だと俺も思うけど。

「退いた方がいい？」

「……退かないでいいです」

彼方さんの俺の心を見透かしたような言葉に逆らえない。

重みはあるけど、それ以上に彼方さんの身体に密着するというのは物理的、心理的に心地よい。幸せな気持ちになる。離れがたい。

「じゃあ、彼方ちゃん重くないってこと〜？」

「そういうことです……」

「よろしいー」

彼方さんの満足そうな言葉が届いた。言わされた感あつたけど彼方さん的には満足してくれた、つばい。

ぎゅつと抱き着いてくる彼方さんを思い通りにさせながら部屋を見回した。暗さはまだ変わらない。まだ夜は続く。

「朝までこのまま眠れなかったらどうしような」

特に意図のない言葉。頭に思い浮かんだことを口に出した。ただ今のままだと眠れる気がしないのは嘘じゃなくて本当のことだった。

「だったら明日は一日中お昼寝だあ」

「なんて不健康な」

「でもちよつとだけいいかもって思ったでしょ」

「……まあ」

「ふふふ」

俺の考えは見透かされていた。彼方さんが漏らした笑い声に反論なんてできるわけがなかった。

でも憧れだと思う。一日中夢の中で過ごすなんて。実際できるわけではないけど。

「どおく？ 明日は彼方ちゃん、一日中夢の世界にいよ？」

なんとも彼女らしい言い回しで誘ってきた。魅力的で魅惑的な誘いだ。

「眠れたらなー」

「だいじょうぶ。眠れるまでずーつこのまま」

逆に眠れなくなりそう。そう言うとなつ方さんは不満そうにブーイングしてきた。興奮すると眠れないって言うじゃん？

でも、今夜ぐらいいはそれもいい。俺は彼方さんの誘惑に乗っかろうと思った。明日

の、面倒くさい日常のことなんて考えないようにした。

「……あのね〜」

「ん？」

「さつきね、彼方ちゃん、夢の中であなたと一緒にだったよ〜」

「どんな内容だったの？」

「忘れちゃったあ。……でもとっても幸せだったよ〜」

「そっか」

「今度もあなたと一緒に夢、見たいなあ……」

夜はまだまだ長い。眠れない、曖昧な時間も続く。

また明日が待ち遠しくて、時間を埋めるように彼女と俺は他愛のない話を交わし合う。次起きたら忘れているような、内容のないことばかりだ。日が昇って、意識が溶けて消えるまで、ずっと。

今のうちに言っておこう。おやすみ。

ミラーージュ

「先輩、こつちです」

沈んでいく橙の太陽が少女を鮮烈に照らしている。俺が彼女を見つけたとき、自分の場所を知らせるために手を大きく振っていた。駆け足で彼女のもとへ向かう。

「……ごめん、待たせた」

「いえ、そんな。全然待つてませんから」

彼女——桜坂しずくさんは俺の謝罪に少し焦った口調になった。こつちのほうが年上だし、まだまだ親しい訳じゃない。なので遠慮があるのだろう。

「それよりもごめんなさい。急に呼び出してしまつて」

「いいよ別に。まあ仕方ないよ」

俺も彼女も同じ方へ視線を向ける。ベンチに腰をかけた彼女の、その太ももの上で。彼方さんは眠っていた。

「すやあ……」

とても気持ちよさそうで、起こすのも躊躇つてしまうぐらい。というか。

「桜坂さん、起こそうとしたんだよね？」

「はい。声をかけたり何度も揺すってみたりしたんですけど」

「でも起きなかったと」

「はい……。この通り、起きてくれないんです」

ぐっすり眠る彼方さんを見て、それから桜坂さんと目が合って、二人して苦笑した。

「本当なら起きるのを待っていてほしいんですけど」

「用事があるんだよね？」

確か、彼女から届いたメッセージにはそう書いてあったはずだ。届いたのはほんの数十分前。

放課後に桜坂さんと彼方さんが二人で遊んでいた。その途中二人で座ったベンチで彼方さんが眠り始めたが、しばらく経ってもそのまま気持ちよく眠っていた。桜坂さんにはこの後家族と用事があり、帰る時間が迫っていたがなかなか彼方さんが起きてくれなかった。そんな内容がメッセージで送られてきた。

すやすや彼方さんを桜坂さんの膝枕からゆっくりと慎重に移動させ、背中におぶる。流石に俺の身体にも負荷がかかる。

「その……」めんなさい。彼方さんのこと任せちゃって」

「いいよいいよ。家族の用事なら仕方がないよ。彼方さんのことは任せて」

「よろしくお願いしますね、先輩」

最後まで申し訳なさそうにして桜坂さんは去っていった。……と思つたら戻つてきた。なぜ？

「寝てるからつて、イタズラしちゃダメですからね？」

うるさいやいと、その囁きに返してやろうと思つた。だけどその時にはもう離れて距離が開いていた。やられた。

そのまま離れていくのかと思つたら、彼女は一回こつちを振り返つて手を降つてきた。軽く笑いながら俺はそれに降り返して、彼方さんの家へと足を向けた。

ところでどうして桜坂さんは俺のことを「先輩」と呼ぶのだろうか？ 聞いてみても

「先輩だからですよ」としか答えてくれないし。確かに年上ではあるのだが、学校は違う。謎だ……。

夕暮れを歩く。どうしても歩く速さはスローなものになる。背負っている状態の動きづらさももちろんあるけど。それ以上に、背中に感じる重さと柔らかさは大事なものだから宝石を扱うようになってしまう。

「すやー……むにゃ……すぴー……」

彼方さんの呼吸の音が耳元で響く。一定のリズムで繰り返されていた。乱れない、安らかな寝息。どんな夢かはわからないが、悪夢ではなさそうだ。

世界は夕焼けによつて黄金に染められている。その光景は黙つて歩いているのと相まってセンチメンタルな気分になせられた。感傷的になつて思考がマイナスへと向かつてしまう。

思考の対象は今日学校で配られた進路希望調査のプリントだった。なにを書けばいいのかわからないでいた。将来に対するぼんやりとした不安が気を重くさせる。今が幸せだから余計に。この幸せがなくなつてしまふんじゃないかと、つい考へてしまふ。

なにを怖がつているんだ。まだ不確かなことじゃないか。そう鼓舞しても不安は消えてくれない。

——そこで脈絡もなく、頬になにかが触れる。

「暗い顔して、どうしたの〜」

のんびりとしたその声が聞こえてきたのと同時に今頬に触れているものが同じく頬だとわかる。自分のものと違つてもつと柔らかくてもちもちして、触れていて気持ちいい頬だ。

「……彼方さん？」

その頬の持ち主は一人しかいないだろう。近江彼方さんだけだ。

「ふっふっふ、だいせいかい。今頬をくつつけてるのはあなたが大好きな彼方ちゃんだよ〜」

大正解で。一体いつからクイズになったんだ。

「この状況だったら考えられるのは彼方さんしかないでしょ」

「むーう、もつと驚いてほしかったのに」

横目でちらつと見える、拗ねて悔しがる彼方さんが微笑ましい。くすりと声が漏れそうになった。

「まだ寝てもいいのに」

「だって、気付いたらおんぶされてるんだよ？ 折角だし堪能したかったのよ」

いかにも堪能してますよーと言いたげに、彼女は頬に頬擦りをしてくる。

「えへへへ、マーキング」

「ご満悦そうな声だ。こっちはくすぐりたいし、その上歩きづらいよ。」

「マーキングで。なんで。なぜにマーキング？」

「それは……この特等席は彼方ちゃん専用だってアピールするため」

そう言つてぎゅつと身体を寄せてくる。柔らかな彼方さんの身体で背中が幸せになる。

そんな意図があつたんかい。というか誰に対してのアピールなんだ。

「こんなところを好き好むのは彼方さんぐらいだよ」

「えへ……ほんとお？」

なぜに嬉しそう？ 声だけでわかる。絶対ニコニコしてる。満面の笑みだよこれ。

「やったあ、彼方ちゃん専用〜」

弾んだ声。その嬉しさを表現するかのようになぎゆうぎゆうとさらに強く抱き着いてくる。

「あんまり暴れないで」

「え〜……なんで？ 彼方ちゃんとかくっつけてあなたも嬉しいでしょー？」

「嬉しいんだけどさあ」

彼方さんを落としそうになるから困る。あんだけくっつかれると力が抜けそうになる。

「それでそれで……暗い顔してたけど、どうしたの〜？」

話が戻ってきた。寝起きの彼方さんが最初に言ったのが俺の表情のことだった。話が脱線した。

「なにかあったわけじゃないんだけど……将来のことをちよっと」

「おっとお、それは彼方ちゃんへのプロポーズか〜？」

それはまだ早すぎだ。

「じゃなくて進路のこと」

進路希望調査の紙が配られて、なんと書いたものか迷っていた。こんなもの適当に書

けばいいものの、ふと未来のことを考えさせられてしまう。5年後、10年後の自分は一体どこでなにをしているのだろうか、と不安になってしまった。そのことをぼつりぼつりと漏らした。

彼方さんは俺の話を黙って聞いてくれた。時折頷いてくれる声がして、彼女が居眠りせずにちゃんと聞いていてくれるのがわかる。

「そっかー」

まだ実体のない、ぼんやりとした悩みをその言葉で飲み込んで受け止めてくれた。俺は勝手に思った。笑わないで聞いてくれた。

「その気持ちわかるよ。不安になるよね？ 未来のことってわからないことってわからないことだから」

腕に回された彼方さんの腕が優しく覆ってくれて慈しんでくれているように思えた。大丈夫だよってことを教えてくれた。

「でもね、確かな事だつてあるつて彼方ちゃん思うんだ」

続けて発せられた彼方さんの言葉が妙に力強く感じた。いつもと変わらないはずなのに。

「それはねー……ずっと一緒だつてこと」

「ずっと一緒？」

「そだよ、あなたと彼方ちゃんはずっと一緒。これはもう決定事項だぜー」

おどけた口調。その響きには優しさが入り混じっていて、鼓膜を通して心にすつと染み込んで溶ける。剥離することなく、驚くほど良く馴染んだ。

彼方さんのその言葉を心に刻んでおきたくなった。いつでも脳内再生できるように脳みそに叩き込む。遠い未来でも覚えていれる様に。

「未来は不安なことよりも楽しいことばっかだぞー。だから大丈夫」

「そっか……うん」

見えないからこそわかることがある。回された腕に少し走った緊張。間延びした声に含まれる感情。触れた身体の感触と聴覚はより深くその言葉の意味を教えてくれた。

「じゃあ、こうやって彼方さんをおぶるのもきつとずっと変わらないなあ」

「ふっふっふ、末永くよろしくねえ」

「へーい、こちらこそ」

約束と呼ぶには大げさな、ちっぽけで蜚気楼みたいな未来の展望を彼方さんと俺は交わした。本当に履行されるかどうかもわからない。そうなればいいと思う。

思えば、俺の不安も蜚気楼みたいなものだ。実体なんてない。保証なんてどこにもない。彼方さんと交わした契りとそう大して変わらない。楽しいことだって、そう。

「……進路調査用紙にはなんて書くのかな」

「彼方ちゃんのお婿さん」

「それは駄目だろ」

学校に提出するものですよ？ それを書いたら職員室に呼び出されるだろう。

「えへへ、ダメ〜？」

「駄目。そんな甘えた声を出されてもこれは譲れないからな。絶対駄目だから」

「ちえつ、ちよつとは彼方ちゃんを喜ばせてくれてもいいのにー」

そんな嬉しい戯言を聞き流して、考える。とりあえず、大学進学にしよう。必要になれば後から変えればいい。

大事なことを知れた。未来はどうなるかはわからないが、そこは間違えない。

不安は消えないまま、抱えていく。

「彼方さんが俺を喜ばしてくれるなら考えなくもない」

「……えつちー」

「なんでそうなる」

「わかつてるクセに〜」

そういう意味では言っていないのに。決して。

耳元でくすくすと囁み殺した笑い声が聞こえる。その声を聞けばこつちをからかっているのが丸わかりだ。

笑い声が止んで、しつかり聞いててねと彼方さんが前置きしてきた。音量はそのまま変わらず、囁きのような声。

「彼方ちゃんの将来の夢は……あなたのお嫁さんになることだよ？」

「!?」

——思わず心臓が止まりそうになった。彼方さんのとびつきりの甘い声が耳に飛び込んできた。

とんでもない爆弾だ、これは。一歩間違えれば、俺の命は間違いなく逝っていた。

「どお〜？ 嬉しい？ 喜んでる？」

こいつはしてやられた。完敗だった。やってやったぜという感情が彼方さんの言葉の端々から感じられた。

このままじゃ本当に進路調査用紙に彼方さんのお婿さんとお書かなきゃいけない。マズいマズい。

俺は頭をフル回転させてどうにかしてこの事態を避ける知恵を絞る。考える。呼び出しは嫌だ。呼び出しは嫌だ……。

「ふいふいふい」

俺のそんな姿にご満悦な声の彼方さん。楽しそうだなによりだよ……。

……とりあえず。消えない将来への不安は脇に置いておいて。今すぐそこに迫る危

機について、頭を悩ませることになったのだった。

スリーピングビューティー

「~~~~~♪」

隣から鼻歌が聞こえる。随分機嫌がよさそうなのがすぐにわかる。音の端々から伝わってくる。

「彼方さん、ご機嫌だね」

「だって今日は彼方ちゃんのお誕生日なんだよ。そりゃご機嫌になるよ」

彼女の言葉通り、今日12月16日は近江彼方さんの誕生日。彼女が主役の日だ。

さつきまでニジガクのみんなに盛大に祝ってもらっていたおかげか、俺が彼方さんを迎えに行った時には既に上機嫌だった。

なんで迎えにいったのか、それはこれから彼方さんちで彼方さんと遙ちゃん、そして俺の三人で彼女のお誕生日会をやるためだ。ちなみに彼方さんには知らせていない。家には既に遙ちゃんがいて、彼女はお誕生日会の準備をしている。

俺は所謂足止め役。遙ちゃんの準備が終わるまで彼方さんを家に入らせないようにする役目。彼女に悟られないように時間を稼ぐ。

とはいえ、遙ちゃんだけに準備の全部を押し付けているわけではない。彼方さんを迎えに行くまでは遙ちゃんと一緒にお誕生日会の準備をしていた。とちよつと言いつつしておく。

パーティーの準備が終われば遙ちゃんから連絡が来る手筈になっている。それまでは時間稼ぎと……もう一つの目的を果たそう。こつちも重要だ。

「ニジガクのみんななどのお誕生日会、楽しかった？」

「もつちろーん。すつごく楽しかった」

俺の何気ない問いかけに彼方さんが食い気味に答える。俺は驚いてちよつぴり仰け反った。

「彼方ちゃんいっぱい祝ってもらっちゃった。あのねあのね、エマちゃんがね——」
彼方さんの話は止まらない。話したいことがたくさんあるみたいで、興奮しながら克明にニジガクのみんなにどう祝ってもらったのか教えてくれた。彼方さんのそんな様子が微笑ましくて、頬が綻んでしまいそうになる。

「あー、なに笑ってるの。ちゃんと聞いてる？」

話すことに夢中になっていた彼方さんに気付かれてしまった。ちゃんと聞いているさ。

「彼方さんが楽しそうに話すから、俺も嬉しくなっちゃって」

見てるこっちが笑顔になってしまいうぐらい彼方さんは楽しそうで嬉しそうだったから。自然とそうなってしまうのは仕方がないことだ。少し照れながら答えた。

「とうか、そんな笑顔だった？」

「うん、物凄くニコニコしてたよ」

「そこまでか」

「ほんとほんと。自覚ないみたいだねえ」

「いや、うん」

自覚はないけど納得してしまう。それぐらい微笑ましかったんだ。

「そんなことよりお誕生会の話の続き、聞かせてくれよ」

「あなたが邪魔したんだぞおー」

「はい、ごめんなさい。俺が悪かったです」

「ふふふ、彼方ちゃんが許してしんぜよう」

誰がどんなプレゼントをしたくれたのか。どんなケーキを食べたのか。話の続きを彼方さんは語ってくれる。語り終えてもまだまだ足りなさそうな表情なのが本当に楽しかったことを物語っていた。

「ねえねえ」

「なに？」

「ところで……なんで迎えに来てくれたの？」

おっと、痛いところを。

彼方さんはなんの疑いもなく、ただただ純粋な疑問を俺にぶつけているだけなんだろうけど。

「あとあと……今彼方ちゃんたちはどこに向かつてるの？」

困惑の中にほんのちよつぴりの警戒が混じった声音でさらなる問いかけが彼方さんから投げつけられた。

彼方さんの家に向かつていないことに気付かれた。そりやいずれは気付かれるだろうなとは思った。

「それは……」

「それは？」

間違つても、彼方さんのお誕生日会の準備ができるまで足止めします、なんて言えない。

それならもう、もう一つの俺個人の目的を言うしかない。……非常に恥ずかしいけど。

目的地を彼方さんに告げる。それはこの近辺にある大型ショッピング施設だ。俺も彼方さんもお世話になっている場所だ。

ただ告げられた彼方さんはわからないといった表情だった。場所だけじゃわからないよね。

「実はさ、彼方さんの誕生日プレゼントを選びたくてさ」

……実をいうと俺はまだ彼女の誕生日プレゼントを用意していなかった。というかなに選べばいいかわからなかった。アクセサリーみたいな身に着けるものだと個人の好みもあるし。似合わないとかそういう事態は避けたかった。

だからいつそのこと、彼方さんと一緒に選べばいいと思ったんだ。その方が確実にだった。浪漫の欠片もないが。

「あなたが選んだものだったら、彼方ちゃんなんでも嬉しいよ？」

俺の話聞いてくれて思った通りの言葉が返ってきた。そう言うだろうなとは思ってた。嬉しいことだ。でも。

「一緒に選ぶのも楽しいと思うんだ」

もう一つ、そういう楽しみも俺はあると思った。一緒に見て回って、選んで、買う。ただ贈り物をするよりも一緒に選んだ思い出という付加価値が付いてくる。するともっとプレゼントに愛着が湧く。

「一緒に選ぶかあ……確かに楽しそう」

「でしょ」

「でも遙ちゃんが……」

ちよつぴり心配そうに遙ちゃんのことを気にする彼方さん。この反応は予想済み。

「大丈夫。事前に話しておいた」

ちなみに遙ちゃんに話したところ、『ゆつくり選んできて大丈夫ですよ』と言われた。きつと準備時間をなるべく確保したいからだろう。

「そつかあ……それじゃあ、一緒に選ぼう！」

片手を高く突き上げて、今にも駆け出しそうなくらいなテンションを見せる彼方さん。だけでも所々の仕草でいつものゆつたりとした動きを垣間見せて、そのギャップが面白かった。

その言葉が聞いてホツと思わず息を吐いてしまった。肯定的に受け止めてくれてよかった。彼方さんの楽しそうにわくわくした顔が俺を安心させた。

なんとなく彼方さんに触れたくなくて、彼女の手を掴んで握った。

「んー？ 突然どうしたどうした？ 彼方ちゃんと手を繋ぎたくなくなっちゃったかあ？」

突然のことに少し驚きつつも、嫌そうな表情を見せず彼方さんははにかんだ。

「うん」

素直に頷くと彼女はさらに破顔した。

「えへへへ、いいよ。彼方ちゃんも同じ気持ちだから」

彼方さんは握られた手を指を絡めるようにして、握り返してきた。隙間をなくすかのようにつかりと結ばれた。

寒空の下、肌と肌が触れて重なり合ってお互いの手のひらの熱が交じり合う。焼け石に水状態ではあるがそれでも温かく感じた。

「あつたかいねえ」

「だな、温かい」

微かな温かさを共有しながら足取りは朗らかに進む。

街は騒がしい。もうすぐクリスマスということもあって街はクリスマス一色に染まっていた。

大型ショッピングモールは平日だというのに人で溢れていた。辿り着いたその場所もクリスマスの装飾が飾られ、クリスマスに向けて購買意欲を煽っていた。ただ、単純にとても綺麗で、見ているだけで心奪われる光景だった。

「彼方さんは今欲しいものある？」

「ん〜……そうだねえ……」

そういえばと思い、着いて早々にそんな質問をぶつけてみた。彼方さんは回答に困り悩んでしまう。

そりやそうだよなあ。いきなり言われてもぱつとは出てこないだろう。

「……新しいフライパン?」

沈黙ののち、彼方さんはそんな誕生日プレゼントっぽくないものを提示してきた。

「いやそういうのじゃなくて」

気持ちはわかるけど。考え込んで浮かんでこなかった結果、今必要なものを言っただけなんだろうけど。

「それともプレゼントはフライパンでいい?」

「むう、いじわる」

唇を尖らせた拗ね彼方さんに冗談だとすぐに伝える。この拗ね拗ね彼方さん、可愛くてずっと見ていたいぐらいなんだけど、さすがに彼女のご機嫌を優先した。なんとたつて今日は彼女の誕生日なのだから。

さすが大型ショッピングモール。お店が多すぎてどこから見ても回るかを決めるだけで大変だ。とりあえず、最初に目に入った衣料品店に入ることにした。

その後、別の衣料品店、靴屋、本屋などいくつかのお店を軽く見回ってみたものの、これだというような決め手になるようなものは見つからなかった。候補はいくつか見つかったんだけど。

少し焦りが出てくる。果たしてプレゼントは決まるのか、タイムリミットまでに決ま

るのか、という二つの焦りだ。後者に関して、まだ遙ちやんから連絡はないが、もうそろそろ来てもおかしくなかった。

「ねえねえ、ここ！ 次はここ入ってみようよ〜！」

テンションMAXの彼方さんが次のお店を指し示す。彼女のハイテンションな姿は俺の焦りを緩和させてくれる。

彼方さんがしゃっきりさんな腕で指し示したのは雑貨店。アクセサリーも取り扱っていたがお値段は学生向けな、リーズナブルな価格帯のものが多い。店外からちらつと見えたPOPや値札からそう思った。

繋いだ手を彼方さんに引つ張られる。その動きに逆らわずにお店の中へと入った。当然店内もクリスマス一色で、客層もなんとなく男女ペアが多目な気がした。

「じゃーん！ どお？ このネットドレス、似合ってる？」

「なんかいつもより大人っぽく見えていいね。似合ってる」

「えへへ〜」

陳列されている商品をあだこうだ言いながら店内を回る。モノよりもそれを手に取るたびに様々な表情を見せる彼方さんにどうしても視線が向かってしまう。揺れる髪の毛の一本も見逃したくなかった。

彼方さんの方を向いていた視線を剥がして、店内へと視線を向ける。やはり気になっ

てしまうもので、何度も視線は宙をさまよって結局のところ彼女の元へ戻っていったら
まう。

その繰り返しの中で、不意に彼方さんの表情が変わった。

「お」

彼女の声が漏れた。決してその響きは悪いものではない。楽しそうに聞こえた。

彼方さんの顔をしっかりと見る。彼女の視線は止まっていた。その先を追う。

「……ブレスレット」

青緑の石をさりげなく装飾させた、普段使いしやすいシンプルなデザイン。その淡い
色が光った。

「ふむふむ、ほおー、なるほどなるほど〜」

彼方さんはまず覗き込んで観察して、それからブレスレットを手にとって目の近くま
で持つていきじつくりと吟味した。時折POPなんかに目も移しながら。

一通り吟味し終えたのか、ブレスレットを顔から離す。そして彼方さんはそのブレス
レットを腕に装着した。

「ねえねえ、このブレスレットはどおかなあ？ 似合ってる？」

ブレスレットを着けた腕を差し出して彼方さんは俺に見せてきた。捲られた長袖の
先、白い肌はその色は映えて見えた。

「似合ってるよ」

こういう時、自分の語彙力のなさが悔しい。もっとユーモアに富んだ褒め方ができたらなと思う。

彼方さんはそんな俺の顔をじっと見つめて、

「そっかあ、えへへへ、彼方ちゃんニヤけちゃうな〜」

それから顔を綻ばせた。頬は緩んで、彼女の言う通り口元はニヤけていた。

それから少しの間黙り込んで、それから彼方さんは口を開いた。

「彼方ちゃん、これがいいな」

「このブレスレット?」

「そ〜」

彼方さんが選んだのはその青緑のブレスレットだった。俺の財布事情からしても支払えるレベルの商品だ。なんならもうちよつと高くても大丈夫なんだが。

そのことを口にしたのだが。

「ううん、これにする〜」

「気つかってない? もうちよつと高いのでも大丈夫だよ?」

「いいの」

「だって、あなたが似合うって言うてくれたから」

「そっか」

彼女がそう言うなら俺に文句なんてない。それに……俺も本当に似合ってるって思ったから反対なんてするはずもなかった。

二人でレジに持っていく。彼方さんは着けて帰るからと言って、ラッピングはしてもらわなかった。商品を受け取って、お店を出るとちようどいいタイミングで携帯が一度だけ震えた。遙ちゃんからの合図だ。本当にいいタイミングだった。

シヨップピング施設から出るとやっぱり寒かった。吹き付ける北風が妙に冷たくてなお一層そう感じられた。

時刻的にはまだ夕方なのだが、陽は落ちて空は暗くなり星が出ていた。季節のせいかな、本当に夜が早くなった。

「うううう、寒い……」

冷たい風が吹いて、繋ぎっぱなしの彼方さんの手が震える。振動が伝わってきた。

「寒いし、早く帰ろう」

「だね、温かい布団が恋しい……」

「まだ寝るには早いだろ」

「えー、でもあなたは彼方ちゃんと一緒に寝たくない？ きつとすぐく気持ちいいよ？」

それを言われると寝たくなってくる。いやいやこの後はお誕生日会があるんだ。遙ちゃん（と俺）が頑張って準備したのだからちゃんと彼方さんを祝いたい。

「うふふ、気が変わったらいつでも言っておねえ？ 彼方ちゃん大歓迎だから」

まだ眠っていない眠り姫が囁いて誘ってくる。喉が鳴りそうになって我慢した。いつも思うのだが、どうして彼女の誘いは抗いがたいのだろう。思わず流されたくなくなってしまう。

「……気が向いたら」

俺の精一杯の返答に彼方さんはしてやったりと言わんばかりのドヤ顔を見せた。

内心じゃ今すぐその誘いに乗っかかりたい。だけど今日はまだまだこれからなのだから。せめてお誕生日会が終わるまでは堪えよう。その後は……。

「すけべな顔してるぞー」

「どんな顔だよ……」

「頬が緩んでニターってなってる」

別に変なこと考えていないのにな。だからその嬉しそうなドヤ顔は止めなさい。

「……それよりも。さあさあ早く帰ろう」

「ふふふ、そうだねえ」

くっそう。今に見てる。近江家の玄関の扉を開けた時の表情が楽しみだ。隣で小悪

魔のように笑う彼方さんを見て、その光景を想像する。

彼女の誕生日は終わらない。まだまだ始まったばかりだった。

微睡んでいたい

うちのリビングは日当たりがいい。お昼になると太陽が窓から差し込んできて、暖かな日溜まりができる。

「うーん……あつたかあい〜」

その場所に彼方さんは気持ちよさそうに寝転ぶ。猫みたいだと思った。

休日の昼間、うちの家に彼方さんが遊びに来ていた。といつても二人でのんびりとしているだけだが。

特別なことはなにもしていない。俺も彼女に倣い、陽の当たるその場所で座り込んでいた。

「ぼかぼかで気持ちよく眠れそうだなあ」

「寝てもいいよ?」

「えー……せつかく二人つきりだもん。ここで寝ちやうのはちよつと惜しい……」

彼方さんの言う通り、今のこの家には俺と彼女の二人だけだった。うちの両親は休日をいいことに小旅行に行っていた。息子を一人残して。別にいいけど。彼方さんと二

人つきりになれたし。

彼方さんの言葉は嬉しい。わかりやすい言葉は胸にぶつ刺さって、思いがけずニヤけてしまう。

「……すやあ」

「あれ」

目を瞑り、寝息を漏らす。安らかな表情。

ひよつとして寝てる？ ついさつき、寝れるのが惜しいと、珍しいこと言ったのに。早くない？ それも彼方さんらしいと思うけど。

「……………はっ」

と思つたらすぐにお目目をぱちりと開けた。

「危ない危ない。寝ちやうところだつたぜ」

笑いが零れてしまうのは不可抗力だと思う。彼女を馬鹿にするとかそういう意味じゃない。

彼方さんは唇を尖らせていじけた表情を見せた。機嫌を損ねてしまったようだった。

「むう、そんなに笑って馬鹿にしてる〜？」

「してないしてない」

ただちよつと面白かつただけだ。あと和んだ。うんそれぐらい。決して馬鹿にして

いない。

「それを馬鹿にしてるって言うんだぞー」

どうやら彼方さんにはそう読み取られたらしい。そんなつもりもなかったくないのにな。今も唇を尖らせたまま、拗ねている彼方さん。ただ寝そべっているので迫力はないし、むしろ微笑ましく感じられた。

「許してよ」

「えー、やだ〜」

「ごめんて」

「どうしよっかなあ」

「どうしたら許してくれる？ なんでも言うこと聞くからさ」

「う〜ん……そうだねえ……」

俺の言葉に彼方さんは真剣に悩みだす。おいおい。せめて痛いのか苦しいのは止めてほしい。

「あ、彼方ちゃん閃いた！ 彼方ちゃんをいっぱい甘やかしてくれるなら許したげる〜」
甘やかす、とききた。なかなか抽象的というか曖昧というか、どうすればいいのか困ってしまう。

困ったので俺は彼方さんに直接聞いてしまうことにした。それが一番手っ取り早

かった。

「ちなみに具体的には？」

「えつとね、そうだな……例えば、あなたが彼方ちゃんを腕枕してくれるとか」

「腕枕か。やってみる？」

「え、いいの？」

「それぐらいなら、うん」

……ぶつちやけ。内心は無茶難題がこなくてホツとしてる。腕枕ぐらいならお安い御用だ。

さつそく。彼方さんのすぐ横で寝転がる。腕を伸ばして広げるとその上に彼女は頭をのせた。

重さが二の腕の辺りに伝わる。思ったより痛い。

あまり長いことやらないほうがよさそうだ。少しの間ならいいが、腕へと負担がかかってしまう。

「んん、よく眠れそう」

「それはよかった。でも少しだけな」

「ええー」

「だって腕痛くなるし」

「むうー……それなら仕方ないねえ」

「お」

意外と素直に聞いてくれた。もつと嫌がるかと思つたのに。

と顔には出さずに少しだけ驚いていると彼方さんは続けて口を開く。

「でもくつつくのはやめてあげない」

彼方さんはすすつと身体をより密着させてくる。彼女の身体の柔らかさがよりはつきりとわかつた。身体を丸めてくつついてくるその様子はやっぱり猫みたいだと思つた。

「えへへ……しゃーわせ」

蕩けた顔を見せる彼方さんに俺も幸せだと感じた。

自分がとても単純なことに呆れてしまう。好きな女の子とただ触れているだけなのに。ほんと男つて単純だわ。俺は自分が単純なのを男のせいにした。

「ねえねえ、あなたも嬉しい？ 幸せ？」

「そりゃまあ、うん、嬉しいし幸せだけど」

至近距離から俺の反応をその綺麗な瞳でじつくりと見つめてきて、それから彼方さんは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ふっふっふっ、照れてるねえ」

「……照れてるよ。照れてる。照れてるさ」

さつさと白旗を上げる。認める。照れてるよ。照れるしかないでしょ、こんなん。照れる以外の反応がわからないよ俺は。

なにが面白いのか、彼方さんはくすぐすと零した。余計に恥ずかしくなったのは言うまでもない。

「かわいい〜」

「やめてくれよ……」

からかっているのか、それとも本心なのか。判断が付かない。彼方さんは本心だよと言っていたが、どちらにせよ嬉しくはないのに変わりない。こそばゆくて仕方がない。

「ずっとこうしてたい」

さつきも言った通り、ずっとはしないぞ？ これはフリではない。繰り返す、フリではない。ハネムーン症候群になってしまう。シャレにならない。

「そろそろやめたほうがいい？」

「まあ、うん、そろそろ、なあ」

腕はまだ大丈夫そうだけど。そろそろやめてくれたほうが無難か。

言われた彼方さんは少し残念そうだった。シユンという擬音が聞こえてきそうなその顔はやめてほしい。罪悪感をかき立てられてしまう。

「じゃあじゃあ〜……今度はこうするねー?」

腕枕の状態から彼方さんは身体を回転させながら俺の身体の上へと登り覆いかぶさった。

「彼方ちゃん専用ベッド〜」

俺は彼方さんの身体にのしかかられて、彼女の言う通りベッドにされていた。いや見方を変えれば彼方さんは俺の掛け布団になるんじゃないかこれ。

……大丈夫か俺。寝惚けてないかこれ。この暖かな日溜まりのせいか。

当然ながら重い。彼方さんが重いとかじゃなくて人間にのしかかられたらそうなる。ただ彼女の身体の柔らかさを一番近くで感じられて、脳内は幸福感で満たされていた。

「くんくんくん……はふう、いい匂〜い」

なにを شدしたかと思えば、彼方さんは俺の胸に顔を埋めて匂いを嗅いで堪能していた。なぜ堪能できるのかが俺にはさっぱりわからない。

「男臭いだけでしょ……」

「彼方ちゃんは好きだけどなあ」

「それに同意する人間は世界で彼方さんだけだよ」

「えーでも、あなたも彼方ちゃんの匂い、大好きでしょ〜?」

「好きだけどさあ」

好きだけど、俺のと彼方さんのでは匂いは匂いでも異なるものだろう。一方はいい匂い、もう一方は臭い匂いなのだから。それともこう考えるのは俺が男だからだろうか。

「あなたも……彼方ちゃんの匂い、嗅いでみる？」

彼方さんはなんでもないような顔でそんなびっくり発言を繰り返した。思わず心臓が跳ねた。

果たしても本当に嗅いでもいいのだろうか。罨だったりしない？ そんな疑心が浮かぶ。

「どろどろどろどろ」

俺が躊躇っていると彼方さんはずいずいと迫ってくる。

ああ、もう、嗅いでしまえ。ネガティブな感情を投げ捨てて、俺は彼女の誘いに流されることにした。

位置的に俺がそのまま匂いを嗅げるのは彼方さんの髪、顔ぐらいだろう。それより下は彼方さんが動いてくれないと匂いを嗅げない。

「すう……」

顎を引いて、俺の胸に乗った彼方さんの髪の匂いを嗅いだ。吸って、吐いて、彼女の匂いを堪能する。肺一杯に満ちる。

当然だがいい匂いだ。シャンプーかトリートメントか、その特有の華やかな匂い。そ

れとは別に香る、ミルクのような彼女自身の匂い。混じり合つて鼻孔をくすぐる。

「どおっ…」

ちよつぴり恥じらしい気味に尋ねる彼方さんに、俺は抱いていることをそのままぶちまけていいものか躊躇う。オブラートに包まなければ変態というかもはや犯罪者になりそうだった。

「ずっと嗅いでいたい……」

胸元から伸びる視線に抗うことはできなかつた。できなかつたよ……。

それでもなんとかヤバいところまで零さなくても済んだのは奇跡だった。まあだいぶキモい発言なんだけどさ。

「そうでしょそうでしょ」

赤みを帯びた頬を気にせずには彼方さんはうんうんとしたり顔を俺に見せてくれた。その表情に救われたような、小恥ずかしいような、なんとも言えない気分になった。

「むふう〜」

その間にも彼方さんは胸元に顔を埋めて、匂いを堪能していた。

なんとなく身もだえしてしまふ。彼方さんの気の抜けたリラックスした様子を見て、まあいいかと思えた。

ちよつどいい暖かさの日溜まりは俺の力を抜けさせてくれた。ずっとここにいたい、

ずっとこうしていたいと俺に思わせた。

「ずっとこうしてたいーい」

俺が考えていたことが彼方さんの口から発せられた。本日二度目の言葉だ。

驚きはない。この温もりならそう考えるのは自然のことだと思えた。彼方さんなら尚更。

「俺もー」

俺の言葉も間延びした、緩みきったものになった。今度は俺も同意できた。

「ふあ〜……」

可愛らしい欠伸が間近から聞こえてきた。それに俺もつられて口を開けて欠伸をしてしまう。二人で顔を見合わせて笑った。

「眠るのは勿体ないって言ってたじゃん」

「こんなに暖かくて気持ちいいんだから仕方ないよねえ」

「確かに」

「でしよ〜」

彼方さんの気持ちがよくわかる。さつきから意識が溶けて消えそうだった。せつかく彼女と二人つきりなのに、それでも眠りたいと思ってしまう。

「……………」

「……………」

彼方さんも同じみたいだ。二人して会話が減って黙り込む時間が増えてきたのがその証拠。

日溜まりの暖かさが夢と現の境界線を曖昧にしていた。彼方さんの身体の熱と重さがなんとか意識を現実へと留めさせていた。それにも限度があるけど。

「…………寝てもいいよ」

「うん…………そーする……………」

二人とも意識は半分夢の中に旅立っている。

「あなたも…………眠そうだねえ……………」

「まあ…………眠い……………」

「…………ふふふ…………夢の中でも一緒だぜ……………」

うつらとうつらと、揺蕩っていた。彼方さんのように微睡んでいれるのがとても幸せだと思えた。

現実が溶けていく。夢と世界が混ざり合って消えていく。宇宙が終わっていく。

「…………どんな夢…………見たい…………？」

「むにゃ…………そーだなあ……………」

「たくさん…………あるのかよ……………」

「……いっぱいあるよ……」

「それは……たいへんだ……」

「でもお……楽しそうだよ……えへへ……」

「……」

「……」

「……すー」

「……すやあ」

温度差

「はあー……」

吐き出されるのは白い息。その息を両手にかけて、少しでも寒さを凌ごうとした。

もちろん、焼け石に水なのは言わずもがな。それでもと、何度も生ぬるい息を吹きかける。暖かくなるのは一瞬だけ。かじかんだ手にはそれだけでも救いになった。

「はあー……」

もう一度、息を吐く。薄暗い世界の中で白い息はすぐさま霧散していく。

手袋をしてこればよかった。今更ながら思う。もう後の祭りだが。

ポケットに手をつ突っ込む。やっぱり寒さは厳しい。息を吐いて手にかけるのとどっこいどっこいだ。要するに寒い。

彼方さんはまだ来ない。メッセージだともうそろそろだと思っただけ。

「おまたせ〜」

さほど長い時間待っていたわけじゃないが、ようやくかと思ってしまった。寒いからね、仕方ないね。

ともかく待ち人が来てくれた。

「待った？」

「そんなに待つてないよ」

凍え死ぬかと思つたけど。そんなこと彼方さんには口が裂けても言わない。ところが彼方さんは俺の言葉に不満があつたのか口を尖らせた。なんでだ。

「むー……ここは『今来たところ』って答えるところでしょ」

「おっと」

そんな罣があるとは。デートの定番のやつだそれ。今日はデートじゃないけど。

「じゃあ、もう一回」

リメイクきたこれ。俺は苦笑いで彼女の要望に応えることにした。

「……今来たところだぞ」

「うむ、よろしいー」

やり直しにご満悦な彼方さん。ご機嫌そうでなにより。

彼女の頬が赤く染まっているのはやはり寒さのせいか。頬だけじゃない鼻もだ。可愛らしくて胸が熱くなった。身体はまだ寒いままだが。

今日はバイト上がりの彼方さんを迎えに来ていた。こういうことは毎度ではないが初めてのこともなかった。タイミングが合えば、だ。

こういう機会は俺としても大歓迎で、できる限りいつも迎えに行きたいぐらいだった。なんせあまり多くない彼方さんと会える貴重な時間だ。スクールアイドルやバイト、家事諸々で彼方さんは忙しい。彼女がしたいことの邪魔をしないで会える時間はなるべく大事にしたい。

「それじゃあ、エスコートよろしくね」

「よろこんで」

軽口を交わし合つて、近江家へと足を進める。

歩き出しと同時に彼方さんとはとととと俺に近づいてきた。そして彼女の指が俺の服の裾を掴んでくる。腕の部分に触れそうで触れない、服だけを掴む絶妙な加減だ。

「えへへ」

顔を覗き込むとくすぐったそうにはにかんだ。その瞳を見て、身体が内側からむず痒くなる。だけど不快じゃない。

なんでそんなに嬉しそうなんだって、聞かなくてもなんとなくわかった。

「なんだよ」

「なんでもなくいい」

「ほんと?」

「ほんとだぞー」

「もしかしてだけどき、彼方さん、手を繋ぎたいとか?」

なんとなく裾を掴んだ意図を俺なりに解釈したらそういう結論に至った。思い違いかもしれない。割と自信あるけど。

「えー、そんなことないよ。そんなこと言ってみしろ手を繋ぎたいのはあなたなんじゃない?」

ちよつと拗ねたような視線が突き刺さる。いやいやいや。

「彼方さんでしょ。裾を掴んでるのってそういうことなんじゃないの」

「違うもーん。あなたのほうだよー」

小さな子供みたいに頬を膨らませて否定する彼方さん。違うの?」

「むくう……」

あー……わかった。俺が折れよう。掴んだ裾を揺らしたり動かしたりして悪戯している彼方さんを見て決めた。

「わかったわかった。俺のほうだから。俺は彼方さんと手を繋ぎたいよ」
「うふふ、ようやく素直になったねえ」

俺のヤケクソ気味の言葉で脹れっ面だったのがすぐさまニコニコになった。早い。いいさ。俺が手を繋ぎたいのは本当のことなんだから。

「素直になったから、手え、繋いでいい?」

「もちろん！ いいよいいよ」

バイト上がりとは思えないほどのハイテンションな返答だ。すごい食いつきっぷりだ。素直になったのは彼方さんのほうだ。

彼方さんは服の裾から手を放して、つーと腕のラインをなぞるように手を動かす。やがて彼女の手と俺の手が触れた。その瞬間、反射的に弾かれるみたいにお互いの手が離れて、再びすぐお互いに手を近づけて握りしめ合う。

「あなたの手、冷たいねえ」

「彼方さんのだつて冷たいけど」

「お揃いだねえ」

「お揃いだなあ」

しょーもないことだけど、彼方さんと同じ気持ち共有できるのは嬉しい。彼女も嬉しそうだから余計に。

「っ」

思わず驚いてしまう。彼方さんが手の繋ぎ方を変えてきたからだ。お互いの指が絡み合うように指を動かしてきた。

俺の驚きようを見て彼方さんは小悪魔みたいな笑みを浮かべた。彼女の意図通りの反応を俺がしてしまったからだろうか。

「えへへ」

してやったりと言いたげな表情に俺は口を開閉させることしかできなかった。言葉が出てこなかったんだ。

困った俺は空を仰いだ。冬の空気をしんとして澄んでいる。だからか見上げた夜空も綺麗に見えた。

……そういえば。

「彼方さん、手袋してきてないんだ」

手を繋いだ時はもちろん、彼女の手はずっと俺と同じで素手のままだった。

「うん、してないねえ。鞆の中には入ってるけど」

「？」

「ニブチンさんだなあ」

呆れたような彼方さんの言葉。俺は彼方さんが手袋をしていない理由を考える。

……そうか。すぐにわかった。つまり彼方さんが俺と手を繋ぐための口実のひとつなんだ。合点がいった。

「ああ、いやうん、わかったわかった」

「ほんとに〜？」

「ちゃんとわかったよ」

「うんうん、よくできました〜」

嬉しそうにはにかむ彼方さん。その言い方はまるで小さい子供相手だ。

おちよくつてるように聞こえるが、まあいいか。あくまで手を握りたいのは俺なんだから。

ご機嫌そうに手を大きく振り回して歩く彼方さん。俺はそれに引つ張られるように歩く。繋がった手を解くつもりはなかった。

あ。彼方さんがなにか見つけたのか、声を上げた。

「ねえねえねえ」

彼方さんが前からこつちへ顔を向けた。にんまりと頬を歪ませていた。なにを企んでる？

「なに？」

「月が綺麗だねえ」

……ああ、そういうことか。

「知ってる。なんなら星も綺麗だ」

見える星は少ないけどな。

「そういう意味じゃないぞー」

「それも知ってる」

「素直じゃないねえ」

どこかつまらなそうに彼方さんは言う。彼方さんがそれ言う？ どの口がって言いなくなる。いや言っただけだ。

「言う言う。だつて恋人だもくん」

俺は面を食らつてしまった。あまりにもあつけらかなと言うから。

「じゃあ、わかりやすく言つてあげる」

握りしめる手の力が強くなる。

「好きだよ、うふふ」

そして、ちよつぱり照れ混じりの彼方さんの言葉が耳の中に飛び込んできた。飛び込んできた言葉は熱になって身体の中を駆け巡り、隅々まで伝導される。身体に熱が籠つてしまうからどうにも落ち着かない。体内の熱さと体外の寒さがそれを加速させる。

……いまだになれないのは果たして俺だけだろうか。意地の悪いことを思いついた。

「俺も、彼方さんのこと、好きですよ」

思いついたそのままに言葉を発する。彼女のご機嫌がこの後どうなるかなんて考えていないままに話した。短慮とはまさにこのこと。

「えへへ……嬉しいなあ」

気になる彼方さんの反応は……これでもかかっていうぐらいニヤけていた。危惧して

いたことは回避されたみたいだった。

「もつともーつと『好き』って言ってる？」

「……ええ」

「どころか、さらに『好き』を要求されちゃったよ。」

「あなたの好きって気持ち、もつと聞きたいなあ？ ダメ？」

「や、恥ずかしいんだけど」

「可愛らしく求められるが、本当に恥ずかしい。」

「今更だと思っただけなあ」

「今更ではない。さっきのだから俺はすごく恥ずかしかったし、いまだに慣れていないのだ。」

「あとお外で言うのは特に。せめて彼方さんの部屋じゃ駄目だろうか。遙ちゃんはいるけど外よりは100倍マシだ。」

「やだ。今すぐ聞きたい」

「良い笑顔で即拒否された。」

「ほら、何度も言われるとき、慣れちゃうだろう？ だからこういうのは偶にがいいんじゃないかなって」

「そんなことない！ あなたの『好き』は何回聞いても飽きないもん」

なんとかんとかか理由をつけて回避しようとしたが、彼方さんは許してくれない。

「ほらほら、ね、彼方ちゃんだけ大好きって、ちゃんと言葉にして言ってる？」

さらなる追撃という名のおねだりが迫りくる。俺はどんどん追い詰められていく。これはもう羞恥心を投げ捨てて言わなきゃならないか……？

「……わかった」

またも俺の方から降参した。なんだか、いつつも彼女のおねだりに負けている気がする。

でもこれはしようがないんだ。惚れた弱みってよく言うだろう？　そういうことだ。

「やったあ！　早く早く」

無邪気に笑う彼方さん見て、俺の体温は上限を知らず上がっていく。このまま溶けて気体になってもおかしくない。

温度差は広がる。内と外と、俺と彼女と。

「……彼方さん大好きです」

もうやけばつち精神で言葉を放った。もちろん気持ちちは込めている。それでできれば彼方さんもこの身体の芯から燻ってくるような熱さを堪能してほしい。

「もつと〜」

「彼方さんだけ、好きです」

「まだまだ」

「世界一可愛い。大好き」

「えへへへ、もつともつと言つて」

何度も何度も催促されてそれに応える。その繰り返しの途中で気づいた。彼女の顔は真つ赤つかになつている。嬉しそうな表情にどこか恥じらいが混じつている。多分、俺の妄想ではないはずだ。

俺はそれを彼方さんに指摘することなくスルーした。思い違いかもしれないというものもあるが、わざわざ指摘する必要なんてないと思つたんだ。

「やっぱり手袋、必要なかったねえ」

ああ、うん。ある意味、その言葉が彼女が言わない気持ちを表しているような、そんな気がした。俺の妄想ではなかった。

「こうやってずつと歩いていたいなあ」

『『好き』はなくていい?』

「それはダメ」

お外での『好き』の連呼はまだ続行するんだ。

「寒いでしょ」

「寒くないよー」

「でもずっとこのままだとお腹も空くし疲れるしちゃんと寝れないぞ」

「むむむ……それなら仕方ないか」

「……またいつだつて機会はあるから」

「言質とつたっど」

言質で。ちよいと物騒なワードだ。そんな大層なことじゃないのに。あととつたっど。

温度差はそのまま歩く。彼方さんちに着けばこの温度差はなくなってしまうのだから。それが惜しかった。

春の匂い

ずっと夢を見ていたい、と。彼女のようなことを俺も思ってしまった。

だけど現実には。決まった時間にたたき起こされる。ベッドから飛び起きて、鳴り響くスマホを黙らせて、せわしない朝が始まる。

制服に着替えて、食パン一枚を食べ、支度を済ませて、玄関から飛び出した。見上げると、雲一つない青空が視界いっぱいに広がっていた。ぼんやりと眺めて、それから学校へと足を進める。

まだ少し肌寒いが、それでも1週間ぐらい前と比べると暖かくなってきた。冬が終わりを迎えて、春が近づいていた。というか、もう春だ。

「……ふああ〜」

学校への道の途中、大きな欠伸が漏れ出てしまう。まだまだ眠かった。

「大きな欠伸だねえ」

近くから声が耳に届く。よく知った、いつもののんびりした声。

いつの間にか隣には彼方さんがいた。虹ヶ咲学園の制服を着ている。俺と同じで学

校に向かう途中だろう。

「……いつの間に」

「気づかなかった？」

「全然」

「えへへ、くノ一彼方ちゃんの忍術すごいでしょう」

俺が気づかなかったのは彼方さんの忍術のせいなのか。それともただ単に寝惚けていて気付かなかっただけか。なんとなく後者だと思いが言うまい。くノ一いいよね。

「それにしても大きかったねえ、欠伸」

「彼方さんみたいに？」

普段の彼方さんはこんな感じで、よく大きな欠伸を漏らしていた。可愛いと思うけど。

「それ、女の子に対してあるまじき言動だぞー」

「ごめん」

謝りつつも。内心、事実じゃんとか思っていました。もちろん言わない。すいません。

「ふああ〜」

今度は綺麗なハモリ。二人して大きく口を開けてマヌケ顔。

「マヌケな顔してる」

俺はふっ、と思わず笑いを零してしまふ。

「あなただつて」

彼方さんもニヤリ、顔を綻ばせた。

「もう春だし、仕方ないよねえ」

「暖かいし、仕方ないよなあ」

彼方さんも俺も、お互いに言い訳をし合つて自分を正当化した。二人とも笑つてしまふ寸前だったのは仕方ないことだ。

もう春なんだ。彼方さんとの会話で、彩られる街の光景で、改めて実感する。仄かに春の匂いがした。

「こんなに気持ちいい天気だとすやびしたいねえ」

まだまだ起床してそんなに経つていないはずなのに。もう寝ることを考えている彼方さん。

「確かに。こんなに暖かいと眠るのも気持ちよさそうだ」

とはいえ俺も彼方さんの意見には大賛成で、できるものなら眠りの世界に戻りたかつた。

「ふふふ、でしょでしょ。一緒に学校サボっちゃう？」

「いやそれ駄目だから……」

それが魅力的なものであることはわかりきっていることだけだ。

「むむむ……気持ちよさそうなのになあ」

気持ちちはわかる。

「わかるなら一緒にすやびしようよ。朝からお昼寝タイムにしようよ。ねえねえ」

ああああ、やめてくれ。その誘惑は甘美すぎるんだ。理性が決壊してしまうのを堪えるので精一杯。

「ねえねえねえ、彼方ちゃんと一緒におサボり、しよう？」

「……しません」

俺が後ろ髪ひかれつつきっぱりと断ると彼方さんはブーブーとブーイングしてきた。ひどいやと思いつつ、かわいいからつい許してしまう。

そんな会話を交わしつつ、俺たちはお互いの学校を目指していた。ニジガクとうちの学校は途中まで同じ道だ。

だから一緒に入れる時間には限りがある。この朝の時間も長くないのだ。時間は有限で、噛み締めるように歩く。

空を飛ぶ鳥たちが見える。空の青さに魅せられたのか、彼らはどこまでも翔けていく。その姿が羨ましかった。

「……やっぱり今日はサボろうかな」

鳥の往く先を目で追っているとそんな言葉が不意に口を突いた。

「こおら〜」

俺が零した言葉に気の抜けたお叱りが飛んできた。まあ迫力はない。

「理不尽だ」

そしてなぜに俺は怒られてるのか。最初にサボろうと言い出したのは彼方さんじゃないか。そこは彼方さんも乗ってきてくれるところじゃないの。

「あなたが不良みたいなこと言い出したからだぞー」

「おっと、どの口が言うんだよ」

彼方さん、鏡見て言ってる？

「この口〜」

口を窄めて、自分の口をアピールしてくる彼方さん。可愛い、可愛いけど。なんとなく、キス顔に見えてどきりとした。

「いの口?」

俺は誤魔化すように彼方さんの頬を両手で挟んだ。沈むような肌触りは中毒性を帯びていた。その毒に俺は侵されてしまう。

「あはは、ちよつとぶちやいく」

更なる誤魔化しのために俺は笑った。

「彼方ちゃんは可愛いもん」

むうと唸ってむくれた顔を彼方さんは見せた。そんなこととつくに知ってるよ。両手をぱつと放すと恨めしげな視線が飛んできて

「彼方ちゃんは可愛いもん」

繰り返された。よほどぶちやいく発言が癪に障ったのか。

彼方さんの瞳が細まった気がした。

「彼方ちゃんは可愛いもん」

「ごめん」

三度目の同じ言葉。俺は堪らず謝罪した。

「……ならく、言うことがあるよねえ」

「彼方さんはぶちやいくじゃないです」

「うくん……」

彼方さんの反応はそうじゃないと物語っていた。あれ、じゃあ……

「彼方さんは可愛い！」

朝っぱらからなにを言ってるのか。自分でも馬鹿なのかと思うが。きつと多分、そういうことだろうと思つて口にする。

「そう！ 大正解」

華やかな笑顔が咲いた。よかった。俺は安堵した。

でも一つ言いたいののはぶちやいく発言は決して貶める意図はないってことだ。なんだか言い訳みただけど本当のことだ。

「ふっふっふ、じゃあ学校行こっか」

元気いっぱい身体を上下に弾ませて、彼方さんは俺を誘う。いつもののんびり彼方さんとの差が激しい。ジェットコースターみたい。

冷たい風が吹く。熱に浮かされた身体が冷えて現実を直視させた。時間は有限で、分かれ道はそう遠くない。

あーあ……同じ学校だったらな。ありもしない、だけどありきたりな夢を想った。

「今あなたがなにを考えてるか、彼方ちゃんが当ててあげようか？」

隣の彼方さんが俺の顔をまじまじ見てそんなことを言い始めた。それからすぐ、俺の返答を待たずに彼女は口を開く。

「彼方ちゃんと同じ学校だったら……って考えてるでしょ？」

「……正解。なんでわかったんだ」

「単純だよ。だって、彼方ちゃんだっておんなじこと考えてたから」

ふつと彼女は笑った。ありきたりだよねえ、とぼやいて。まったく同じ考えだったから釣られるように俺も笑った。

「きつと楽しいだろなあ」

「絶対楽しいよ」

絶対と断言をしてくる。

「だってあなたがいるから。楽しいに決まってるよねえ」

彼方さんの当たり前のような口調に嬉しくなる。彼方さんの言うことは本当にその通りだと思った。

ああ、本当に、本当におんなじ学校だったらしいのにな。

「ねえ、手、握ってもいい〜?」

彼方さんが突然そんなこと言い出した。

「いいけど」

なんで。と言う言葉が口を突きそうになった。いや当然の疑問だろ?

「ふふふ、握りたくなっちゃった。ダメ〜?」

「……駄目じゃないです」

なんというか、彼方さんに甘えられると唯々諾々で頷いてる気がしなくもない。いいんだけどね。俺も握りたいから。

彼方さんの手の暖かさは降り注ぐ日差しに似ている。まだ少し肌寒い空気に冷えた身体を内と外から温めてくれる。

手を繋いでいると気持ちまでも伝わってくるという。なんとなくではあるが、彼方さんが手を握りたいと言いつ出した理由がわかった気がする。

「暖かくてホツとするね〜」

「まあ確かに。だけど放すときが大変だ」

だってこんなに暖かいんだから。簡単には放すことなんてできない。この気持ちよさにずっと浸りたくなる。まるで微睡みのよう。

やっぱり学校サボるか。いやサボらないけど。

「放さなければいいと思いまーす」

「そういうわけにはいかんでしょ……」

「だよねえ」

顔を見合わせる。彼方さんも俺も面倒な感情を抱えているのがわかった。手を繋いだまま一緒にいたいって感情のことだ。

この感情の解消方法なんてない。どうにかして自分を誤魔化すしかない。

「……………」

風が吹いた。俺たちの身体を通り抜けていく。

仄かに。また、淡い春の匂いが香る。冷たい風が運んできてくれた。肩の力が抜けた。

「春だねえ」

彼女の眩きが聞こえた。

彼方さんはなにを思つて春を感じたのだろうか？　もしかしたら俺と同じかもしれないし、全然違ふかもしれない。わからない。

だけど今、彼女と俺は確かに同じことを想つている。それは歓びだ。そう思う。

「今度のお休み、公園で一緒にすやびしよ〜？」

いつものように。彼方さんらしいお誘い。

「いいね」

公園でお昼寝は無用心な気もする。だけど迷いなくその誘いに乗った。断るなんて選択肢は頭の中にはない。

理由なんて単純明快で言葉する必要なんてまったくないが。あえて言葉にするのならきつと『春だから』だ。

楽しみがまた一つ、増える。きつとその時は今日よりも春らしくなっているだろう。そんなことを想像するのが楽しくて、今度の休みが待ち遠しい。

いつの間にかやるせない感情がどこかへ吹き飛んでいく。楽しみが心の中を塗りつぶして占領した。自分でも子供じみていると思う。

また、風が吹いた。

「くしゅん」

彼方さんも俺も、揃ってくしゅんをした。それから互いの顔を見合って、二人して笑った。

remember

……………。

一生の不覚というか。あんまりにも疲れていたとかどうか。

最後の記憶は公園に辿り着いて、ベンチに腰をかけたところ。その後はもうすぐにごろみという名の暗黒へ。そして現在に繋がる。

つまりは、まあ……公園で眠ってしまったんだ。睡魔にあっけなく負けて、そのまま。いや今日はほんと気持ちのいい快晴で、気温も暖かだ。言わば絶好のお昼寝日和だったんだ。疲れているところにこの天気。眠ってしまうのも仕方がないと思う。

なんて無用心なんだ。目が覚めて、真っ先に思った。そして安心した。意識を失う前と同じ光景が広がっていることに。

自分の身体が五体満足であることを確認しほつと安心すると、なにやら違和感。身体
の左側が妙に重い。

「……………すやあ」

なんならなにか聞こえてくる始末。さすがに肝が冷えるとか冷や汗が出てくる

というか。とにかく焦る。

その違和感に目を向ける。音の発生源もおそらく同じだ。首を動かすのが億劫だった。

「すー……むにやむにや……」

——そこには女の子がいた。俺の左肩に頭を乗せて、もたれかかって眠っている。羨ましいぐらいに気持ち良さそうな寝顔だ。

睫毛が緩やかな曲線を描いて伸びている。頬はマシユマロのように柔らかそうだ。呼吸のたび、彼女の胸が上下する。

「……………」

思考が止まる。呼吸が詰まる。身体が固まる。数秒間そのままだった。

なんで隣に女の子が？ いったいいつの間にか？ そもそもこの女の子は誰？

思考が回り出すと同時にそんなにくつかの疑問が浮かんでくる。浮かんでくると同時にこれは本当に現実なのかという猜疑心も湧き上がってくる。夢か現か。現実離れのシチュエーションに疑わざるを得なくなる。

「んんう……すやぴー……」

俺の心情とは正反対に、呑気な寝声が耳元で響く。気持ちよさそうで羨ましい。あんまりにも無警戒すぎない、とも思うけど。

ここでもう一度眠ればこの状況どうにかならないだろうか。そんな現実逃避が頭を過ぎった。

ま、どう足掻いても現状は変わらないんですけどねー。

「あー……いい天気だなあ……」

とりあえず、空を仰いだ。

隣の女の子が起きてくれないと俺はなにをすることもできない。というかどうすればいい？ もたれかかっているこの少女を無理矢理どかそうとしてあらぬ誤解を受けるのも困る。警察のお世話とかマジ勘弁。昨今のご時勢だとありえなくもない。

女の子が自分で自然に起きてくれるのが一番無難だ。俺はその展開を願った。

空は澄んでいて、どこまでも青い。気が遠くなるほどに果てしない。ぼんやりと空の流れを追っていた。

「……ん」

寝息と違う。寄りかかる少女から聞こえる音が今まで聞いたことがないものに変わる。

ぼんやりとしていた意識が引き戻される。視線は音のする方へと移る。ぴくぴくと震える脛が映る。

「……んんっ」

ゆつくりと、その瞼が開かれる。そして、ぱちり、ぱちりと。瞬きが2、3回繰り返される。

「ふああ〜」

寄りかかっていた少女は上半身を起こしてぐぐつと身体を伸ばしながら大きな欠伸をした。

ようやく、起きてくれた。身体の片側にかかっていた重さがなくなった。気持ち的にも楽になった。

ただ、まだまだ眠たそうにしていた。果たして俺の横で眠っていたワケを聞くことができるだろうか。

「んん〜……あ、おはよ〜」

俺に気付いた彼女は呑気にも俺にお目覚めの挨拶をしてきた。

「おはよう……」

あんまりにも呑気だから身体から力が抜けてしまった。そのまま挨拶を返す。

……いや、そうじゃなくて。

「……どなた？」

顔も知らぬ、いつの間にか俺の隣にいた少女にそう問いかける。まったく初対面の相手なのだから当然のことだと思う。俺の記憶が正しければ一度も会ったことないはず。

「そんなに警戒しないでよ〜」

「警戒するでしょ普通」

警戒しないほうがいい。というか俺の横で眠っていたこの少女も凄いわ。今もとても普通で、取り乱したりなんかしていない様子だ。

「酷いなく……今にも死にそうな君を介抱してあげたのに」

唇を尖らして、不満を零す少女。彼女の言葉から気になる単語を見つけた。

「介抱……?」

つまりあれか。彼女は俺を世話してくれてたってこと? どういうこと?

「そうだよ。こんなところで死にそうぐらい顔真っ青にした男の子が眠ってたから心配で様子を見てあげたのに」

いざとなったら救急車呼ばなきゃって覚悟してたよ、なんて付け足して彼女は語る。

ええ、信じられない。確かに死ぬほど疲れてたし、だからこそ公園のベンチで眠ってしまったんだけど、他人から見ても心配されるレベルだとは思わなかった。

「うっそだ」

「ほんとほんと〜。呼吸も荒くて苦しそうだったよ」

彼女の語る言葉がいまいち信じられないが、嘘を言っているようには見えなかった。

口調こそ間の抜けたものだが、その顔は真剣そのものだ。

彼女の言うことは本当のことなんだろう、信じられないが。助けられたということなのか。

「ありがとうございます……？」

「どうして疑問符がついてるのかわかる？ 素直に感謝してくれてもいいと思うんだけどなあ」

「いやだつてさ……」

俺が目覚めた時、眠ってたし。本当に介抱なんてしてたの、とは思ってしまった。まだ信じ切れてなかった。

「そりゃー彼方ちゃんも眠っちゃったけど……ちゃんとあなた様子が落ち着いてきてから眠ったよ？」

子供っぽく頬を膨らませて彼女はそう言った。

まあ、その時のことを知るの彼女のみなので、どのみち彼女の発言を信じるしかないんだけど。

あと彼女の名前がわかった。彼方、というらしい。おそらく下の名前で、苗字ではないと思う。多分。

「……いや、本当にありがとう。ご迷惑おかけしました」

頭を下げる。本心からの行動だ。死にそんなほど疲れて寝てしまった俺が一番悪い

のだ。おそらく彼女の行動は厚意からのもので、そこに感謝しないのはなんだか釈然としなかったんだ。

「うむ、苦しゆうない」

「それはおかしくないか……」

王様みたいな発言に、俺は首を傾げた。

「だって助けてあげたんだぜー」

そう言われたら反論できない。俺の様子を見て彼女は微かに笑った。

……きつと彼女なりに俺が気を使わないように、わざとそうしてくれてる。そう解釈しておこう。うん。

「それで今はどう？ 相変わらず死にそんな顔してる？」

「うくん……ちよつとはマシになったかな」

「ちよつとなんだ」

「そー、ちよつとだけ。まだまだ不健康そうだぞー」

ちよつとだけらしい。自分でも自覚がある。眠ったことで多少はマシになったが、まだまだ眠い。疲れが残っていた。

「ひよつとして、眠れていないのかな？」

彼女は俺の顔をじっくりと観察して暗い表情を浮かべる。

「や、眠れていないわけじゃないわなくて。夜更かししていたというか、睡眠時間を削らざるを得なかったというか……」

試験勉強とかで最近夜更かしする機会が多かっただけで、不眠症とかではない。そのことを彼女に伝えた。

「そっかー。ちゃんと寝なきやダメだよ」

心配そうな彼女の顔が一瞬で打って変わって綻んだ顔になった。力が抜けた、安心してような表情だ。

赤の他人なのに心配してくれて表情を変えてくれるなんて。隣で眠っていたことも含めて色々と思議な人だと思った。

……心配かけてなんて言い草だ。自分で自分に呆れた。

「だからといって、こんなところで寝てたら危ないぞ」

彼女が俺を咎めるように言う。俺のことを心配して言ってくれているだと思ふ。だがちよつと待つてほしい。

「……きみがそれを言う？」

彼女だつて俺の隣ですやすやすやあと気持ちよさそうな寝息を立てて眠っていたじゃないか。介抱？ してくれてたことには感謝しているが。不用心の度合は似たり寄つたりだろう。むむむ、と彼女は不満そうな声を上げた。言葉で返してこないの

は凶星だったからか。

「……こんないい天気だし、絶好のお昼寝日和なんだから仕方ないよねえ」

言い訳するように彼女は言う。俺も同じだからこれにはなにも言えない。

というか、と彼女は言葉が続ける。

「あなただつて寝てたよね。危ないのはあなたもだよ」

一緒にいっしょと彼女は繰り返す。ころころと無邪気に笑う声が公園に響いた。

「あゝ！ そう言えば自己紹介がまだだつたねえ」

思い出したかのように彼女は声を上げた。言われてみれば確かにまだだつた。俺も失念していた。まあきつとこの出会いは一期一会の出会いだから必要性がないと言え
ばないのだが。恐らくはこれ以降会うことはあるまい。

だけでも、そのまま彼女は自分の名前を名乗ってくれた。

近江彼方。それが彼女の名前。自分のことを「彼方ちゃん」と呼んでいたから名前の
ほうはわかつていたが。

「じゃあ、あなたの名前も教えて〜？」

「俺は——」

俺も自分の名前を彼女——近江さんに告げる。

——こうして俺と彼女は知り合ったんだ。そして俺はようやく自分が夢を見ている

ことに気付いた。

「……ん」

目覚めたらそこには大きな膨らみが二つ。頭には柔らかいクッションのような感触。どうやら俺は彼方さんに膝枕されているようだ。

「あ、起きた〜?」

俺が目覚めたことに気付いたのか、膨らみの上から声が聞こえた。彼方さんの声だ。そのまま彼方さんは俺の顔を覗き込んでくる。宝物を見つめているかのような表情に一瞬胸が高鳴った。

「……俺、寝てた?」

「うん、それはもうぐっすり」

彼方さんは子供あやすかのように俺の髪を優しく撫でる。ゆっくりと動く撫でる手に安心感を抱く。ずっと浸っていた心地よさだ。

「気持ちよさそうだったよ。いい夢、見れた?」

「うん、まあ」

覗き込まれた彼女の視線とぶつかる。純粹な瞳に吸い込まれそうになる。

夢の内容を言おうか、迷う。引かれないか、少し心配。感傷的すぎるような気がするから。

「……彼方さんと出会ったときのことを夢で見たよ」

言おうか迷い一つも口に出した。誤魔化すのは違うなと思った。その瞳の反応を窺う。

「懐かしいねえ。そんなに昔のことじゃないけど」

彼方さんもあの日のことを思い出しているのか、遠い目をしていた。

彼女の言う通り、そんなに昔のことじゃない。けど、あの日から関係性は随分変わった。彼方さんも俺もあの日からなにか大きく変わったわけじゃないのに。

「不思議だねえ」

俺の考えていることを彼方さんが言葉にして発した。おいおいエスパーか。驚きつつ、俺も同じことを考えていたと口にした。

「だよねだよね。こんな風になるなんてあの頃は想像できなかつたぜえ」

こんな風、つまり恋人の関係のことだ。変な意味ではない。

本当に、不思議だ。あの時、隣で一緒に眠っていた見知らぬ少女が。今は眠っていた俺に膝枕をしてくれる恋人になっているなんて。人生なにかあるかわからないものだ。

特別なことなんてなかったと思うのに。それこそ出会った日ぐら이다。

「…………ふああー」

意図せず俺の口から欠伸が漏れた。

「なあに、まだ眠いの〜」

彼方さんはまた優しく、あやすように頭を撫でる。

「まだちよつと」

彼方さんが撫でるから余計に、とは言わなかった。止めてほしくなかった。本当に心地いいんだから仕方がない。

「じゃあ、今度は彼方ちゃんも一緒に寝る〜」

「膝枕は？」

「やめる〜」

そんな惨い。俺は慄いた。膝枕されながらなので恰好はつかないが。

「このままがいいんだけど」

「これだと彼方ちゃん眠れないよ〜」

「そうだけど、そうだけどさあ」

この極上の枕を手放すなんて俺にはできない。

「それに、彼方ちゃんも眠たくなってきちゃったから〜」

懇願虚しく、彼方さんは言葉通り俺の頭をどかして一度立ち上がる。至極の柔らかさから彼方さんの家の硬い床へと変わった。まさ青天の霹靂だ。

そして彼方さんは俺の横に寝そべり出した。

「床、硬いんだけど」

「床だからねえ。そんなことよりも腕枕してー」

そんなことって。とか思いつつ、俺は片腕差し出した。さつき膝枕してもらったし、うん。

彼女が目を閉じる。睫毛が細い線を描いていて、綺麗だと思った。

「おやすみ……」

そう言うってからすぐにすうすうという寝息が近くから聞こえ出す。相変わらずの早さだ。

俺も目を瞑る。彼女の眠る音が夢へと誘う。次はどんな夢を見るのか、そんなことを考えつつ、俺の意識は眠りの海へと潜っていった。

ミルク

「すうすうすう」

遙ちゃんの寝息が静かな部屋に響く。彼女は彼方さんの膝を枕にして眠っていた。羨ましい。

そんな遙ちゃんに彼方さんは慈愛の眼差しを向けていた。優しい、穏やかな微笑みを浮かべて。まさにお姉ちゃんだと思った。

しかし、なんとというか。

「珍しいよなあ」

と俺は思ってしまった。なんなら口から漏れ出てしまった。

「えー、なにが〜」

彼方さんが俺のほうへと顔を向ける。その顔は不思議そうにしている、俺の発言の意味がわかっていないようだった。

「いや、いつも逆じゃないと思って」

いつもなら彼方さんのほうが眠っているような印象がある。すやあって、そんな寝息

を上げて。

「そうかなあ」

「そうだよ」

不服そうな彼方さんだが、俺はやっぱ逆のほうがしつくりくると思った。彼方さんには申し訳ないのだが、いっつも眠っているのは彼方さんのほうだと違和感を覚えてしまふのだ。

「ひどいなあ。そんなこと言う子には……こうだ〜」

その言葉と同時に彼方さんの手が俺の頬まで伸びる。そしてそのまま頬を掴って引っ張った。

「……ひたひ」

痛い。地味に痛い。そんなにダメージはないんだけど。頬を引っ張られているせいで変な発音になってしまった。

「彼方ちゃんにひどいことを言う悪い子にはお仕置きが必要だよねえ」

ニヤリと唇を歪ませて、彼方さんは意地悪な笑みを浮かべていた。

「これはお仕置きではなくて暴力では……？」

「違いますー。暴力じゃないですー。れっきとしてお仕置きだよ。教育的指導だもーん」

彼方さん、それはマズい。アウトだ。

教育的指導という名の暴力行為（頬の引つ張り）は1分間ぐらい続いた。ほんと地味に痛い。

毎度のことだが、今日も俺は彼方さんの家にやってきていた。今日はお泊りだ。彼方さんに誘われて、遙ちゃんからも是非と言われ、今日もお泊りすることになった。

ちなみに二人のお母さんからは娘をよろしくお願いしますと言われた。特に深い意味はないはずだ。

近江家にいることもだいぶ慣れてきた。実家のような安心感はまだ抱けないけど。だから若干肩に力が入っているような気がしなくもない。

すぐに隣には彼方さん。その膝の上に遙ちゃん。俺と彼女の目の前には折り畳み式の小さなテーブル。そのテーブルの上には彼方さんが入れてくれたホットミルクのコップが3つ。彼方さんと俺、そして遙ちゃんの分。

遙ちゃんを起こさないように照明器具の光は弱くしていた。そのため部屋は薄暗い。メロウな雰囲気。

なんとなく、身体が水分を求めているような気がした。テーブルの上のコップを持ち、口元へと近づける。コップを傾けて液体が口へ、そして体内へと流れ込んでいく。舌の焼けるような熱さはとづくに収まっていて、ちょうどいい温かさを保っていた。

甘すぎないぐらいの程よい甘みとほっと安心する味わいが口の中に広がった。

「はあ……」

思わず溜息が漏れた。特に意味はない。リラックスしているからなんだろうか。

「うふふ」

そんな俺の姿を見ながらなぜかニコニコしている彼方さん。さすがにその笑い声のボリュームは控え目だった。

「……なんで嬉しそう？」

「えー、なんでだろうねえ。特に理由はないんだけどねー、えへへ」

なんじゃそれ。

「しいていえば……あなたの肩の力が最初の頃よりも抜けてるからかなあ」

「自分じゃわからないけど」

「リラックスできてるよ。まだちよーっと遠慮してるところもあるけど」

彼方さんから見てそう見えるのであればきつとそれは正しいのだろう。自分じゃやっぱりよくわからないが。

「遠慮せずにもっともーっとくつろいでも、いいんだよ？」

「……まだ難しいよそれは」

「えー」

彼方さんは口を尖らせてブーイングをする。もちろん不満げな顔でだ。

「だけど考えてみてほしい。遙ちゃんや親御さんが普段一緒に暮らしている家で気軽にくつろげるか？ やっぱりどうしても気後れというか遠慮というか、そういうのをしってしまうのは当然のことだと俺は思うんだ。」

「そういう彼方さんは俺の家でくつろげ……いやくつろいでたわ」

彼方さんはどうなんだよと問おうとしたが、思い返してみれば愚問だと気づいた。彼方さんが俺の家に来たときは割と普通にくつろいでいた。肩の力なんて入っていない、ふにやふにや状態だった。自己解決。

「む、失礼だ」

「いやくつろいでたじゃん。歴然とした事実じゃないか」

「ええ、これでも彼方ちゃん心臓バクバクだったぞ」

「うっそだ」

まったくそんな風には見えなかった。心臓バクバクしている人間の態度とは思えないリラックサブりだった。俺の目の錯覚か？

「それにね……実は今も心臓バクバク」

「なんで」

「だって……あなたが隣にいるから」

「んえっ」

予想外の言葉が彼方さんの口から飛び出してきて、凶らずも変な声を上げてしまった。予想外すぎた。だってそんなこと、彼方さんからはまったくもって感じないから。

「あー、信じていないな。本当のことだぞー」

「いやさあ」

彼方さんは不満そうにしているが、そんな風には全然見えない。本当に心臓バクバクの下緊張状態なんだろうか。

「じゃあじゃあ〜……触って確かめてみる？」

「?!?!」

思考が凍る。筋肉が硬直する。彼女が発した言葉を処理することができない。

何秒か経ってから、その言葉をようやく飲み込むことができる。身体が動かせるようになる。唾を飲み込んだ。

恥じらいを含んだ声だった。いつもとは少し、声音が違うような気がした。

薄暗い部屋の中、上気した彼女の頬が妙に目立つ。片手を胸に当ててきゅつと握り締めている。

彼方さんがどこのことを言っているのか、わかった気がした。……ちよつとだけ、わかりたくなかった。

「いやいやいや」

なにを言ってるんだというニュアンスを込めたせいか、思わず声のボリウムが大きくなってしまった。

「しー、静かに。遙ちゃん眠っているから、ね」

「あ、ああ」

人差し指を唇に当てて彼方さんは俺を嗜める。言われた通り、小さめの声でそれに返した。

なんだか納得がいかない。誰のせいで声をあげてしまったのか。彼方さんのせいじゃないか。

俺の顔が露骨だったのか、彼女はごめんごめんと謝って、

「さっきのは冗談だよ。ひよつとして、本気にしちゃった？」

なんて口にした。

ひどい。男の心を弄んでる。まるで小悪魔のようだ。俺のドキドキを返せ。

ただどほつとしたのも事実だった。

その束の間、彼方さんの言葉は続く。でもね、と。

「あなたなら触ってもいいよ、なんて」

……再びフリーズ状態になったのは言うまでもないことだ。小悪魔だ。小悪魔彼方

さんだ。

そんなに俺の心を弄ぶのは楽しいか。少しやさぐれながらそんな言葉をぶつけてやった。

「んふふ〜」

彼方さんは言葉には答えずただ意味ありげに微笑んだ。楽しそうだなによりだ。

ああ、今喉が渴いているのは絶対に彼方さんのせいだ。もう一杯、テーブルのコップに口をつける。生温い液体が喉を潤した。

「ね、美味しい〜?」

そのままのニコニコ顔でそんなことを尋ねてくる。

「美味しいよ」

俺はなんとも素っ気ない返答をしてしまう。俺にはグルメリポーターみたいな、氣の利いたことは言えない。美味しかったのは事実で、そのままの言葉を伝えるだけになった。

言葉を伝えた途端に彼方さんはあからさまにニヤニヤし出した。思っていた通りの表情で少しホツとする。

彼方さんが『ね、美味しい〜?』と俺に尋ねるのはこれが今日初めてではなかった。今日だけでももう六回目だ。その度に俺の返しは毎回似たようなもので、それに対する彼方

さんの表情も同じだった。

毎回聞かれるがうっとおしきは感じなかった。それはこの薄暗い灯りが醸し出す雰
囲気のせいか、彼方さんが毎度見せる堪えきれずニヤついたその笑みのせいか。とにか
く、くどくなかったんだ。

「あのね」

俺がコップを再びテーブルに置いたのを見て、彼方さんは口を開いた。

「彼方ちゃん、欲張りだからね」

そんな前置きをしてくる。

「知ってるよ」

「うん。だからねえ、もつとあなたに美味しいって言つてほしいなあって」

彼方さんはむず痒そうに頬を掻く。

可愛らしい欲張りだ。いや彼方さんの欲張りはいつだって可愛い。俺はそう思っ
ている。

「言うよ」

だから当然俺の答えはこうなる。上手いこと言えないけど、それでよければ。その言
葉を付け足して。

彼方さんはきよんととして、すぐに意地悪そうな表情を浮かべた。

「え、どうしよつかなあ。彼方ちゃん欲張りだからなく」

唇をにんまりと歪ませて、またも小悪魔フェイスになった。

あまりにも困った顔をしていたのか、彼方さんはまたすぐにくろりと表情を変える。今度はいつもの優しくして穏やかな、それでいて眠そうな顔。

「いいよ」

彼方さんの言葉は続く。

「だから言うの忘れないでねえ。約束」

当たり前だと。俺がそう返すと、彼方さんはへにやりと笑みを浮かべた。

燦々

太陽が照り付けている。痛さを感じるような暑さだ。まさしく地獄。人が出歩くような環境ではない。

いったい今日の気温は何度なんだろうか。今朝のニュースをよく見なかったから正確なところはわからない。それでも絶対に30度以上であることは確かだろう。命にかかわるレベルだ。

そんなんだから外を歩く彼方さんも俺も汗をだくだくと流していた。二人して服が汗でびしょびしょになっていた。

「あつーい〜……」

隣の彼方さんが胸元ではたばたと手で仰ぐ。首筋の汗が鎖骨や胸元へと流れていった。その光景を見ながらどうすることもできない暑さに辟易とした。

俺たちはなんでこんな日に外出なんてしているんだろう。こんな日に外に外出したことを後悔した。

なんで外出したのかつて？ 至って単純なことだ。

俺の家で彼方さんと夏の宿題や自習をしていたのだが。勉強を始めてから1、2時間からたった頃に彼方さんが

「彼方ちゃん頑張ったよ。勉強頑張ったご褒美にアイス食べたらい」

と言い出したのがきつかけだった。ただしかしうちにはアイスがちょうどなかった。なので買いに行くことになった。

だが、まあ、外はこの有様だ。外に出て、30秒ぐらいで後悔した。自分でも早すぎると思うが、本当に苦痛を感じる暑さなのだから仕方がない。

彼方さんも似たようなもので、家から出てすぐさま顔を歪ませた。気だるげな顔をしながらも、それでも彼方さんは引き返すとは言わなかった。

「彼方さん、やっぱり帰らない？　いくらなんでも暑すぎる」

「むむむ、確かにそうだけど……でも帰らないっ」

「なんで」

「だって彼方ちゃんのお口はもうアイスのお口になってるの」

家から出てすぐに交わした会話がこれだった。彼方さんはアイスをご所望らしい。気持ちはわからなくはないけど。暑い日には特に恋しくなる。

「あつーい……」

今日何度目かの台詞。気持ちは同じだ。暑い。とてつもなく暑い。人が生きていけ

るようなレベルじゃない。

汗に濡れたシャツが身体に張り付いて気持ち悪い。そう思っている、この暑さのせいで発汗を抑えることができなかった。

陽炎が見える。アスファルトの上でもややもやと揺れる。

「あつーい……」

隣の彼方さんはそんな言葉を言いながら、距離を詰めてきた。隙間がなくなつて、お互いの腕がびったりとくつつく。くつついたところが暑い。

「彼方さん」

「ん、なにー」

「暑いんだけど」

「夏だからねえ。彼方ちゃんも暑くてつらい」

「そうじゃなくて」

こんなにも暑いのに、なんで近づくのかと。俺は彼女に言いたくなつた。

わかつているのかわかつていないのか。彼方さんとはほけたかのように逸らしてきた。

どころか腕を絡めてより密着してきた。腕に抱きついてきた。彼方さんの身体がさらに密着しているせいで余計に暑くなる。

なにもこんな灼熱地獄でこんなにくつつかなくてもいいだろう。なにゆえ？

「……彼方さん」

「んー、なあに〜」

「彼方さんのせいで暑いんだけど」

「えー、彼方ちゃんのせいじゃないよ。夏のせいだよ〜」

「いやさあ、明らかにこれ彼方さんがくつついてるせいだよ」

俺の言葉に心外そうにする彼方さん。

「ええー、そんなことないよ〜」

やはり予想通り、彼方さんは否定する。すつとぼけていた。

彼方さんにだつてわかつているはずだ。こんなに身体を密着させて、少なくとも触れ合っている部分は彼方さんだつて暑さを感じているはずだ。感じていないわけがない。

「そんなことあるでしょ。彼方さんだつて汗かいてるし」

頬に伝う汗と、その跡に張り付く髪。それがなによりの証拠だ。

「えっち〜」

彼方さんの身体を見ながら指摘すると心外な言葉が返ってきた。

えっちな要素がどこにあるんだつて言うんだ。これっぽっちもいやらしい気持ちな
んでないのに。

「なんでさ」

「え、視線がなんかいやらしい」

「言いがかりだ……」

いやらしい視線なんか向けていない。彼方さんの首や顔に汗が張り付いているのを見ただけだ。

いやらしいと言いつつも彼方さんは離れるどころか、しっかりと腕を絡めてくる。より簡単に抜けられないようになる。さらに暑くなる。

そもそも彼女の言葉に恥じらいや嫌悪感などの負の感情が込められていなかった。俺で遊んでいるかのような楽しそうな声だった。

「それなら尚更離れるべきじゃない？」

「えー、やだ」

即座に拒否された。こっちがええ……と言いたくなる。なんでよ……。

「だつてくつついていたいも〜ん」

子供みたいな言い方だ。堂々と彼方さんは言い放った。

「暑くても？」

「暑くても〜」

迷いもなく言い切った。彼方さんに離れる気は微塵もなさそうだ。こんなに暑い

に。それでもくつついていたいという。

「ああ、もう……わかったよ。もうそのままでもいいよ」

「やった〜」

俺が諦めると嬉しそうにもう片方の腕を突き上げた。

なんというか、いつものこんな感じで押し切られるなあと思ってしまう。まあ彼方さんが楽しそうでなによりです。

そのまま、腕を組んだまま、コンビニへと向かう。冷たいアイスを求めて。あるいは涼しい冷房の効いた店内を求めて。

太陽がじりじりと照り付ける。汗は止まらず流れ続けていた。日差しが弱まる気配はまったくくない。

上から浴びせられる太陽の熱気と、地面からの照り返しと、組まされた腕と。俺の逃げる場所はどこにもなかった。

早く、早くコンビニに辿り着いてくれと。切に願った。

「あ〜……涼しい〜」

彼方さんのいつにもまして気の抜けた声に心の底から同意した。

涼しい、生き返る。コンビニの店内は冷房が効いていて、外の地獄とは大違いで極楽だった。身体を覆っていたむわっとした熱気が消えて、なんとなく呼吸もしやすくなったような気がする。

「生き返る〜」

俺の心の声が彼方さんの口から飛び出してきた。二人して考えることが同じになるのは仕方ないことだ。

「あー、本当。生き返るな〜」

俺だつて気の抜けた声になつてしまふ。本当に天と地の差だ。

彼方さんと俺は早速アイスコーナーへと向かう。出入口である自動ドアから一番離れたところにあつた。行けば、ボックス型の冷蔵ケースの中にたくさんアイスクリーム商品が敷き詰められていた。

ケースから漂つてくる冷気でさらに身体の温度が下がった。気持ちいい。

「気持ちいいー。彼方ちゃんずつとここに住む〜」

「ダメでしょ」

めちやくちや気持ちはわかるけど。俺もずつとここにいたいけど。住みたいけど。

「スーパ―に比べると割高感があるねえ」

冷蔵ケースの縁の辺りに貼つてある値札を見ながら彼方さんは呟く。確かにスーパーに比べるとコンビニの値段はちよつと高い。

「まあそれでも買うんだけど」

だつてスーパーには少し距離がある。こんな暑い中行けるか。行きたくない。

「だね」

彼方さんもぐつたりした様子で答えた。もうあの炎天下の中を彷徨いたくないよね。俺たちは値段よりも利便性を選んだ。

「どれにしよう。たくさんあつて迷つちやうな」

彼方さんの言葉通り、たくさん種類がある。彼方さんの視線は冷蔵ケースの中を右往左往と流れ流れる。定番のものから新商品、いわゆるプライベートブランドと呼ばれるものまでより取り見取りだ。選ぶのに迷うつてしまうのは仕方がないだろう。俺の視線も揺れに揺れる。

迷い彷徨つていた視線がふと止まる。あるアイスに目が留まつた。

安くて美味しい定番の氷菓だ。かき氷にアイスキャンデーでコーティングした、くじ付きの有名なやつだ。小さな頃、暑い季節になるとよく食べていたことを思い出した。

「ねえねえ、あなたは決まつた？」

その声で顔を上げる。いつの間にか、彼方さんがこちらを見ていた。

「おう、それ懐かしいねえ」

俺の視線を辿った彼方さんはそのアイスを見て、懐古しているのか浸るような声で言った。ド定番だし彼方さんも食べたことがあるのだろう。

……久しぶりに食べてみるのもいいかもしれない。懐かしの味を堪能したくなった。

「決まったみたいだねえ」

「なんでわかるだよ」

「よく見てますから〜」

よく見てたらわかるものなんだ……。

俺は素直に感心した。恐怖とか困惑とかよりもまず先にそんな感情が浮かんだ。すい。

「彼方ちゃんもおんなじのにしよつと」

彼方さんは冷蔵ケースから二つ、アイスを取り出してはいと俺に手渡した。受け取るとひんやりとした温度が手の肌伝った。なんとか触られる冷たさ。

俺は受け取った手とは反対の手を彼方さんに差し出す。

「お手？」

「違うから」

ほれと彼方さんが持つアイスをこちらに寄こすように伝えた。

「はっ、彼方ちゃんの分まで奪うつもり！」

「いや違うから」

彼方さんは驚いた顔したのち、自分の分のアイスを奪われないように抱え込む。

なんで奪う必要があるんだよ。

「俺が買うから」

「奢ってくれるの？　ありがと〜」

彼方さんはころりと表情を一転させ、過去イチ眩しい笑顔になってアイスを俺に渡してきた。現金だなど俺は笑った。

そのまま二人分のアイスを持って、レジへ。奢るといっても値段的にはたかが知れている。百円玉を二枚出して購入する。二つのアイスとお釣りを受け取って、アイスを一っ、彼方さんに渡した。

コンビニの出入り口である自動ドアが開く。むわつとした熱気が外から侵入してきて身体にぶつかると。そのまま一步一步、外へと向かって足を進める。外に出ると身体を覆っていた冷たい空気は熱へと塗り替わっていき、その熱が身体を覆っていく。

「あつっい〜……」

「暑いな……」

二人してげんなりした。天国から地獄だこれは。

「……ねえねえもうアイス食べようよ〜」

「……だなあ。これじゃすぐにアイス溶けそうだしな」

お互いに顔を合わせて頷いて、俺たちはアイスの封を開ける。木の棒を摘んで引き抜いて、アイスを取り出した。

水色の輝きが、漂う冷気が、熱で表面が融解しかけている様なんとも冷たそうで、早く味わいたくて仕方がなかった。

「んんっ！ つめひゃ〜い」

早い。彼方さんはもうアイスを頬張っていた。想定以上の冷たさに彼女は目を細めて顔を歪めた。

俺も、と。いかにも冷たそうなそれにかぶりつく。舌を始め、口いっぱい冷たいという感触だけが広がった。彼方さんみたいに声にならない声を上げてしまう。

そんな俺を見て、一度アイスを口から離していた彼方さんがくすくすと笑い出した。

「変な顔〜」

彼方さんには言われたくない。彼方さんだつて変な顔だつた。

「これは永久保存しなきゃだねえ」

「待つて。それは止めてくれ」

彼方さんは片手にアイスを持ち、もう片手でスマホを取り出した。そのカメラを俺に向かつて構えた。撮る気満々じゃないか。

恥ずかしいんだけど。そんな画像を記録に残すとか止めてほしい。

「え、いいじゃんか」

俺の顔がそんなにおかしいのか、彼女はさらにまた、笑った。

「よくない。恥ずかしいんだけど」

そんな恥ずかしめを俺だけが受けるなんてまっぴらごめんだ、などとごねてると。

「じゃあじゃあ、一緒に撮ろ」

彼方さんがそんな提案をしてきた。

「彼方さんと一緒に？」

「そ。一緒に」

……まあ、一緒ならいいか。

「彼方さんも変な顔してくれよ？」

自分だけ普通の顔するなんて許されないぞ。いちおう釘をさしておく。

「大丈夫。アイス食べたらしたくなってなくても変な顔になっちゃおうよ」

それもそうだ。

彼方さんはスマホを構えた。そして彼方さんも俺も同時にアイスにかぶりつく。頬

いっばいに冷たい刺激が襲い掛かってくる。かしゃりとシャッター音が鳴り響いた。

二人でその写真を覗く。俺も、そして彼方さんも口を歪ませて、間抜け面になっていた。酷い写真だ。

「思い出がまた一つ増えたねえ」

アイスとスマホを持った彼方さんがにんまりと笑った。それを見ただけで写真を撮られた甲斐があつたものだ。

夏の思い出をこれからもいっばい撮ろうね〜と、彼方さんは夏の楽しみを指折り数え始めた。プールに、花火に、お化け屋敷に……。夢を見ている暇なんかないような忙しさになりそうだ。彼方さんの語りは止まらない。

彼女のアイスが溶けて、水滴となって地面に落ちていく。夏はまだまだ長いなあと思つた。

夢の終わり

夏の終わりはいつだって心を締め付けられる。妙な焦りがどうしたって身体を支配する。

遠くで鳴くセミの声を聞きながら思った。目的地までの歩く時間はどうでもいいことを考えるには最適だった。

夕方、まだ汗をかいてしまうくらいには暑い。それでもまだ数時間前よりかはマシだ。だくだくというよりかはじんわりと発汗しているのを感じてそう思う。これはこれで不快だ。

夏が終わりかけていた。もっと具体的にいうと8月が終わりかけていた。今日を含めてもうあと2日。学生生活における長期休暇が終わろうとしていた。長く続いていたお祭りみたいな時間がもうじき閉会してしまう。

一抹の淋しさを感じていた。それだけじゃない。心がざわついて落ち着かない。無視できない程ではないが。

溜息をつく。解決のする必要のない悩みだ、ほっておいてもいいことだと思った。

気持ち少し、切り替えよう。センチメンタルな気分では彼女に会うわけにはいかない。ただでさえ一週間ぶりぐらいに会うのだから。こんな気持ちではない。

足を止めて、深呼吸。吸って吐いてを何度か繰り返す。鼻から息を吸った際に夏の匂いとどこからか夕飯の匂いが漂ってきて、肺を満たした。ちよつとほつとする。

さて、目の前にある扉と表札を見る。それは目的地に到着したことを知らせていた。設置されているドアホンを鳴らす。

はいはい、という声が扉の向こう側から聞こえて、床を鳴らす足音が近づいてきた。鍵を開錠する音がして扉が開く。

「ふうふう、いつらしゃい」

太陽みたいな眩しい笑顔が俺を迎えた。思わず、顔が緩んでしまう。相変わらず単純な人間だと自分でも思う。だがそんな自虐も吹き飛んでしまう笑顔だ。

久しぶりにあった彼女、彼方さんは以前会ったときと変わっていないかった。たった一週間ぶりなのだからそれはそうなんだけども。ただ安堵感を覚えたのは紛れもない事実だった。

「うおっ」

そんな風に気を抜かしていたら、彼方さんが抱きついてきた。勢いよかつたため、身体に衝撃がぶつかる。さほど痛くはないが、突然のことで変な声が出てしまう。驚いた

せいか、情けない声だ。

「うへへへ、久しぶりだあ〜」

彼方さんは自分の頭を俺の胸に擦り付けるように埋めてきた。その様はマーキングに似ている、と思つてしまった。

ふんわりと彼女の匂いが漂つてくる。料理をしていたのか、家庭的な食欲をそそる匂いだ。彼方さんらしくてどきどきするというよりは安心した。

「ん〜、久しぶりだからこうして抱きついて栄養補給してるの」

「栄養補給？」

「そ〜、あなたから出てくる新鮮な栄養が彼方ちゃんには必要だからねえ」

「なにそれ初耳」

そんな栄養あるなんて聞いたことないんだけど。

「彼方ちゃんの健康維持には必要不可欠なんだよ〜」

「すごいな、俺からそんな栄養物質が出てるんだ……」

ある意味感心しながら、彼方さんのマーキングらしき行為を眺めていた。くすぐつたような、頭をぐりぐりされて痛いような。

「……最近はおえなくて、彼方ちゃんだめになつちやいそうだったんだよ？」

顔を伏せながら彼方さんはぼつりと呟いた。細い声が夕暮れの部屋に溶けて消えた。

「仕方ないさ」

ここ一週間彼方さんはスクールアイドルの合宿に行っていた。当たり前のことだが、そんな集まりに俺が入り込むわけにはいかない。邪魔者になってしまう。邪魔者になるつもりは毛頭ない。

「だからね、今いっっぱい抱き着いちゃう」

いつの間にか、彼女の腕が背中に回されていた。その腕が力強く俺の胴体を締め付けてくる。

「彼方ちゃん、寂しかったんだ」

「うん」

「あなたは寂しくなかった？」

「寂しかったよ」

彼方さんの問いかけに、素直な言葉がするりと詰まることなく出てきた。意地を張らない、飾りのない台詞だ。

「っ」

彼方さんの言葉にならない、息だけが漏れる。微かな音。そんな小さな音が響いたことになんとか気付けた。

彼方さんはどう思ったんだろう。素直に吐き出した言葉は時が経つにつれ、恥ずかし

さを感じさせた。あまりにも素直に伝えすぎただろうか。彼女の後頭部からはわかるはずもない。

「ズルいなあ」

また、本当に小さく、そんな声が聞こえた。もしかしたら聞き間違いかもしれない。

「たった一週間ぶりだけど、久しぶりに会えて嬉しい」

「たった、じゃないよ」

彼方さんの言うことは正しい。気持ちには俺だって同じだ。

たったじゃなかった。この一週間は長かった。自分の脆さを見せ付けられた、そんな期間だった。

「……………」

「……………」

時折、言葉が途切れ、沈黙が訪れる。彼方さんに触れている部分に意識が集まる。彼方さんの柔らかさと与えられる痛みをより実感して、彼女がここに存在するということを証明していた。

夢ではなく、現の彼女。幻ではなく、実在する彼方さん。

……俺は安心していた。

「ねえ、夏が終わっちゃうねえ」

唐突な話題だった。彼女はそんな言葉を投げてきた。

暦はもう9月。秋はそう遠くない。この暑さが涼しくなるのかどうかはまた別なんだろうけど。確かに彼方さんの言う通りだった。

「夏休みも終わっちゃうねえ」

それは惜しむような声だった。哀愁を帯びていた。声だけでじわりと感情が伝わってきた。

もう学校が始まってしまふ。明日からはまた日常。

……似たようなことを俺も考えていた。

「……なんだかんだ、あつという間だったな」

「あーあ、あなたと1日中一緒にいれなくなっちゃうなあ」

「言うほど1日中一緒にいたっけ……」

彼方さんとはこの夏休み結構会っていたけど、1日中一緒にいたのはそんなになんか思っ。まったくいけないわけではなかったが。

「……いたかったなあ」

それを言われると俺も何も言えなくなる。1日中ずっと一緒にいられるなんて、そんな夢のような日々が次に訪れるのはいつだろうか。さっと思いつくのは冬休みだが、それもお互いになにか用事があるとそれも難しい。

夢のような時間はやがて終わりを迎える。この長期休暇も終わり、またいつもの学校生活に戻ってくる。それが嫌なわけじゃないが、どうしたって名残惜しさを感じてしまう。

「なるべく休みの日は会います……」

俺が確実に言えるのはそれぐらいで、具体的にいつなのかは約束できないでいた。

「……うむ」

その言葉に物足りなさそうに、それでも彼方さんは頷いてくれた。

「やくそく」

「ああ、約束だ」

「嘘ついたらどうする〜?」

針千本飲む?　なんて彼方さんは言うが、それに『はい』と答えるのは嘘でも怖い。彼方さんはそんなことさせないと思うけど。

「どうする〜?」

彼方さんはなにかしらのお返事をお待ちのようだ。ねえねえねえと催促してくる。やはり針千本飲むと答えたほうがいいんだろうか。

「嘘ついたら……なんでも言うこと聞いてくれる?」

あれ。下手したら針千本のほうがマシな要求を彼方さんはかましてきた。

なんでもという言葉は恐ろしい。本当にどんな要求が飛んでくるかわからないから。……彼方さんだから、大丈夫だよな？ 変な要求は来ないよね？

「ふふふ、変なことは言わないよ〜？」

本当だろうか。信じていいよな。……信じたい。聞こえてくる彼女の笑い声が少しだけ怖い。

「ただ、ちよつと責任を取ってもらうだけ〜」

「いや何の責任」

「彼方ちゃんを夢中にさせた責任」

その責任はどうやって取るんだろうか。取れるのだろうか。彼方さんはただただ笑うだけで、なんにも答えてくれなかった。

「ん〜……チャージかんりよ〜」

満足したのか、その言葉に合わせて彼方さんは回して腕を解き胸から離れた。彼女の重みがすつと消えて寂しさを覚えてしまう。

「もういいのか」

自分でも驚くほどに声のテンションは低くなっていた。わかりやすすぎかよ。彼方ちゃんはね。でも……あなたはまだ満足できてないんだ〜

彼方さんは心の底から嬉しそうに顔を綻ばせていた。俺の気持ちなんて彼女には筒

抜けだと嫌でも察した。

「一先ずはお預け。ここよりも彼方ちゃんの部屋のほうがもつとぎゅ〜つてできるから」

そう言えばここは玄関だった。なんなら靴も脱いでない。

「ね？」

彼女は俺の手を包み込んで、早く上がろうと促してくる。誘われるまま、履いていた靴を脱いで彼女の家の奥へ進んでいく。彼方さんの部屋へと導かれていく。彼方さん以外の人の気配は感じられない。

彼方さんが部屋の扉を開ける。そういえば、と彼女は口を開いた。

「今うちの中にいるのはあなたと彼方ちゃんだけなんだよ」

言葉が詰まった。家の中は妙に静かで、おそらくそうなんだろうとは薄々感づいていた。それでも二人つきりという事実は多少なりとも緊張させた。

あと1時間ぐらいで帰ってくるよ、なんて彼方さんは付け足してきた。つまりそれまでは二人つきりということだ。

「いーっぱいイチャイチャできるねえ」

彼方さんは上目遣いで挑戦的に誘ってくる。零れた笑いも妙に艶やかで、引力のように引つ張られて流されそうになる。その水流に抵抗もせず、むしろ自ら進んで彼方さん

へと近づいく。部屋の扉をぱたりと閉じた。

あと少しで夢のような時間は終わる。寂しさは抱えながら残りの時間を彼方さんと共に過ごす。夢の終わりを惜しみながら。

電灯

改札口を抜けて、駅を出る。人混みは次第に捌けていく。呼吸がし易くなる。なんとなくそんな気がする。

首元がうっとおしく思えて、きちりと締められていたネクタイを緩めた。楽になった。

空を見る。世界は既に深い青色に染まっていた。天井には片手で数えられるほどの小さな光りと白く輝くまん丸。

「おかえり〜」

駅から少し離れたところで彼女は手を振っていた。疲れでたるんだ心の空気を一瞬で入れ替えた。

「なんでここにいるのさ、彼方さん」

履いたパンプスが地面に当たり、コツンと音がする。オレンジブラウンの長い髪を泳がせて近寄ってきた彼方さんにそんな問いかけを無遠慮にぶつける。駅に来るなんて、彼方さん言っていないかった。俺も彼女に連絡してなかったし。

想像通り、彼女は頬を膨らませた。風船みたいで可愛らしいと思った。こんなこと彼方さんに知られたら怒られるけど。

「むう、せつかく迎えにきたのに」

腰に手を当て唇を尖らせ、拗ねる彼方さんに俺は安心して少し吹いてしまった。ようやく帰ってきたんだという実感が湧いた。ようやくといっても数時間ぶりなだけだ。

「悪かったよ」

「ほんとうにそう思ってる？」

「思ってる」

「嘘っぽい」

真剣に言ったつもりが彼方さんには真実だと受け取られなかった。彼方さんの瞳には疑いしか映っていなかった。うそ。

彼方さんが酷い。いやそもそも俺が悪いのか。

「ごめんなさい」

「……しよーがないから許したげる」

ふっと膨らせた頬を萎ませて柔らかく微笑んだ。よく知る彼方さんの表情だ。

花柄のフレアスカートを靡かせながら彼方さんは俺の腕を取って、それから抱きついてきた。香水の匂いか、女性らしい香りが鼻腔をくすぐる。慣れてきたといえどもとき

めきを感じてしまう。

「帰ろっか」

「うん」

自宅がある方向へと足を進める。お空は真つ暗だというのに、その道は明るい。月の灯りのおかげではない。町の灯りや街灯の灯りといった、いわゆる人工光のおかげだ。

「疲れてる?」

歩き始めてすぐにそんなことを彼方さんは言い出した。疑りの瞳が俺を捉えていた。

正直、鋭いと思った。かと言って、馬鹿正直に言うのも憚られる。彼方さんに心配かけてしまう。

「……なんで、そう思ったの?」

少し話をずらして、問いかけに問いかけで返した。彼方さんは少し唸って口を開いた。

「ん〜……なんとなくなく」

「なんとなくって」

「彼方ちゃん、あなたのことはよく見てるからねえ。いつもと違うとすぐにわかるよ〜」
単純にすごいな、叶わないなという感心と知られてしまったというばつの悪さでなんにも言えなくなる。入り混じった感情は行き場がどこにもなくて俺は困ってしまう。

「ふっふっふ……彼方ちゃんの様子は誤魔化せないよ〜」

子供みたいに無邪気に胸を張って彼方さんはドヤ顔した。その瞳の奥に真剣さが映っていた。

「まあ、彼方さんの言う通り。疲れてるよ」

「ちゃんと認めたねえ。えらいえらい。おうち帰ったらよしよししてあげる〜」

小さい子供をあやすような扱いだ。よしよしされるような年齢ではもうない。

「えー、嫌なの〜?」

「……………」

実際のところ、嫌ではないんだけど。ただよしよしを素直に喜べはしない。つまらない見栄があるのだ。

「嫌?」

彼方さんは俺の心を読んでいるのか、ニヤニヤと笑いながらも一度尋ねてきた。バレテラ。

「彼方さんのよしよし大歓迎です」

バレてるんじゃないやもう仕方ない。男のプライドは投げ捨て、欲望に忠実になった。

「ふふふ、いっぱい甘やかしてあげるね〜」

満面の笑みが眩しい。ああ、ダメ人間になりそう。あんまり甘やかされすぎると全部

放り投げて彼方さんのおヒモになりたくなるから困る。

「おうちまで我慢できるかな〜?」

できない、と言ったら今よしよしされるのだろうか。彼方さんは外でよしよしするところが恥ずかしくないのか。

「彼方ちゃんは恥ずかしくないよ」

彼方さんはそう言い切った。すごい。俺にはやっぱり恥じらいがあるよ。

夜の町を歩く。設置されている街灯が彼方さんの横顔を照らす。彼女の耳に付けられたイヤリングが電灯の光を受けて紫色の輝きを放つ。

その横顔を見て思う。綺麗だと。神秘的で神聖で、どこか手が届かないようにも思えた。こんなに近くにいてすぐに触れることができる距離なのにどこか遠くて、美術館で絵画を見ている気分になった。

「……んー? どうしたの〜?」

見つめていたのに気づかれてしまった。彼方さんが不可思議そうにする。その瞳がクリスタルのように輝いた。

「なんでもない」

思ったより自然に口から飛び出した。半分本当のことだから。

「そっか、なんでもないか〜」

彼方さんは少しだけ疑うようにこちらを見て、それから俺の言葉に納得してくれた。それからなぜか彼方さんは腕を抱きしめる力を強くして、より身体を密着してきた。歩きづらくなる。

「彼方ちゃん、もつとあなたにくつつきたくなっちゃった、えへへ」

俺が理由を尋ねる前に彼方さんはそう答えた。どこか嬉しそうに口を綻ばせていた。

そういうえびさ、と俺は口を開く。彼方さんに聞きたかったことがあった。

「駅のところまでどのくらい待ってたの」

ふと気になったんだ。俺は彼方さんに何時に帰るなんて伝えてない。まして駅に何時に到着するかなんてなおさら。だから結構前から待っていたんじゃないかと思った。それこそ1、2時間前から待っていてもおかしくなかった。

「うーん……30分ぐらい前かなあ」

「そこそこ待ってるじゃんか。先に連絡してくればどのくらいで到着するのか教えたのに」

ちよつと待つというレベルではないと俺は思う。電話とかで聞いてくれればよかった。そうすればこんなに待ちぼうけする必要はなかったんだ。例えば喫茶店みたいな明るくて温かい場所で待つこともできたはずだ。

「いいのいいの。だって彼方ちゃんが待ちたかったんだもん」

嬉しいことだ。帰りを待つてくれる人がいるということは。胸が暖かくなる。

「まあ、無理はしないでね」

本当に。嬉しいから強くは言えないけども。

「あなたは心配性だな」

「うつとおしい？」

「ううん。彼方ちゃん嬉しいぜ」

彼方さんが嘘を言っていないことはこれまでの付き合いからわかった。うつとおし
がられなくてよかった。

ところでだが。彼方さんはどうして駅まで迎えに来てくれたのか、その理由を彼女は
言っていない。俺も聞いていない。聞いたら答えてくれるだろうか。まあ、迎えに来た
かったからと言われるのかもしれないが。

「今日はなんで迎えに来たの？」

「それは当然、迎えに行きたくなつたからだよ」

やつぱりというか、想像通りの答えが返ってきた。そつか、と俺は相槌を打つ。本当
の理由があるのか、それとも彼方さんの言葉通りなのか、俺には判別がつかなかった。

「もつと言うと……早くあなたに会いたかつたからかなあ」

そう言つて、彼方さんは身体をこちらに預けてきた。彼女は頭を俺の肩の辺りに倒

す。一人の女性の重みを身体は感じていた。歩きづらさは幸せな証拠。重なり合つて、電灯が作る影はほんの少し小さくなる。

香水の匂いが香る。夜の匂いと混じる。鼓動は確かに速まつて、それでもまだ冷静でいられた。

「それで、早く家に帰つて、二人でご飯食べて、一緒にお風呂入つて」

彼方さんは帰つてから二人であることを指折り数え始めた。どれもいつも行つていゝる、当たり前前の生活行為。

「おんなじ布団に入つて……今夜も一緒に寝ようね？」

聞へ誘う、耳元で囁かれる声はどうしたつてくすぐつたく感じてしまった。もう慣れているはずなのにな。

「ううん、朝までずつと一緒にいようね？」

……明日の朝、ちゃんと起きれるだろうか。明日は休日ではなく普通の平日なんだが大丈夫だろうか。自分のことながら自信がない。

彼方さんは起こしてくれるだろうか。いや、一緒にずつと微睡むことになりそうだ。

そんな不安を抱えつつも、楽しみにして待ちきれない自分があることもわかつていた。

「……明日は平日なんだけど」

「んふふ、わかつてるよ」

弾んだ声はともわかつているようには思えなかった。まあ、明日のことは明日の自分に任せるよう。

ゆつくりと、それでも着実に家へと進んでいく。その道を電灯は明るく照らしていた。早く家につけばいいのに、と思いつながら革靴で地面を踏みしめた。

うつつ

夢を見ていた。電車に揺られて、いつの間にか眠ってしまった。目が覚めて、目的の駅がまだだったことに安心した。

思えば、懐かしい夢だった。昔の、高校生の頃のことを夢に見ていた。あまりにも若くて、青くて、むず痒さを覚える。最近はその頃の夢ばかりを見ていた。

そんな夢を見てしまった原因はわかっている。これからの将来のことを考えていたからだ。これから先、どうするか。どうしたいか。それをどうやって彼女に伝えるか。

今日はそのために人に会う約束をしていた。彼女本人ではない。彼女の妹である、遙ちゃんだ。

年下である遙ちゃんに相談事なんて情けないかもしれない。それでも遙ちゃんと話をして自分の考えに自信をつけたかった。誰かに相談する時なんて、結局のところ自分の考えを信じたくて、肯定して欲しいからなんだ。そう、俺は思っている。

揺れる車窓から見える景色が馴染みあるものにならなくていく。いつの間にか、目的の駅に着きそうだった。

停車し、自動ドアが開いて、電車から降りる。人の流れに従っていく。改札口を抜けて駅舎から出た。暖かい日差しが心地よい、そんな天気が俺を出迎えた。

「こつちですー！」

良く通る声が耳に飛び込んでくる。その先に遙ちゃんがいた。俺は手を挙げて、遙ちゃんに近づいた。

会うのはそこそこ久しぶりだ。二か月ぶりぐらいだろうか。最近は少し忙しくて会えていなかった。

出会った頃と比べて遙ちゃんも随分と大人びた。目の前にいる遙ちゃんを見て思う。落ち着いた雰囲気を纏っている。下ろした髪の色いか。それだけではないはずだ。

遙ちゃんを伴って、駅近くのカフェに入る。立ちっぱなしでできるような話ではない。店内は騒々しくなくて、ゆっくりと落ち着いて話ができそうだ。

向かい合って座り、まずお互いに注文をした。俺はコーヒー、遙ちゃんは紅茶。当然俺持ちだ。相談事を持ち掛けたのは俺なのだから当然だろう。

注文した飲み物が来るまで、どちらともなく、近況を話し合う。とりとめのない話だ。遙ちゃんも元気にやっているようで俺は安心した。それを見た遙ちゃんにくすくすと笑われてしまったが。

店員さんが注文したものをお盆に乗せて運んできた。目の前にコーヒーが注がれた

カップが置かれる。白い湯気が立ち上る。

一口、カップに口をつけてコーヒーを流し込む。ちょうどいい苦み。温かい液体が身体の中へと溶けていく。カップを置いて、そろそろ本題に入ろうとした。

「……それで」

俺よりも前に、遙ちゃんが口を開いた。昔と変わらない、綺麗な瞳が俺を見ていた。

「プロポーズ、するんですか」

……思わずむせそうになった。なんとか堪えた俺を褒めてほしい。

「いきなりすぎないか」

コーヒーを飲んでいるタイミングじゃなくてよかった。遙ちゃんの服を汚すところだった。めかし込んでお洒落なその服が台無しにならなくて本当によかった。

「ご、ごめんなさいっ」

遙ちゃんは申し訳なさそうにしながらも少し笑っていた。わかっただけでやったのかいっ？

「その、ワザとじゃないんです。ほんとにつ」

わかっただけで返すと遙ちゃんは胸を撫で下ろした。わかっただけで。けどまさか遙ちゃんの方から切り出してくるとは思わなかったから驚いてしまった。それも直球だった。

「やっとかあとと思うと前のめりになっちゃって……」

「……そんなにやっと思える？」

「ありますよっ」

遙ちゃん曰く、俺が高校卒業したらすると思っただけ。そんなこと考えていたのか。初耳だ。流石にそれは早いと思う。

「だとしてもお姉ちゃんのこと待たせすぎだと思っただけ！ お付き合い初めてからもう6、7年ぐらい経ってますよね」

「……………」

「お姉ちゃんももうちよつとで二十代後半に入るんですよ!？」

「……………」

あと1年ぐらい猶予はあるから……。と細かいところを反論したくなった。けどまあ、大体のところ遙ちゃんの言う通りなので何も言えない。

「なんでお姉ちゃんをこんなに待たせてるんですか」

「いやまあ、結婚するにはちゃんとした収入が必要で。それにはもうちよつと稼がないと……………」

「……………甲斐性なし」

……………痛い。物凄く痛いよ。

でもこれから先のことを考えるとお金のことは大事だ。結婚式、新婚生活、もしかしたら出産、育児……他にも色々。考えれば考えるほどお金はこれから様々な場面で必要になる。そう、考えてしまうとなかなか踏ん切りがつかなくなってしまうもおかしくないはずだ。

「……ちやんと将来設計してるって言って」

「……ごめんさい。ちよつと言い過ぎちやいました」

「いいよ。わかってるから」

それだけ遙ちやんが俺に心を許している証拠だと思う。最初のころはよそよそしかったからここまでの仲になれたことは喜ばしいことだ。

「でも、ようやくですね」

改まってそんな言葉を口にする遙ちやんは本当に嬉しそうにはにかんでいた。照れくさくなつて、鼻がむず痒くなる。

「……受け入れてくれるかな、彼方さん」

思いがけず、本音が零れた。弱い部分が出てきた。断れるわけがないという驕りを持ちながらも断られてしまったらという『もしも』を考えてしまう。

「弱気ですねえ」

人生の一大事だから当然じゃないか。そんなことを考えていたが、それが顔に出てい

たのか遙ちゃんは謝ってきた。

「……お姉ちゃんは嬉しいと思います」

多分ですけど、と遙ちゃんは予防線を張りつつも俺を勇気づけてくる。多分かあ……。

「きつと、おそらく、嬉しいと思います……よ?」

「余計に不安になることを言わないでくれ……」

「ふふつ、ごめんなさい」

遙ちゃんがあんまりにも可愛らしく笑うものだから怒る気なんてまったく湧き上がってこなかった。身体から力が抜ける。

目が遙ちゃんと合う。澄んだその瞳は真剣さを帯びていた。

「自信を持つてください。お姉ちゃんもきつと受けてくれると私は思います。だからちゃんとお姉ちゃんに伝えなきゃ、です!」

……しっかりと背中を押してくれた。ほんのちよつとだけ自信がついた、気がする。ちゃんと伝えなきゃいけないという気力は湧いてきた。

「ああ……ありがとう」

「……ダメだったら反省会、付き合いますから」

「……おい」

その言葉は言わなくてもいいだろ。くすくすと笑う遙ちゃんを半眼で見つめた。

まあ、遙ちゃんなりのジョークなんだろう。あとは予防線？

……なんにしても、彼方さんにちゃんとプロポーズしよう。想いを伝えよう。温くなったコーヒーを飲んで、決意を新たにしたら。

そのあと、少し遙ちゃんと話をして解散となった。『頑張ってください、お義兄ちゃん！』と去り際に遙ちゃんが背中を叩くように言ってくれて、彼方さんが待つ家への足取りが軽くなった。

ただいまという言葉と共に玄関の扉を開ける。扉の音に気付いたのか、奥から彼方さんが玄関までやってきて、おかえりくと返してくれた。エプロンをつけている彼方さんはまるでお嫁さんみたいで毎度毎度感動してしまう。

ところで遙ちゃんから貰った気力も彼方さんを目の前にすると萎んでしまったような気がする。帰り道では大丈夫だったのに。心臓の鼓動が速くなった気がする。要するに緊張している。今このタイミングでするわけでもないのに。

「どうしたの？」

玄関で固まつてると彼方さんが不思議そうにこちらを覗いていた。なんでもない、とポーカーフェイスを装って家へと上がる。ちゃんと装えているかは自分ではわからない。ポーカーフェイスだと信じたい。

スパイシーな匂いをなんとなく感じる。ちゃんと嗅ぎ取りたくて鼻を鳴らすと彼方さんが笑う。

「なんか犬みたいで可愛いなあって」

犬みたいというのは自分でも思った。可愛いについては異議を唱えたいが。

「今日はカレーだよ」

この匂いはだからか。納得しながらいい匂いを嗅いけるとなんとなくお腹が空き出した。お腹は鳴らなかつたけど。

かといって夕飯には早い時間だ。現在は夕方4時を半分過ぎた頃だ。俺のお腹の気が早いんじゃない。彼方さんの手料理がどれもこれも絶品なのが悪いんだ。

ああ、でも本当に、お嫁さんみたいだ。彼方さんに続いて、家の中へと進んでいく。彼方さんの後ろ姿を見て改めて思う。プロポーズしようとしているからそう見えてしまうんだろうか。

「まだ料理中だからもうちょっと待ってて」

「いや俺もなにか手伝うよ」

「いいよいよ。あなたは座って待っていて〜」

と断られてしまい、手持ち無沙汰になってしまった。食卓に座り、彼方さんを眺めることしかやることがない。これはこれで楽しいけど。

彼方さんの後ろ姿をぼんやりとずっと眺める。どうやってプロポーズしようか、そんなことを考えながら。

綺麗な夜景をバックにするべきだろうか。それとも雰囲気の良いレストランか。どうすれば彼方さんが喜んでくれるのか、想像を巡らせた。

「……………んふん〜」

考えることに夢中になりすぎて、いつの間にか彼方さんが目の前に座っていたことにも気付かなかった。ニコニコとした笑みを浮かべて、俺を見て楽しそうにしていた。

カレーはと聞くと、もうできたよと彼方さんは答えた。もうあとお皿に盛り合わせるぐらいなのだが、まだ夕飯の時間には少し早いのでそうはせず、キッチンから食卓まで来たみたいだ。で、俺がぼんやりしていたのを見つめて楽しんでいたと彼方さんは説明してくれた。

「それで、なに考えてたの?」

その言葉にどきりとしてしまう。なにか考えてるみたいだったからと彼方さんが言う。プロポーズのことだと悟られないように、動揺しないように理性を総動員した。

「なにも。ぼーっとしてた」

「そっか」

納得してくれたのか、してくれていないのか、表情からはよくわからない。ただアメジスト色の瞳が優しく見えた。

「……………」

「……………」

会話はない。お互いに見つめ合うだけの時間。彼方さんの瞳に俺が映る。きつと俺の瞳にも彼女が映っている。

それでも彼方さんと通じ合っている気がするのは気のせいだろうか。思い上がりだろうか。単なる願望だろうか。

遙ちゃんの言葉がふいに蘇る。なにか彼方さんに言わなきゃいけない。唐突にそんな衝動に襲われた。口を開いたり閉じたりして、唾を飲み込んで、気を紛らわせようとした。それだけでは衝動が収まらない。喉が震える。

「彼方さん、結婚してください」

「……………え」

気が付いたら、その言葉を口にしていた。彼方さんはぼかんとしている。いきなりのことだから当然だ。こんな浪漫もないし脈絡もないプロポーズなんて驚くに決まっ

いる。

ただもう、発言は取り消せない。過去には戻れない。だけど冗談にしたくはない。茶化してしまうなんてできない。それはよくないことだと思つた。

「結婚してください」

だからもう一度、言葉を繰り返す。ゆつくりと真剣に。彼方さんの瞳から目を逸らさないようにしながら。

返事はどうなるんだろう。こないきなりで浪漫もムードもないようなシチュエーションでのプロポーズなんて断られても仕方がない。保留ならまだいい方かもしれない。自分でもそう思う。

「ええええええ………」

彼方さんはいつもよりも大きな声が出て、瞳は大きく見開いていて、驚いていた。そりやそうだと内心苦笑いしてしまう。ポケットに準備したあるものを取り出して彼方さんに見せるように差し出す。さらに彼方さんは動揺を見せた。

「……冗談？ それとも夢？ 白昼夢？」

「冗談じゃないです。夢でも白昼夢でもありません。本当のこと。結婚してほしいんだ」

わかりやすくおろおろする彼方さんに俺はまたプロポーズの言葉を伝えた。信じられないんなら何度だって伝える。恥ずかしさはあるけど、ここは恥ずかしく引く場面だ

はない。

「……………」

これ以上言葉を重ねるとくどくなってしまう。言葉の重みがなくなってしまう。俺は彼方さんの答えを待つことにした。

「……………う〜」

顔を赤くして彼方さんは唸った。その表情に動揺はあっても嫌悪感はない、と信じた
い。

数十秒間ぐらい、俺にとっては何十時間ぐらいに思える、沈黙があつてから。彼方さんは意を決したかのような顔をして、口を開いた。

「彼方ちゃんは——」

夢ではなくて、確かに現実として、その言葉は耳まで届いた。

また、明日。

部屋に置かれた間接照明が室内を柔らかく照らしていた。明るすぎず暗すぎず、おかげさまでリラックスできる空間ができていた。

もう夜だから窓のカーテンは締められていた。カーテンの隙間から暗闇が見える。

部屋に一人、ぼんやりと部屋の壁を見ていた。特に意味はない。ただ彼女を待っていた。やる事がなくて手持ち無沙汰だった。

……今日はいいい日だった。彼方さんがプロポーズを受け入れてくれたから。今まで生きていた中で一番幸せな日になった。これを超える日は今後そう多くないだろう。もしかしたら訪れないかもしれない。そのぐらい幸せだと思えた。

あんまりにも幸せすぎて、一瞬これは夢なんじゃないかと疑ってしまったりもした。そんなわけは当然ないのだが、なんというかふわふわとしていて夢見心地だった。

がちやりという音がして扉が開く。ぼんやりとしていたが音のほうへ意識が向かう。顔も向けた。

部屋には入ってきたのは彼方さん。レースをあしらった紫色のネグリジェだが、なん

というか生地が薄くて彼方さんの肌が透けて見える。

「……………」

いつ見ても心拍数が上がってしまうが、今日は一層激しくなった気がする。理由なんてわかりきっていた。

「んふふ、どお？ お嫁さんの寝間着は？」

「…………別に。昨日と同じじゃないか」

冷静を装ってそう答えた。すると彼方さんはわかりやすく拗ねた。頬を膨らませて、ジト目で俺を見つめてきた。

「むうう〜」

不満ですと言わんばかりに彼方さんは唸り声上げた。頬もわかりやすく膨らませている。

彼方さんはさらに俺に近づいてくる。俺の目の前、すぐに抱きしめられる距離まで来た。そのネグリジエを存分に見せつけてくる。

「あ・な・たのお嫁さんの寝間着の感想は〜？ 可愛い？ 綺麗？ 愛らしい？」

「あなた」の部分の強調がすごい。感想求めてくる圧も強い。言っただけの言葉の催促までしてきてるし。その通りだから否定はしない。

「似合ってるよ。可愛いし、綺麗だし、愛らしい」

オウム返しに思えるかもしれないが、嘘はまったくついていない。

「うふふ、ありがと。ちなみに……あなたはどこが好き？」

「ん……透け感？」

彼方さんが今着ているネグリジエ、いい具合に透けていて身体のラインがわかってしまうのがなんかいい。透けすぎではなく、下品過ぎないところが特にいい。エロさと綺麗さがバランスよく同居している。

「えっただねえ」

「言わせたのは彼方さんでは？」

ちよいと理不尽ではないかい。まあ彼方さんもまんざらでもなさそうだしいいか。ここにこしてるし。

彼方さんはベッドの上の俺のすぐ横に腰をかけた。ぴつたりと身体をくつつけて、首を傾けて俺の肩にもたれかかった。

「えへへ、幸せだなあ」

そう彼方さんは呟いた。うんとその言葉に俺は頷く。浸っていたい幸せがここにはあった。

「あなたの奥さん……いい響きだねえ」

「そんなに？」

「とーぜん。ずっとずっと待ち望んでいたんだから」

「……ごめんなさい」

遙ちゃんにも言われたが待たせすぎたのか。なんとも申し訳ない気分になる。

「おおつと、あなたを責めるつもりじゃなくてね。ただ、ずっと夢見てたから」

あなたのお嫁さんになるのをね、と彼方さんは言う。

「……まだ、だけどね」

「もー、それは言っちゃダメだぞ」

まだ婚姻の届け出も出してないし、式も挙げていない。だから正確にいうとまだ彼方さんはお嫁さんではないのだ。言うなれば、婚約者？

もうお嫁さん気分だからいいんだもん、と彼方さんは子供みたいに頬を膨らませた。

「ごめんなさい」

余計なことを言いました。反省。それはそうと、毎度思うんだけど頬を膨らませた彼方さんは可愛い。

「近いうちに、婚姻届もらいに行こうか」

役所で貰えるだっけか。

「だねえ。あと必要な書類ってなにかあったけ」

戸籍謄本とかいるっけ、なんとなくうろ覚えで話す。流石に詳しいところはわからな

い。これも確認する必要があるなあ。

他にも結婚式をするのであれば式場はどうするかとか、結婚に向けて色々なことを話し合う。とはいえもう寝る直前だから改めてしっかりと話す機会を、時間を作る必要がある。

「……色々な準備が必要そうであ〜」

「まあ、確かに。大変そうだ」

それもしようがないことだっていうのは彼方さんも俺もわかっているし、覚悟している。一つずつやっていくしかない。

「まあ、慌てずにのんびりやろっか〜」

彼方さんの言葉に俺も同意した。すぐに全部が全部でできるわけではないのだ。慌てる必要はない。……あんまりのんびりし過ぎるのもよくないけど。結婚するのが10年先とかになったら笑えない。いやむしろ笑える？

……とりあえず明日から。今日のところはもうあとは眠るだけだ。もう夜だからね。

「それじゃ、寝よっか〜」

彼方さんもおんなじことを考えていたみたいだ。

部屋の明かりを消し、真つ暗な部屋になる。二人揃って、ベッドに寝転がる。マットレスが俺たちの身体を受け止めて、包み込む。掛け布団を二人の身体がなんとかすっぽ

り埋まるようにかける。狭いのは言いつこなした。

まだ目は暗闇になれていなくて、部屋の壁や家具はうまく見えない。だけどすぐ近くにいる彼方さんはよく見える。こちらを見つめてまた微笑んでいた。

彼方さんの手が布団の中で当たる。こつんこつんと当たって離れてを繰り返して、それから彼方さんは俺の手の感触を楽しむかのように弄ってくる。彼方さんはそんなお遊びを堪能してから、指を絡ませて隙間なく密着させて手を繋いできた。

「……ひよつとして今、指輪してるの？」

繋いだ手に金属の特有の硬さと冷たさを感じる。多分そうなのかなと思って彼方さんに聞いてみた。

「してるよ。あなたがプロポーズの時に送ってくれたやつ」

彼方さんが指をにぎにぎと動かすと指輪の感触がこちらの手にもよりはつきりと伝わってくる。

「邪魔じゃない？」

俺がこんなことを言うのもなんだけど邪魔になつてないのか。普段と違う装飾品を付けていると違和感で邪魔になつていないのか、ただふと純粹に心配になった。

「邪魔じゃないよ。嬉しくてずっと付けてたいんだ」

それならいいんだけど。と少しばかり安心してしまった。ほんの少しだけ。

「それよりも……いつの間にかこんなもの用意してたの。彼方ちゃんビックリだよ」

「まあ、こつそり。半年ぐらい前からちよつとずつ用意してたよ」

本当はもつと、景色のいい雰囲気のあるレストランとかでプロポーズしようと考えていたけど。衝動的にやってしまった。反省。……予約とかまだしてなかったからまだよかつたけど。

「指輪も？ どうやって彼方ちゃんの指のサイズ測つたの？」

指輪は真つ先に用意することを考えた。ものによつては時間がかかるものだし、デザインを色々見て決めたかつたし。

「ごめん。指のサイズは彼方さんが眠っている間に測つた」

「え〜！ 気づかなかつたあ……。ほんとにびつくりだよ」

驚かすことが出来たのなら準備した甲斐があつたものだ。あと喜んでくれたらいいな。

「も〜、すつごく嬉しいに決まつてるよ〜」

「……………ならよかつた」

「ん〜？ なに、心配だつたの？」

「そりや当然。緊張したよ」

プロポーズする時に緊張しないやつなんているの？ いないでしょ。

それを聞いて彼方さんはくすぐすと笑った。

「彼方ちゃんがあなたのプロポーズを断るなんて絶対じゃないよ」

彼方さんは強い口調でそう言葉にした。笑っている顔がどこか笑っているように見えなくて、真剣なものに見えた。冗談ではないなとすぐにわかった。

「俺は心配だったけどね。準備している間から断られるじゃないかって気が気じゃなかったよ」

だったら衝動的にプロポーズするなという話だが。……本当に反省しています。

今度プロポーズ用に予約していたレストランに彼方さんを改めて連れて行こう。彼方さんは満足してくれているから自己満足になってしまっただけ。

「心配性だねえ」

彼方さんの呆れた表情がどこか優しく見えた。握り手の力が緩く、彼女の指が俺の手を撫でるようになぞる。

「……彼方さん、くすぐりたい」

「心配性なあなたに大丈夫だよって伝えたくて」

「……伝わってるから、ちゃんと」

「そお〜？ ならいいんだけど」

そう言った彼方さんだが、指の動きをそのまま続ける。そのくすぐったさに、彼方さ

んどのじゃれ合いに、声を殺しながら笑ってしまった。

「んふふ、声上げて笑つてもいいんだぞ」

「上げない上げない」

「ほれほれ」

「……………つ」

「頑張るねえ。そりや、これはどうだ」

「……………いやつ、大丈夫」

「それならこうだ。ほれ」

「……………き、効かないなあ」

なんかバカツプルみたいなやり取りをしていると自分でも思う。出会ってから何年経つても変わっていない。

これから先も同じなんだろうか。同じだといいい。5年、10年……………ずっと先もバカツプルみたいなやり取りができたらいい。この先の未来がどうなるかはわからないけど、そんなささやかな願いはずっと持ち続けていたい。

「大丈夫だよ」

俺の考えを読み取ったかのように彼方さんは口を開いた。そんなにわかりやすかつただろうか、俺の顔は。

「私だからわかるんだよ」

はつきりとした口調。自信満々な眼差し。彼方さんがこれから言おうとする言葉がなにか、俺はわかった。

「あなたの奥さんだからね、それぐらいわかるよ」

……予想通りだから元気づけられた。勇気づけられた。

「……わかっちゃうのか」

「わかっちゃうんだぜ」

にこにこ微笑む彼方さんを見て、自然と笑顔になれる。彼女にとって自分もそうであればいいと思う。

彼方さんとする中身のない会話が楽しすぎて、「おやすみ」なんていつまでも口に出せなかった。出したくなかった。出す必要がなかった。意識が朦朧として、半分夢の世界に旅立ちながらも、眠りに落ちる最後まで俺と彼方さんはとりとめのない話を続けた。

それじゃあ、また、明日。

ジャスミン

「んふふ、お茶どうぞー」

湯気の立つティーカップを彼方さんは俺の目の前に置いた。いい匂いだ。今日はジャスミンティーかな。

彼方さんところやってティータイムをするのは恒例のことになっていた。時間を決めていたわけではなかったが、時間がある時に彼方さんが言い出す。週に3、4回は開催されている。ちなみに今日は日曜日の午後。

彼方さんが楽しそうにテキパキと準備してくれているのを俺はただ見ているだけ。居心地の悪さを感じてしまうのは当然のことだった。だが俺が手伝うと言っても。

「旦那様は座って待っててね」

決まってそんな言葉を返されて、俺に手伝いをさせてくれなかった。今日もそうだった。

手持ち無沙汰な俺は彼方さんをただぼんやりと見つめるだけ。そんな俺の視線に彼方さんはすぐに気付いて、くすぐったそうに笑っていた。

そうやって準備されたティーカップ。湯気は止まらず、まだまだあつつあつつで舌が焼けそうだった。匂いを楽しみながら、ちょうどいい温度に冷めてくれるのを待った。

突然、彼方さんがにやりと笑った。悪戯を思いついた子供のようだった。

「熱そうだねえ。もしよかつたら、ふーふーってしてあげようか？」

「それじゃあお願いするよ」

「りよーかい。ふーふー」

彼方さんのじやれつきに半分冗談めかして返すと、彼女は顔をニコニコさせてティーカップに顔を寄せて、嬉々として湯気を吹き飛ばしてお茶を冷まそうと息を吹きかけてきた。口をすぼめて何度も繰り返し息を吹きかける動作には色気があって、つついじつと見つめてしまう。慣れているはずなんだけどなあ。

「どうしたの〜？」

「なんでもない」

「んふふー、えつちだねえ」

「どこにえつちな要素があつたの」

「ん〜、わからないの〜？」

さてはて。俺にはよくわからないな。わからないと思ったらわからない。

あなたがそう言うならそうなんだろうね？ と見透かしたように彼方さんが言うも

のだからなんだか負けた気分。

その後も何度か湯気と共に液体の熱を飛ばそうと彼方さんは息を吹きかけて、それから顔を離れた。

「さ、どうぞ、飲んで飲んで〜」

「それじゃあ……遠慮なく」

カップの縁に口をつけた。口に含んだ熱を帯びた液体が喉を通り、身体に染み込んでいく。彼方さんのふーふーに効果があったのか、ジャスミンティーは程よく冷めていて、それでも温かさは残っていて、ちょうど飲みやすい温度になっていた。身体が温まり、心がほぐれていった。

「どお？ おいしい〜？」

「ああ、美味しい……」

「なんか言い方、おじいちゃんみたいだねえ」

俺の言葉があんまりにもしみじみとしていたせいかわ方さんがそう零した。だけど彼方さんの言い方もなんというか、おばあちゃんっぽい。年寄りみたいなものんびり具合だ。彼方さんの場合はこっちのほうがデフォルトだけど。

お茶を楽しみながら思い思いの時間を過ごす。二人でお喋りしたり寄り添ってぼんやりすることもあれば、それぞれ読書したりパソコンで仕事したりすることもある。そ

の日によつて変わつてくるのだ。

彼方さんはA4ぐらいのサイズで雑誌ぐらいの厚みの、スクラップブックのようなものを1ページずつ眺めては捲つていつていく。彼方さんの眩しいものを見るような慈しむような眼差しをジャスミンティーを味わいながらなにをするわけでもなくぼんやりと見つめていた。彼女のその表情からなにを眺めているのか気になってきた。

「なに見てるの?」

「アルバム。あなた専用の」

「え」

なにそれ。初耳なんだが。

「あなたの寝顔とかスクラップしてるんだ」

「恥ずかしいんだけど」

「え、いいじゃん。可愛いよ」

くすくすと笑いながら彼方さんがそのアルバムを見せてくれた。どう見たつて可愛くない。間抜け面の男がそこいるだけだ。耐えられない。

「こうやつて記録に残して置くのはいいことだと思ふんだ。あとから振り返つて思い返せるし」

確かに彼方さんのいうことにも一理ある。ただ被害者が俺だけなのはいかななもの

か。それなら。

「彼方さんの撮ろうよ。彼方さんの寝顔コレクションもちやんと残して置くべきですよ」

「んー……それはちよつと恥ずかしいかなうって……」

頬をかきながら彼方さんは顔を赤らめ、拒否した。俺だつて悶絶して叫びたいぐらいに恥ずかしいなのに不公平だろう、これは。

「じゅ、需要が……」

「あるよ。俺には、ある」

なんなら遙ちゃんにも需要があるだろう。少なくとも俺の寝顔コレクションよりかはある。自分で言うのと微妙な感じがするが。

「だ、断言するねえ」

カップの取っ手を軽く弄んだあと、彼方さんはカップを持ってその縁に口をつけてジャスミンティーを飲む。こくつと喉を鳴らし、口からカップを離して、そして息を長く吐いた。

「……しよーがないなあ」

撮つてもいいけど誰にも見せちゃダメだからね、と念押しされたが彼方さんからのお許しが出た。ダメ元で言ってみてよかった。永久保存確定だ。シャッターチャンスが

待ち遠しくなる。

彼方さんはこれまで溜めに溜めたコレクションの質量を確かめるようにスクラップブックをペラペラと捲った。

「改めて見ると、あなたとの思い出がもうこんなにも積み重なっているんだねえ。こうやってスクラップすると一目でわかるや」

「その思い出、寝顔ばかりなだけだ」

「あはは、そうだけだね。寝顔だって思い出だよ」

こんなにも彼方さんとの時間を過ごして、彼方さんと寄り添って、彼方さんと心を通わせて。彼方さんと出会ってからの密度がそこにはあった。寝顔が記録されるのは恥ずかしくて堪らないが、思い出が積み重なっていくことは嬉しいと思った。

「それじゃあ、俺も彼方さん寝顔コレクションたくさん積み重ねていくよ」

「うう……そんな宣言されちゃうと彼方ちゃん困っちゃうな」

俺の方が最初に恥ずかしくて困った思い出をしたんだけどね。彼方さんにも同じ思いを是非とも体験してほしい。

「も……」

恥ずかしそうにしながら彼方さんは仕方ないと言いたげな表情を浮かべていた。

写真と言えば、二人で一緒に写ってる写真も増やしていきたい。現状少くないけ

ど、たくさんあっても困らないはずだ。

それでいつか振り返った時に思い出を話し合えたら、それはとても。

「二人で一緒に撮った写真ももつと増やそうよ」

思い出は積み重なっていく。それが幸せなものばかりとは限らないけども。だとしても楽しい思い出を積み重ねていきたい。彼方さんと一緒に。いつかの終わりまで。そんな想いを込めて言葉にした。

「だねえ」

短い言葉で彼方さんは俺の考えに頷いた。それだけで十分だった。彼方さんの瞳から言葉以上の思いが伝わってきたから。

ほつとして、そこで一回、またカツプに口をつける。まだ保たれていた陽だまりのような液温に心がふやけた。休日の午後は間延びしていて、時間の流れもどこかゆっくりだった。まるで心地の良い夢をみているようだ。現実感がない。

「ふあ……」

思わず欠伸零れてしまった。この空気がそうさせたんだ。

「眠たいの？」

「そういうわけじゃないけど」

「寝たいなら寝てもいいんだよ？」

「寝ないって」

「お昼寝つて気持ちいいよ」

お昼寝が気持ちいいのは確かだけど。彼方さんのお昼寝猛ブッシュはなにゆえ……。久しぶりにあなたを膝枕したいんだ。膝枕したいなあ。させてよ」

そういえば最近してもらってなかった。というかなんで彼方さんは膝枕したいんだろうか？

「彼方ちゃんのお膝で眠ってるあなたの無防備な顔が見たいんだよ。一番近くで見れちゃう特等席だからねえ」

悪戯っぽく無邪気に言う彼方さんに俺は断れることができない。彼方さんの言う事に俺は逆らえない。ある種、彼方さんに調教されているのだ、俺は。

「だから、ね。いいでしょ？ お膝にごろんつて寝転んじやおうよ」

正座をして、その太ももをポンポンと叩きながら彼方さんは優しい声で誘ってくる。つい委ねたくなる、ふかふかの布団みたいな声だと思った。

でも今寝ると夜寝れなくなってしまう。今日は日曜日の午後。それで明日は平日。明日の昼間はうとうとしてしまうかもしれない。

「大丈夫。夜も彼方ちゃんが寝かしつけちゃうから」

どんな寝かしつけ方をされるのか。なんて少し不安に思ったが彼方さんの太ももは

確かに最高級の枕に匹敵する柔らかさだし、案外あっさり夢の中へと旅立てるのかも
しれない。膝枕じゃなくても、彼方さんを抱き枕にしてもきつとよく眠れる。

それはそうと。彼方さんが俺を膝枕したい理由は……。

「寝顔コレクション増やすつもりはない、と？」

きつとこれ。寝顔の盗撮する気だろう。確信を持って言える。

「それは……えつと……その……えへへ？」

笑つて誤魔化された。増やすつもり満々じゃないか。可愛いなあ畜生。

「だってだって、増やしたいんだから仕方ないよねえ」

自分のことを正当化する彼方さん。だが彼方さんのその表情に俺も仕方ないと思え
てきた。恐ろしい……。

「ほれほれ、彼方ちゃんのお膝においておいで」

その手招きに抗えずに、彼方さんの太ももに吸い込まれるように頭を乗せた。ふにふ
にとした柔らかさを持つ太ももに頭が沈み込んで、そのまま意識さえ持つていかれそう
になる。なんとか堪えたが、またしても欠伸が零れた。

「ふふふ、気持ちよさそうだね」

「ああ、すつげー気持ちいい……」

「顔、すごくだらしないよ」

彼方さんは本当に嬉しそうに、そう教えてくれた。

「重くない？」

「ちようどいい重さだよ。それよりも早く目、閉じて」

ちようどいい重さなんて、さすがにそんなことはないと思うが。彼方さんがそういうならいいか。

目を閉じる。視覚情報がなくなる。他から感じられる情報に敏感になる。彼方さんの身体の柔らかさとか彼女の溶けそうな声とかジャスミンティーの匂いとか。

「寝顔はやっぱり取るの？」

「当然だぞ。これも思い出だよ」

「思い出かなあ……」

まあ、これも思い出か。そう思い直した。

続く日々の中で、きつとまた。ジャスミンティーの香りを嗅げば、今日のことを思い出す。何気ない一日のことを。

センタク

セミダブルの魔力は恐ろしいもので。このまま柔らかい海の底でずっと微睡んでいなくなる。意識はぼんやりとしていて、とてもじゃないけど起きる気力は湧かない。曖昧な意識のままでもまたもう一度夢の世界へと連れて行ってほしい。

「……………ふんふん」

布が擦れる音。軋む音。そして、穏やかな笑い声。

なにやら頭が変だ。違和感があつて、妙に気になった。痛みはないから放つておいてもきつと問題ない。

この変な感じに誘われるがままに現へと行くのか。それとも夢の中へと沈んでいくのか。決断を迫られているが、選択には意識がややふやすぎた。光に群がる虫のように、そのまま誘われるほうへと、意識は浮上していく。

「……………あ」

目を開けると彼方さんと目がぼつちりと合った。起きたことに驚いたのか、ぼかんと軽く口を開かせた。

彼方さんの手を俺の頭のほうへと伸びていた。どうやら髪の毛を触っていたようだ。人差し指と親指で髪の毛を掴んでいる。違和感はこれだったのか。起きてまず思ったことがそれだった。

「……おはよう」

「おはよう……で一体なにしてるの」

「あなたが寝坊助さんだったから遊んでた」

少しだけバツが悪そうにしながらそれでも正々堂々と答えた彼方さん。彼女との距離はかなり近い。鼻先がくつつきそうなくらいの距離。アメジストの瞳に吸い込まれそうになる。

「玩具じゃないから……」

「なかなか起きなかつたあなたが悪いだぞ」

彼方さんにそれを言われるのか。普段なかなか起きないのは彼方さんのほうなのに。

「ふふふ、今日は彼方ちゃんのほうが早起きだったぜえ」

どこか自慢げな彼方さんに苦笑い。こんな台詞、次はいつ聞けるか。聞けない可能性もある。

そして未だに髪の毛弄りは止めていない。不快感はない。もどかしいというか、くすぐりたい。

「いつまで弄り続けるんだ……?」

「……彼方ちゃんの気の済むまで?」

それは果たして終わりが訪れるのだろうか。甚だ不安だ。疑問形なのが特に。悪戯っぽく微笑む彼方さんにそんなことを思った。

彼方さんの瞳から視線を外す。首筋を辿り、胸元へと至る。白いシャツを胸が押し上げていて、ポリユミーな膨らみが飛び込んできた。なんとも目に毒な光景だ。

「も……どこ見てるの」

どこを見ているのか、気付いているのだろうか。恥じらいながらのジト目が突き刺さる。なんとなく嬉しそうなのはなんでだろうね。

「……彼方さん見てる」

嘘は言っていない。彼方さんの身体（の一部）を見ているのだから。しよがない人だね、と彼方さんは呆れ気味。

というか。彼方さんが今着ているシャツだが、彼女の身体のサイズに合っていないよな気がする。いや明らかにブカブカだ。髪の毛を弄る手がシャツの袖口で隠れていて、萌え袖になっていた。

いや、そもそも昨日泊まるときに彼方さんは着替えなんて持ってきていたか。昨日うちに訪れたときは今回は泊まらないからと言って、いわゆるお泊りセットみたいなもの

は持つてきていなかったはずだ。

つまり、それらから導き出されるのは。

「彼方さんが今着てるのって——」

気になって、彼方さんに問いかける。決して己の不埒な行いを誤魔化そうとしているわけではない。

「あなたのワイシャツだよ。借りちゃってまーす」

当然のように事後承諾だった。裸で横にいるよりかはいいが。もし裸の彼方さんがいたら心臓が止まるわ。

そもそも昨日の服着ればいいのでは、とちよつと思つた。それが顔に出ているのだから。彼方さんは頬を膨らませて、眉を吊り上げさせていた。

「彼方ちゃんの服を汚したのはどこのどいつだく？」

「……………」

「もく……………すっかり忘れてるなあ」

……………あ。

「……………思い出した？」

「出しました……………」

「彼方ちゃんがあなたの服を借りるのは当然だよねえ？」

「はい……その通りです……」

詳細は省くが、俺の自業自得だった。折角おしやれしてきたのになあ、とぼつりと眩く彼方さんに俺は申し訳なくなつた。本当にごめんなさい……。

いたたまれない気持ちであると彼方さんはくすつと笑つた。俺を責めるような、怒つた表情なんてすでにしていなかった。

「彼方ちゃんも幸せだったから……許してあげる」

「……ありがとうございます」

「なんで敬語？」

申し訳なさが思わずそうさせたんだよ。

「……洗濯、しないとだねえ」

「あー……」

汚れた服を洗濯しないと彼方さんは俺のワイシャツをずっと着たままになる。帰ることもできないし、出かけることもできない。なんなら家の中をワイシャツで過ごすことになる。それもいいなとちよつとだけ思つてしまった。

「もしかして……迷つてる〜？」

ぎくりとそんな音が聞こえた気がした。

彼方さんは疑いの目を向けてきて、俺は彼女の目を見ていられなくなつた。さりげな

く視線を外す。

「凶星かあ？」

「……迷つてないよ」

「凶星だねえ」

迷つてないつて否定したじゃないか。なんでわかつたんだ。

「そりゃあ、バレバレだよ。だつて目が泳いでるし、顔がちよつとこわばってるし」

「……わかりやすいな、俺」

「うふふ、わかりやすくて可愛かつたぜ」

嬉しくない。嬉しくないんだよ。彼方さんに俺の中のやましい感情が丸わかりなのは複雑な気分だ。

「でも……彼方ちゃんも気持ちわかるよ。うん、もっとゴロゴロしていたいよねえ」

ベッドにカラダを預けて力を抜いてリラックスしている彼方さん。口をへにやへにやさせて、瞳をとろんとさせて、このままだと夢の中へと逆戻りしそうだった。

俺も彼方さんのこと言えない。ベッドの引力に吸い込まれて、抜け出す気が段々と減っていく。

……洗濯しなくてもいいかなあ。そんな選択肢で頭の中の天秤が傾いていく。一日中自堕落に過ごす日もあつてもいいんじゃないか。

「どうしよつか?」

「どうしような……」

「ねー、どうしようねえ」

「んー……」

お互いに見つめ合つて、解に至ることのない会話を繰り返す。中身がなさすぎる。それでもそこに彼方さんがいるという、その証である息遣いが聞きたくて会話を続けてしまう。

このまま起きずにゴロゴロと、微睡んで過ごせばいいか。そう思い始めて――

「――くしゅんっ」

彼方さんのくしやみが響いた。いきなりの衝撃に目が覚める。彼方さんも俺と同じように目をぱちくりと大きく開いた。

視線がぶつかる。彼方さんの驚いて気の抜けた顔。おそらく俺も似たような顔をしている。

「……………はは」

「……………ふふふ」

お互いに笑い出した。いやだつてこのままウトウトして眠りそうな感じだつたじゃないか。唐突なくしやみがそれをひっくり返したというか、ぶち壊したというか、もう

眠気なんて吹き飛んでいった。

「ワイシャツだけだとそりゃ寒いよな……」

彼方さんの恰好はワイシャツ一枚だけで、それ以外の衣類を着ているようには見えな
い。寒くて当然な恰好だ。くしゃみが出てきても仕方がないと思った。

「くつついているからあつたかいと思つたんだけどねえ……」

「人肌にも限界はあつたつてことか」

「だねえ。でも気持ちよかつたよ？ えつちな意味じゃなくてね」

「それはそう」

確かに。いやらしいさとはまったく別の、胸の奥が温かくなるような気持ちよさが身
体を溶かしてくれた。意識まで溶けて気持ちよく入眠できた。

「……目覚めちやつたし起きよつか」

俺は今からもう一度眠れそうもないからいいんだけど。まさか彼方さんのほうから
提案されるとは……。意外だ。もう一度寝るのかと思つた。

「んふふ……洗濯して、それから二人でお出かけしよ？」

その微笑みの威力は凄まじいもので、セミダブルの魔力を弱めて、微睡みから抜け出
す選択を俺に選ばせた。

「——決まりだねえ」

「俺まだなにも言っていないんだが」

「顔見ればわかるよ？ 貴方がなにを考えてるか、なんて」

したり顔の彼方さんが先に身体を起こした。彼女の髪が鼻をくすぐった。寝起きの整っていないその様を目で追って、それから美しいと思った。

手を差し出してきて、早く起きてと誘ってくる。早く遊ぼう、と俺を引っ張って連れて行くこうとしていた。

その力の流れに従って、ベッドから抜け出す。フローリングの冷たさが足の裏を突き刺した。怯むことなく、一步一步進む。床を叩く音が二人分。

「さあ、お洗濯頑張ろ〜！」

「おー……」

やる気がないわけじゃない。ワイシャツの裾がゆらゆらと揺れるのが気になってチラと視線が向かってしまい、どうにも気抜けた返事になってしまった。よくない。目に毒だ。早く洗濯しないと。昨日みたいに獣にならないうちに。

「貴方はほんつとにえつちだねえ」

……はい。その通りです。

なにも言い返せないまま、脱衣所に辿り着く。さて洗濯に取り掛かろう——とその前に、気になることがあったので、彼方さんにぶつけてみる。

「なんで俺の顔見ただけで考えてることわかったの」

彼方さんは自信満々な顔を向けてきた。

「——だって、大好きだから」

今日はいいい洗濯日和になりそうだな——とどうでもいいことをふと考えた。そうでもしないと、こういう関係になつてからしばらく経つものにも関わらず顔が林檎になりそうだった。